

研究紀要

令和6年度

第48号

静岡県博物館協会 研究紀要 第48号



静岡県博物館協会 研究紀要

第48号／令和6年度

表紙／静岡平和資料センター水難資料
救済活動風景

目次

02	洋画家が書いた「ビュッフェ」 関口俊吾の記述と戦後日本に於けるベルナール・ビュフェの受容	ベルナール・ビュフェ美術館	福岡 仁
12	静岡近代美術年表稿 昭和戦後編 11		立花義彰
30	新たなる学校連携の試み -オンライン授業の実践例-	掛川市二の丸美術館	飯田杏子
34	対話型鑑賞の医療現場での活用に向けた 美術館学芸員と医療従事者の連携 -第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会への参加を通して-	浜松市美術館	島口直弥
42	令和4年9月 台風15号被害での文化財レスキュー ～静岡平和資料センター水難資料救済活動について～ まとめ報告	特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会	友田千恵
47	2023(令和5)年度 第1回講習会 袋井市・森町 史跡視察(報告)	袋井市教育委員会(静岡県博物館協会事業推進グループ) 浜松市美術館(静岡県博物館協会事業推進グループ)	白澤 崇 島口直弥
49	2023(令和5)年度 第2回講習会 文化財救済と史料ネット(報告)	岐阜県美術館 静岡文化芸術大学 浜松市博物館(静岡県博物館協会事業推進グループ)	廣江泰孝 西田かほる 橋本充悠
52	突撃!となりのミュージアム! Vol.4 -「様々な分野の学芸員が 業務の悩みを語る」篇-(報告)	掛川市二の丸美術館 浜松市美術館(静岡県博物館協会事業推進グループ) 袋井市歴史文化館(静岡県博物館協会事業推進グループ) 袋井市歴史文化館 袋井市歴史文化館 静岡県立美術館(静岡県博物館協会事務局)	飯田杏子 島口直弥 白澤 崇 杉山侑暉 高塚真之 薄田大輔
69	江戸時代における災害復興と災害情報伝達 -北原川村(現袋井市国本)と 西楽寺(袋井市春岡)の元禄地震・宝永地震-	袋井市歴史文化館	杉山侑暉
70	2024(令和5)年度 静岡県博物館協会 役員会、総会、事業報告		
72	静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程		

洋画家が書いた「ビュッフェ」 関口俊吾の記述と戦後日本に於けるベルナール・ビュフェの受容

ベルナール・ビュフェ美術館 福岡仁

問題提起
戦時下の記述
表記の変遷
取材する画家:ビュフェのテーマ展
結論

問題提起

1950年から60年代初頭にかけての日本に於いて、同時代の他国の芸術潮流は批評家もさることながら、海外を拠点に活動する画家、所謂エトランジェによって伝えられた¹。その中の一人に、関口俊吾（神戸、1911-2002）と云う洋画家がいる。彼は、画業と並行して新聞社の特派員の様に、今まさに異国で興隆するアートシーンを本国へと伝達しつつ、第二次大戦前夜から戦後にかけて、日本に於けるフランス美術の受容の一端を担ったのだった²。

そうした関口の記事を紐解くと、彼がベルナール・ビュフェ(Bernard Buffet, 1928-1999)というフランス人画家の記事を多く書いていた事に気付かされる。ビュフェは戦後のフランスに於いて、19歳の時に批評家賞を獲得したことで富に知られる様になった具象画家で、日本では早くも1950年8月から美術雑誌を通じて受容が始まっていた³。フランスのみならず、ビュフェは同時代の日本に於いても認知されていたが、それに多大な貢献をしたのが関口に他ならない。

関口の記述にビュフェが多く登場することは、ベルナール・ビュフェ美術館(以下、ビュフェ美術館と略記)が2017年に刊行した『ベルナール・ビュフェ再考』⁴で初めて言及され、その後、ビュフェ美術館の開館50周年記念展『偉才の行方』のカタログに掲載された文献表に於いて、情報の更新が行われた⁵。しかし、前者が触れた資料はごく僅かだった事に加え、今日の研究状況からすると訂正を必要とする箇所も存在する⁶。後者は文献表と言う性質上、記述の内容

に踏み込むことはなかった事に加えて、見落とされている文献も散見される⁷。

一方、関口自身に関する研究は、1997年、神戸市立小磯記念美術館で開催された回顧展を皮切りに、蓄積がなされてきた⁸。2003年にはジャーナリストの池村敏郎によって、第二次大戦中の関口の足跡が明かされた⁹。2021年にはベトナム近代美術史が専門の二村淳子によって、フランス領インドシナ時代に於ける関口の活動が¹⁰、2022年には第二次世界大戦下の人的交流を研究する大堀聰によって、在仏邦人引き上げに際する関口の遍歴が詳にされた¹¹。しかし、こうした先行研究では、時代に関して言えば専ら第二次大戦下が対象となり、分析の対象はこの時期の関口の行動遍歴に限定されているため、戦後になされた関口の文筆業に関してはほとんど触れられてこなかった。

以上の状況を鑑みて、本論は終戦以降を主たる考察の範囲とし、関口の文筆家としての側面に光を当てる事で、彼が戦後日本に於けるビュフェ受容に深く関わっていたことを詳にしたい。

戦時下の記述

まずは関口の経歴を、簡単に確認しておこう。

関口俊吾は1911年1月1日、十五銀行の副頭取であった関口高次の次男として兵庫県神戸市に熊内町(現、神戸市中央区)に産まれた¹²。須磨浦学園の通っていた折に絵画への興味を育んだ関口は、1931年、京都の関西日仏学館でフランス語を学ぶ傍ら、鹿子木孟郎(岡山、1874-1941)に油絵を習い、画家としての道を歩み始めた。鹿子木のもとで画力を磨いた関口は早々に京都市展への出品を決め、日仏学館でも優秀な成績を収めた褒賞としてフランス政府給付留学生の権利を獲得した。1935年、関口はパリの国立高等美術学校(Ecole des Beaux-Arts)で学ぶ為に神戸港

から渡仏¹³。鹿子木の紹介でレイ・ロージェに師事した関口は、1937年にサロン・ドートンスに初入選し、画壇へのデビューを果たす。1941年にはエコール・デ・ボザールを卒業するものの、海軍府よりヨーロッパの残留邦人引き上げが通達された為、3月16日にスペインはバスクのビルバオ港から特務艦浅香丸で帰国、4月29日に横須賀港にて日本の地を再び踏んだ¹⁴。1951年には田淵安一、金山康喜等と共に再びパリへと戻り、画業の拠点とした。

関口は画家としての活動と並行して早くから文筆業も行っていた。『関口俊吾回顧展』に掲載された文献表を確認すると、関口が初めて発表した文章は、1935年7月24日、初の渡仏に際して神戸新聞へ寄稿した「洋画界の改革志しパリー[ママ]へ絵画修行」であるようだ¹⁵。その後、6年を経た1941年、関口の文筆業は俄に忙しくなる。最後の残留邦人だった事を理由に、関口にはナチス・ドイツ占領下のパリに関する多数の執筆依頼が無い込んだからである。例えば、同年の7月には『現地報告』に於いて、ナチス・ドイツに占領されたパリの様子を自身の体験に基づいて綴っている¹⁶。翌年の1月には、『変貌の欧州』と題した単行本を発売し、第二次大戦下のフランスに関して詳述した¹⁷。

戦中の関口による記事は戦争に関係するものだけではなく、美術に就いて綴ったものも少なくない。1941年9月には『新美術』¹⁸、10月には『国画』¹⁹でそれぞれ占領下に於けるフランスの美術政策の記事を書いている。7月の『みづゑ』には留学先のエコール・デ・ボザールを紹介した記事を²⁰、12月の『新美術』には、戦時下には似つかわしくない、フレスコ画の技法を解説する文章も書いていた²¹。

1942年、満州を視察した関口は、現地の様子を『現地報告』²²や『観光』²³、『造形教育』²⁴、『風景』²⁵などの雑誌で報告している²⁶。1943年、関口はフランス領インドシナに藝術担当官として赴き、同地で終戦を迎えた²⁷。

表記の変遷

管見の限り、戦後に関口が発表した最も早い記事は1948年12月、『旅』に掲載した旅行記ではないと思われる²⁸。この記事を皮切りに、関口は再び雑誌や新聞に文章を発表する様になるが、その時、取り分け多くの紙幅がベルナール・ビュフェの為に割かれたのだった。

関口が初めてビュフェに言及した記事は、1950年9月発売の『みづゑ』に掲載した「第一回青年画家展」という記事だと思われる。

この青年画家展(Le Salon des Jeune Peintres)は、美術記者で批評家でもあったピエール・デカルグが、批評家のジャン・ブーレの手を借りながら立ち上げた戦後のサロンである²⁹。その第一回目となる展覧会が1950年1月26日から2月20日までギャラリー・デ・ボザールで開催された。サロンの名称が示す通り、若手の発表の場となることが主たる目的とされ、出品作家には当時22歳だったビュフェも含まれていた。関口は以下の様に綴っている。

若い人達だけのサロンが生まれ一月末から二月末にかけてガल्लीー・ボザールで開催された。批評家ジャン・ブーレ氏は長文の批評と若い藝術家達への忠言を新聞紙上に載せている。それによると、この展覧会で見られる大きな傾向はここ数年來叫ばれている主題シユジュに歸れという方向の絵が多い事を上げており、ブーレ氏に取り上げられている画家達は『L'homme-temoins』の仲間達 Loyon, Buffet, Minauxの超ローマン的レアリズムとも称すべきグループであり、彼等は理論的エスプリにセン細[ママ]な神経を働かせ、フランス傳統のプラスチックな文化の長所を生かしており、一方 Rebeyrolle, de Gallare, Thompson, La Ruche等 マティエールの美しさとセンスの豊かさで認めている。³⁰

関口が『みづゑ』に掲載した記事は、この最初の青年画家展に際して、ブーレが『アール』誌に掲載した批評文を要約したものである³¹。そこでビュフェは「オム・テモワン(Homme Témoin)」の一員として「超ローマン的レアリズム」の傾向を持つ作家として紹介されている³²。この見解は1951年1月に『アトリエ』に発表した「フランスに於ける近代絵画への反省」と言う文章でも、そのまま引き継がれた³³。次に関口は1952年の『みづゑ』1月号に掲載した「秋のバリ美術展」で、1951年10月に開催されたサロン・デ・チュイルリーに於いて、若手にも関わらずビュフェが参加していることを伝えた³⁴。

ところで、上記で採り上げた1950年9月から1952年1月までの関口の記事を比較してみると、ビュフェの表記が安定してないことに気付かされる。「第一回青年画家展」では

「Buffet」、「フランスに於ける近代絵画への反省」では「ビュフェ」、「秋のバリ美術展」では「ビュフェー」と記されている。恐らく今日の日本で一般的に流通している「ビュッフェ」と言う表記が、関口の記事で初めて用いられたのは1952年の『みづゑ』5月号で発表した「早春のバリ美術展」と言う記事に於いてである³⁵。この文章の検討に入る前に、ベルナールの苗字の表記に関してまとめておこう。

筆者は戦後日本に於けるビュフェ受容の一端を明らかにするため、ビュフェが国立近代美術館（現、東京国立近代美術館）で個展を行った1963年までを対象として、同時代の定期刊行物の調査を行い、ビュフェに言及した資料を新たに174件確認した³⁶。この調査によって発掘した資料を、ビュフェの表記の問題と絡めてみると、以下の様な変遷を確認することができる。

ビュフェを日本に紹介した最初の人物は、批評家の土方定一とコレクターと言う立場で文筆業も手がけた和田定夫である。両者がビュフェに就いて触れたのは奇しくも同じタイミングで、1950年の『アトリエ』8月号に発表した文章に於いてであった³⁷。その際に土方は、ベルナールの苗字を「ブッフエ」と記している。反対に和田は「ビュッフェ」の表記を既に採用している。後者が「Buffet」の邦訳としてこの表記を用いたのは、単純にfが二つ重なっているからだろう。今日まで定着した「ビュッフェ」と言う表記を最初に用いたのは、和田だった。そして、この表記は同時代の書き手たちの間にも浸透してゆく。和田の記事が書かれた1ヶ月後、洋画家の荻須高德はパリのアート・シーンを伝える文章を書いているが、そこでもベルナールの苗字は「ビュッフェ」と記されていた³⁸。

この表記が日本で広まる契機の一つを担ったのは、サロン・ド・メ日本展（以下、日本展）だと思われる³⁹。この時、ビュフェは日本展に参加しなかったが、その不在を嘆く形で画家や批評家の文章に登場したからである。「5月のサロン」と言う名を持つこの団体は、青年画家展と同じ戦後に興隆したサロンの一つで、1945年に発足した。1951年2月には、日本橋三越を会場としてサロン・ド・メの展覧会が開かれ、特集が各美術雑誌で組まれる反響を呼んだ。この時、ビュフェの不在を嘆いたのが、画家の末松正樹や詩人で批評家としても活躍した瀧口修造である⁴⁰。そして、両者ともベルナールの苗字として「ビュッフェ」を採用していたのである。事態を複雑にするのは和田の文章で、彼も日本展に関する文章を書いていたが、そこでは「ビッフエ」と表記

されていた⁴¹。和田は文中で二度この表記を使用しているため、単なる誤植とは思われない。加えて、日本展の記事を発表した同月、和田は『みづゑ』にも「パゼンの〈青年画家の探求〉に就いて」と言う記事を寄せているが、そこでは「ブッフエ」と記しており、またもや異なる表記が採用されている⁴²。更に、彼は1951年の4月から『みづゑ』で「現代フランス画家論」と言う連載も始めているが、この連載の第4回目に於いて、和田は副題として「ビュッフェとミノー」を掲げている⁴³。この文章は、管見の限り、戦後日本に於いて初めてビュフェを題名に掲げた文章である。そして、表記は彼が最初に採用した「ビュッフェ」に戻っている。勿論、和田の文章の後にも表記の混乱は少なからず起こっていた。土方は1951年9月の『美術手帳』に於いて、アンドレ・ミノーに関する文章⁴⁴を発表したが、そこでは1950年の文章とは異なり「ブッフエ」が採用され、画家の田淵安一は1952年の文章で「ビュッヘ」⁴⁵と記述している。しかし、こうした混乱を経て、ビュフェの作品が始めて展示された1953年の第二回日本国際美術展までに、彼の苗字である「Buffet」は「ビュッフェ」の表記に収斂していった。関口の表記の揺れも、こうした同時代の混乱と変遷を背景としていた。猶、筆者が所属するベルナール・ビュフェ美術館でも、過去にはこの表記を採用していたが、現在では「ビュフェ」を採用している。通例に反してこの表記が選ばれた理由は定かでないものの、当館の学芸員である杉崎有祐氏の調査によって、1979年を境に「ビュッフェ」が「ビュフェ」に変化していることが判明した。この年は当館が一般財団法人化された年であり、恐らくこの財団化を契機として、よりフランス語の発音に近い表記に見直されたものと推察される。本論でも、当館の方針に従い、現地の発音に近い「ビュフェ」を表記として採用する。

取材する画家：ビュフェのテーマ展

関口は既に触れた「早春のバリ美術展」以降、表記を「ビュッフェ」に統一させ、この若き具象画家を書いてゆく。この文書は、表題こそパリの展覧会評の様相を呈しているが、実際にはビュフェの展示に紙幅の大半が割かれており、個展評の様相を呈していた。その冒頭で、関口は以下のように記している。

ビュッフェの個限の招待状を見た時一寸驚かされた。というのはセヌ河左岸と右岸の画廊で同時に開催され、しかも右岸のドルーアン・ダビット画廊では油絵三点、左岸のビスコンティ画郎ではデッサン21点とあったからだ。特に油絵三点とは?ところが行って見て更に驚いた。その三点が何れも少くとも[ママ]、500号、或は800号位の大きさのもので、キリスト受難三面がさしも広いダビット画郎の正面、左右の壁面をうずめている。⁴⁶

ビュフェは1951年から油彩画をドルーアン＝ダヴィッド画廊で、水彩画とデッサンをモーリス・ガルニエが経営するヴィスコンティ画廊で、同時期に展示する事をはじめた⁴⁷。1952年には、この二つの画廊に於いて、後にテーマ展とも呼ばれる各年の個展をスタートさせる。その第一回目を飾ったのが、関口の取材した「キリストの受難」展であった。この時、彼の代表作にも数えられる《キリストの受難：管刑》(GMG, 150; FDBB, pp.258-259: 静岡県、ベルナール・ビュフェ美術館)⁴⁸ [fig.1]、《キリストの受難：磔刑》(GMG, 153; FDBB, pp.260-261: パリ、ベルナール・ビュフェ財団) [fig.2]、《キリストの受難：復活》(GMG, 156; FDBB, pp.262-263: 静岡県、ベルナール・ビュフェ美術館) [fig.3]の3枚の大作が、ドルーアン＝ダヴィッド画廊に飾られた。

題名で示されている通り、主題は伝統的なキリスト教の逸話を典拠としているが、ビュフェが作り出した図像が通例に反していることを、関口は次の様に記述している。

問題の三幅対はキリスト磔刑から昇天までを扱ったもので敬虔なカトリック信者なら恐らく正視するに堪えないであろう。針金の様に細い、しかも緑暗の猿股をはかされたキリスト、エプロンがけの聖母、薄汚れた白壁、およそ従来の宗教画の通念とは趣を異にしている。

そして、こうした身体表現や衣装の設定は、観者に「救いがたい世紀の不安、惨忍、苛責」を喚起させると述べる。続く文章では、ビュフェの経歴や逸話に話が向く為、この一文は「キリストの受難」展に於ける関口の結論ともなっていた。

不安や苛責を喚起する絵画と言う評価を、関口は当時流行していたジャン＝ポール・サルトルの実存主義と接続して行く。

「キリストの受難」展から2年を経た1954年、ビュフェは「室内」をテーマに個展を行ったが、その時の個展評に於いて、内覧会の折にも十全と来場者を持ってなそうとしない内向的なビュフェを、社交的なミノーと対比させながら、以下のように述べる。

ミノーの絵も決して明るい吸い絵ではないがビュッフェの絵から受ける様子を世紀末的な、いかにあがいても抜け出られない様な、たとえて云うならばサルトルの「出口なし」から受ける、死ねどもいつまでも宿命的な現生の苛責がつきまとう…と云う様な悲劇は感じられない。⁴⁹

関口が言及した『出口なし (Huis Clos)』は、サルトルが1944年に発表した戯曲である⁵⁰。舞台はホテルの一室の様な閉ざされた空間で、そこに一人の男と二人の女が順々に登場する。話が進むにつれ、全員が既に死んでいることが明らかになり、且つ三人とも自身がいる場所を地獄だと考えていることが示される。ミノーとの比較に際して、関口がわざわざサルトルの戯曲を引き合いに出したのは、既に述べた様に、ビュフェの個展のテーマも「室内」だったからだとして推察される⁵¹。関口は以下の様に、展覧会を描写している。

私が先ず第一歩を会場にはこんで驚いた事は、今まで彼の絵はデッサンではあるが色がないと云う事が通り相場になっていた。それが又彼の特徴でもあり、非難される点でもあった訳だが…。今回は強烈な赤、緑、黄、紫等をデコラティブに室内の諸道具に使用している。裸像は相変わらずモノクロームだが、そのアウトラインをくまどる、ふれると切れる様な黒い線と、確かなデフォルメによって全体としては完璧なエキリーブルを保っている。

関口の記事にも図版掲載された《室内：恋人》(GMG, 208; FDBB, p.394: パリ、ベルナール・ビュフェ財団) [fig.4]は、個展に出品された作品の特徴を余す事なく伝えている。場面はどこかの室内、装飾を施された緑色の壁紙、それを隠す様に覆う黄色い布、形の異なる二脚の赤い椅子、そこに眠った様に座る裸の男と女。こうした画中の要素が、関口の文章にも登場したサルトルの戯曲と無関係に思われないのは、『出口なし』に於いても、後半で男と女は裸体になり、

最終的には憔悴したように「ぐったり」⁵²と椅子に凭れ掛かるからである。但し、それは必ずしもビュッフェがサルトルの作品に基づいて、「室内」のシリーズを制作したことを意味しない。あくまでも関口が、二つの作品の間に共通する要素を認めたと見るべきだろう。ビュッフェの作品を実存主義と結ぶつける事は、サロン・ド・メ日本展のカatalogに於いて、ドリヴァルが既に行っており、関口独自の見解では決してない。しかし、前者の文章が漠然とした指摘であるのに対して、関口の文章では具体的な作品名を用いながら、実存主義とビュッフェの作品との関係性が示唆されている点で、一步踏み込んだ指摘を行ったと見做す事はできるだろう。ところで同じパリを活動の拠点とし、各年の個展を都度見ていたにも関わらず、1954年の時点で関口は、ビュッフェと直接会った事がなかった。二人が邂逅を果たすのは、1955年に行われた「戦争の恐怖」展の時である⁵³。その時の印象を、関口は以下の様に綴っている。

さて、約束の日、定刻前から会場で待っていると、果たして時間通り秘書氏をしたがえて、長身のビュッフェが寸分のスキのない服装で現れた。どう見ても、こんな絵を描く男とは思われない。およそエカキとは縁の遠い感じの青年のである。外務省の書記官か、銀行か何処かの青年社員と云った印象を受けた。⁵⁴

関口の記事に登場する秘書は、当時公私に渡ってビュッフェのパートナーであったピエール・ベルジェの事だと思われる。この文章が重要なのは、作品に関するビュッフェの証言が含まれているからである。関口は、寡黙なビュッフェを社交的なミノーと対比させた後で、以下の様に語る。

彼から聞き得たところを要約するとこれらの絵は全部六ヶ月間で描き上げた。7米～3米の大作は描きはじめたら約一ヶ月で仕上がった。尤も相当強烈に描きつけてではあるが。モデルは使用せず、戦争の写真を参考にはしたが、全部想像でまとめ上げた。背景の風景は自分の住んでいるオート・プロヴァンスそのまま大して変えていない。プロヴァンス地方は大体荒地で季節風が吹き、冬は雪にお、われて一般の人々が考えるように明るい土地ではない。これらの絵のバックに適当である。⁵⁵

生前、ビュッフェは作品に関する言説をほぼ残さなかった。そうした状況にあって、制作の期間や方法、背景のモデルとなった場所を、ビュッフェ自身が語ったとする関口の証言は、極めて重要である。1955年の個展でビュッフェは戦争を主題に作品を描いたが、それらは夕暮れか朝焼けの風景に裸体の人物が組み合わされた奇妙なものであった[fig.5]。ビュッフェが55年に発表した連作に於いて、何故にこの様な奇妙な設定を用いたのかは一層の調査を要するが、少なくとも背景がプロヴァンス地方、恐らくは当時ビュッフェがアトリエを構えていたナンス周辺の景色に基づいている事は、作品を解釈するにあたって、看過できない情報と言えよう。

結論

関口の文章は批評的な精神や分析的な視座を持っている訳ではなく、どちらかと言えばエッセイ風の紹介文と言った方が適当だろう。1956年に行われたサーカス展を伝えた文章では、ビュッフェの作品を「看板」⁵⁶と形容するなど、悪し様な軽口も時折現れる。しかし、その一方で既に見た様に、関口の文章には、具体的な作品名でもって一步踏み込んだ解釈やビュッフェ自身による作品解説など、重要な情報が含まれてもいた。サーカス展の文章では、この展示のオープニングにベルナール・ロルジュやアントニ・クラヴエ、ジャン・カルズ、ジャン・コクトー、荻須高德が参加した事を伝えており、芸術家たちの交流の一端を知ることができる⁵⁷。

サーカス展の後も、関口は足繁くビュッフェの個展に通い、1958年のジャンヌ・ダルク展⁵⁸、1959年のニューヨーク展⁵⁹、1960年の鳥展⁶⁰、1961年のアナベル展⁶¹と言った様に、ビュッフェのテーマ展を日本へ伝え続けた。彼の記事には、カラーでこそないものの図版が常に掲載されており、当時ビュッフェの作品を知る機会は今日と比してひどく限定的だった事を思えば、ビュッフェの最新作を日本へ伝え続けた事は、戦後日本に於けるビュッフェ受容を考える上で重要だろう。

最後に、関口は展覧会と言うレベルでもビュッフェの受容に関わっていた事を確認しておきたい。1956年7月3日から7月28日まで、プリヂストン美術館で日仏具象派美術展(以下、日仏具象派展と略記)が開催された⁶²。この展覧会は、当時のフランスに於ける具象画の動向を日本に紹介する為

に企画されたもので、関口は創設メンバーに名を連ねていた⁶³。1958年には第二回目を開催し、その時に名称を国際具象派美術展(以下、具象派展)に変更している。この展覧会の意義の一つは、その創設理念に従って具象絵画に再び光を当てたことだった。例えば、瀬木慎一は「日仏具象派展が、いつのまにか国際具象派展というふうに見板を大きくした。そのせいかどうか知らぬが、具象絵画の問題がふたたびクローズ・アップされている」と当時の状況を語っており、瀬木が言う様に明確な影響関係は今後立証される必要があるものの、この展覧会が当時の日本で具象という問題に少なからず影響を及ぼしていた、と考える事は不自然でないだろう。

加えてビュッフェ受容と言う観点でも、具象派展は看過できない役割を担っていた。ビュッフェは最初の展示(日仏具象派展)にこそ出品していないものの、2回目からこの展示に参加し、最後の開催となった1964年の展示まで継続的に出品を続けたのだった。1950年代から60年代初頭の日本に於いて、ビュッフェは同時代の定期刊行物で頻繁に紹介されたが、作品を実見できる機会は極めて限定的だった。彼の作品が初めて日本で展示されたのは1953年の第2回日本国際美術展(以下、国際展)の時である⁶⁴。その後もビュッフェは第6回目までこの展示に参加した事で、日本で実見できる機会は増えたものの、国際展は2年毎の開催であったため、毎年作品にふれる事は叶わなかった。こうした状況の中で、具象派展が発足した事によって、結果として各年でビュッフェの作品が日本へと招聘される事になったのである。とりわけ、ビュッフェが第2回具象派展に出品した《カサゴ》(FDBB, p.295:所在不明)は、その年の『みづゑ』で討論会の開催を促し、ビュッフェ受容に確かな足跡を刻んでいる⁶⁵。

関口は『パリの水の味』の中で、具象派展の運営に携わった経験が、1963年に国立近代美術館で行われたビュッフェの個展に関わる契機となった、と語っている⁶⁶。関口は、この日本最初の国立館で行われたビュッフェ展に、コミッションナーとして参加していた。それは彼自身が述べる様に、具象派展の運営に携わる事によって形成された人間関係が大きな要因となったのだろうが、それに加えて、ビュッフェと直接対面した経験を持ち、更に当時ビュッフェと専属契約を結んでいたダヴィッド・エ・ガルニエ画廊と知己を得ていた事も、少なからず人事に影響を及ぼしたのだと推察される⁶⁷。

関口は洋画家としてのみならず、展覧会のコミッショナーとしても戦後日本に於けるビュッフェ受容に貢献していた。

そして、その実現へ導いたのは、彼が書いた「ビュッフェ」に纏わる一連の文章に他ならない。

¹関口以外にも、例えば荻須高德、田淵安一、末永正樹などが重要なエトランジェとして挙げられる。芸術家ではないものの、コレクターと言う立場で美術記事を執筆していた和田定夫も、戦後日本に於ける重要なエトランジェの一人だろう。

²関口自身が記した記事は、以下の文献表に明るい。無記名「参考文献等」『パリの詩情とロマン 色彩の巨匠:関口俊吾回顧展』(展覧会カタログ)神戸市小磯記念美術館、京都ギャラリー・オブ・アート・アンド・サイエンス、1997-1998年、141-142頁。この文献表を基に再調査を行い、筆者が確認した関口による芸術に関連した文献は、以下の通り。関口俊吾「パリ国立美術学校のコンクール」『みづゑ』春鳥會、1941年7月、77-82頁(以下、この文献は関口、1941年7月と略記);関口俊吾「獨逸占領下に於けるフランス文化一ヶ月の回顧」『新美術』春鳥會、1941年9月、第1号、51-56頁(以下、この文献は関口、1941年9月と略記);関口俊吾「戦争と藝術—フランスより帰りて—」『国画』教育美術振興会、1941年10月、第1巻第2号、10-12頁(以下、この文献は関口、1941年10月と略記);関口俊吾「フレスコ画法入門」『新美術』春鳥會、1941年12月、第4号、16-19頁(以下、この文献は関口、1941年12月と略記);関口俊吾「越南畫家を迎ふるの記」『新美術』春鳥會、1943年10月、第27号、86-87頁;関口俊吾「フランス藝術の動向」『日仏文化』能楽書院、1944年3月、第9号、508-512頁;関口俊吾「佛印の美術界」『美術』日本美術出版株式会社、1944年4月、第4号、36-38号;関口俊吾「パリの国立美術学校」『美術手帳』美術出版社、1949年1月、第13号、18頁;関口俊吾「烏か鳩か?」『文藝春秋』文藝春秋新社、1949年8月、第27巻8号、18-19頁;関口俊吾「アングルとドラクロアの握手」『美術手帳』美術出版社、1949年12月、第24号、19-22頁;関口俊吾「モーリスドゥニのセザンヌ論—セザンヌの古典主義について—」『BBBB』冬芽書房、1950年4月、44-49頁;関口俊吾「フランスの話題:《建設的な大芸術へ》ピニヨンのイタリア旅行、パリ国立美術学校の革新」『BBBB』冬芽書房、1950年4月、16-17頁;関口俊吾「保大帝の日日」『読売評論』読売新聞社、1950年6月、78-82頁;関口俊吾「パリ・あれやこれや」『古美術』古美術出版社、1950年8月、第1巻第2号、62-64頁;関口俊吾「フランスに於ける近代絵画への反省」『アトリエ』アルス、1951年1月、第288号、3-6頁(以下、この文献は関口、1951年1月と略記);関口俊吾「パリ再発見の記:モンパルナスの変貌、初夏の諸展覧会、二千年祭に賑うパリ」『美術手帳』美術出版社、1951年9月、第47号、42-46頁;関口俊吾「パリの映画館」『スクリーン』近代映画社、1952年2月、第7巻第2号、94-95頁;関口俊吾「Bando Kimié」『アトリエ』アルス、1952年2月、第303号、23-24頁;関口俊吾「パリ通信:戦後のアカデミー・ド・ラ・グランド ショミエール」『美術手帳』美術出版社、1952年4月、第55号、60-62

頁；関口俊吾「グレコの家―トレド紀行―」『美術手帳』美術出版社、1952年8月、第59号、37-39頁；関口俊吾「カルメンの国を訪ねて」『旅』日本交通公社、1952年12月、第26巻12号、66-69頁；関口俊吾「タジリの彫刻」『アトリエ』アルス、1952年12月、第313号、3-6頁；関口俊吾「ジャン・ヴィナイ」『みづゑ』美術出版社、1953年3月、第571号、48-52頁；関口俊吾「デュフィーの死：クラウヴェン氏との一問一答」『みづゑ』美術出版社、1953年6月、第574号、27-37頁；関口俊吾「フランス通信」『みづゑ』美術出版社、1953年8月、第576号、56頁；関口俊吾「マリオンのエシャルプ」『美術手帳』美術出版社、1954年3月、第79号、8-10頁；関口俊吾「新進作家ゲリエの仕事」『みづゑ』美術出版社、1955年5月、第598号、15-16頁；関口俊吾「パリ画壇の中堅 プレスマン訪問」『みづゑ』美術出版社、1956年5月、第610号、61-65頁；関口俊吾「抽象か具象か」『芸術新潮』新潮社、1956年11月、第7巻第11号、254-260頁；関口俊吾「パリの画商」『教育美術』教育美術振興会、1957年1月、第18巻第1号、26-29頁；関口俊吾「パリ画商訪問3：シャルパンティエ画廊」『みづゑ』美術出版社、1958年3月、632号、70-72頁；関口俊吾「パリの画商4：スタドラー画廊とジャック・マソール画廊」『みづゑ』美術出版社、1958年5月、第635号、59頁；関口俊吾「パリの画商5：ラ・ヴァンシー画廊」『みづゑ』美術出版社、1958年8月、第638号、65-67頁；関口俊吾「パリの画商：ヴェルゲン画廊」『みづゑ』美術出版社、1959年2月、第645号、41-42頁；関口俊吾「ロルジュ対ドリヴァルの裁判」『芸術新潮』新潮社、1960年7月、第11巻第7号、118-120頁；関口俊吾「パリのメルヘン：ちょっと色っぽい大人の話」広論社、1982年3月；関口俊吾「ジャコメッティの耳」『清春』清春芸術村「清春」出版部、1994年10月、23-25頁。関口が翻訳した芸術関連の文献は以下の通り。モーリス・バレス『エル・グレコ―トレードの秘密―』関口俊吾、三輪啓三訳、白水社、1943年5月；ウジェーヌ・フロマンタン「オランダ絵画紀行―過ぎし日の巨匠たち―」宝雲舎、1949年1月；モーリス・ドニ「新伝統主義の定義」関口俊吾訳『みづゑ』美術出版社、1949年7月、第524号、10-16頁；モーリス・ドニ「太陽」関口俊吾訳『みづゑ』美術出版社、1949年8月、第525号、19-23頁；ルイ・ウールチック『絵画の歴史』関口俊吾、三輪啓三訳、白水社、1952年1月。猶、関口が芸術に就いて語った記事の中でもビュッフェに言及した箇所のある記事に関しては、本論の註7を参照。

³土方定一「美術のヒューマニズムということ」『アトリエ』アルス、1950年8月、第283号、16-19頁（以下、この文献は土方、1950年8月と略記）；和田定夫「CAPRICIEUSEMENT 4：ピカソのレアリズム、ピカソとヴラマンク、タンギーの近作、Cabinet d'un amateur aujourd'hui、テレチコウィッチに就いて、其他」『アトリエ』アルス、1950年8月、第283号、36-38頁（以下、この文献は和田、1950年8月と略記）。土方と和田の文章は、ビュッフェを日本に紹介した最も早い記事だと思われる。

⁴無記名「資料から見るビュッフェと日本」『ベルナール・ビュッフェ再考』（展覧会カタログ）静岡県、ベルナール・ビュッフェ美術館、69-71頁。

⁵無記名「主要参考文献」『ベルナール・ビュッフェ：偉才の行方』（展覧会カタログ）静岡県、ベルナール・ビュッフェ美術館、2023-2024年、152頁。

⁶例えば「資料から見るビュッフェと日本」では、和田が1951年に発表した「ビュッフェとミノール」を、日本に於いてビュッフェが紹介された最初の記

事と位置付けているが、実際には註4で記した文献が存在する。

⁷註2と註5及ぶ註6のリストを基に追加で調査を行い、筆者が確認したビュッフェに言及のある関口の記事は以下の通り。関口俊吾「第一回青年画家展」『みづゑ』美術出版社、1950年9月、第539号、5頁（以下、この文献は関口、1950年9月と略記）；関口俊吾「フランスに於ける近代絵画への反省」『アトリエ』アルス、1951年1月、第288号、3-7頁（以下、関口、1951年1月と略記）；関口俊吾「秋のパリ美術展」『みづゑ』美術出版社、1952年1月、第557号、62-66頁（以下、関口、1952年1月と略記）；関口俊吾「早春のパリ美術展」『みづゑ』美術出版社、1952年5月、第561号、60-62頁（以下、この文献は関口、1952年5月と略記）；関口俊吾「ミノールを訪ねる」『美術手帳』美術出版社、1953年8月、第72号、49-51頁；関口俊吾「イヴォンヌ・モッテに会う」『美術手帳』美術出版社、1954年2月、第78号、69-73頁；関口俊吾「パリ・秋の展覧会」『みづゑ』美術出版社、1954年2月、第582号、48-54頁；関口俊吾「ベルナール・ビュッフェの個展」『みづゑ』美術出版社、1954年3月、第585号、55-57頁（以下、この文献は関口、1954年3月と略記）；末永正樹、関口俊吾「サロン・ド・メエを見る」『みづゑ』美術出版社、1954年8月、第588号、57-61頁；関口俊吾「ビュッフェとかたる」『みづゑ』美術出版社、1955年4月、第596号、62-63頁（以下、この文献は関口、1955年4月と略記）；関口俊吾、佐藤敬、田淵安一、土橋醇一「現代絵画の危機――ウォーターローにのぞむ抽象画家――」『みづゑ』美術出版社、1955年8月、第601号、13-19頁；関口俊吾「ベルナール・ビュッフェのサーカス展によせて」『みづゑ』美術出版社、1956年4月、第609号、55-56頁（以下、この文献は関口、1956年4月と略記）；関口俊吾、佐藤真一、難波田龍起、寺田春式、嘉門安雄「表現主義的傾向の深化」『みづゑ』美術出版社、1956年8月、第613号、40-48頁；関口俊吾、寺田春式、岡本謙二郎「日仏具象派展：新しい写実のために」『芸術新潮』新潮社、1956年8月、189-197頁；関口俊吾「ビュッフェの静物によせて」『みづゑ』美術出版社、1956年9月、第614号、55頁；関口俊吾「パリの画商」『教育美術』教育美術振興会、1957年1月、第18巻第1号、26-29頁；関口俊吾「パリの画商・I：ダヴィッド・ガルニエ画廊」『みづゑ』美術出版社、1957年10月、第627号、47-56頁（以下、この文献は関口「パリの画商・I」1957年10月と略記）；関口俊吾「フランス画壇の怪物 ロルジュのバラック」『美術手帳』美術出版社、1957年10月、140-142頁；関口俊吾「ビュッフェの近況」『みづゑ』美術出版社、1958年5月、第635号、59頁（以下、この文献は関口、1958年5月と略記）；関口俊吾「ビュッフェの〈ニューヨーク風景〉」『みづゑ』美術出版社、1959年5月、第648号、59-61頁（以下、この文献は関口、1959年5月と略記）；関口俊吾「パリの画商：クルスポー画廊」『みづゑ』美術出版社、1959年7月、第650号、42-43頁；関口俊吾「パリの画商：アール・ヴィヴァン画廊」『みづゑ』美術出版社、1959年11月、第655号、58-60頁；関口俊吾「ビュッフェの新作展〈鳥〉をみて」『みづゑ』美術出版社、1960年5月、第661号、45-46頁（以下、この文献は関口、1960年5月と略記）；関口俊吾「ビュッフェの個展〈アナンベラ〉」『みづゑ』美術出版社、1961年5月、第673号、72-73頁（以下、この文献は関口、1961年5月と略記）；関口俊吾「ビュッフェの横顔」『別冊みづゑ』美術出版社、1963年5月、No.36、60-61頁（以下、この文献は関口、1963年5月と略記）。関口俊吾「パリの水の味：六十年をパリで暮らして」文化

出版局、2000年、75及び102頁（以下、この文献は関口、2000年と略記）。猶、以下のインタビューでも関口はビュッフェに言及している。無記名〈「パリの神戸っ子」関口俊吾：ビュッフェ展と共に〉『神戸っ子』服部プロセス株式会社、1963年7月、第28号、14-15頁；無記名「編集長インタビュー、〈関口俊吾回顧展〉に寄せて：元気だから絵が描ける」『神戸っ子』服部プロセス株式会社、1997年11月、第438号、32-35頁。

⁸「パリの詩情とロマン 色彩の巨匠：関口俊吾回顧展」（展覧会カタログ）神戸市小磯記念美術館、京都ギャラリー・オブ・アーツ・アンド・サイエンス、1997-1998年。以下、この文献は「関口俊吾回顧展」1997-1998年と略記。

⁹池村敏郎「戦争とパリ：ある二人の日本人の青春 1935-45年」彩流社、2003年。

¹⁰二村淳子「関口俊吾のベトナム ――1944年のハノイ、サイゴンでの展覧会を中心に――」『白百合女子大学研究紀要』2021年、57巻、89-116頁。以下、この文献は二村、2021年と略記。

¹¹大堀聰「関口俊吾―特務艦で帰国した日本人画家」『第二次世界大戦下の欧州邦人（フランス編）』銀河書籍、2022年、146-192頁。以下、この文献は大堀、2022年と略記。

¹²関口の経歴は、以下の文献を参照。『関口俊吾回顧展』1997-1998年。

¹³以下の文献には、関口がパリに渡仏する際の船上写真が掲載されている。無記名「編集長インタビュー、〈関口俊吾回顧展〉に寄せて：元気だから絵が描ける」『神戸っ子』服部プロセス株式会社、1997年11月、第438号、33頁（以下、この文献は無記名、1997年と略記）。

¹⁴関口の帰国の状況は以下の文献に詳しい。大堀、2022年。猶、関口は実際にアドルフ・ヒトラーを見た後に証言している。この点に関しては以下の文献を参照。

¹⁵『関口俊吾回顧展』1997-1998年、141頁。

¹⁶関口俊吾「獨軍占領下のパリ」『現地報告』文芸春秋社、1941年7月、98-103頁。以下の文献でも、関口はヒトラーを実見したと語っている。関口俊吾『パリの水の味』文化出版局、2000年、43-48頁。

¹⁷関口俊吾「変貌する欧州」皇国青年教育協会、1942年1月。

¹⁸関口、1941年9月。

¹⁹関口、1941年10月。

²⁰関口、1941年7月。

²¹関口、1941年12月。

²²関口俊吾「満支畫信」『現地報告』文芸春秋社、1942年9月、58-61頁。

²³関口俊吾「満支見聞記」『観光』日本観光連盟、1942年9月、第2巻第9号、10-11頁。

²⁴関口俊吾「哈爾濱便り」『造形教育』教育美術振興会、1942年9月、第8巻第11号、40-41頁。

²⁵関口俊吾「熱河昌徳」『風景』日本風景協会、1943年1月、第10巻第1号、40-41頁。

²⁶関口はこの満州旅行に際して訪れた北京やモンゴルの様子も報告している。関口俊吾「張家口」『風景』日本風景協会、1943年3月、第10巻第3号、17頁；関口俊吾「新緑の北京と大同」『風景』日本風景協会、1943年5月、第10巻第5号、16-17頁；関口俊吾「包頭」『風景』日本風景協会、1943年8月、第10巻第8号、18頁。

²⁷フランス領インドシナに於ける関口の動向は以下を参照。二村、2021年。

²⁸関口俊吾「ギリシヤとスカンヂナビヤの旅」『旅』日本交通公社、1948年12月、第22巻12号、18-19頁。

²⁹Francis Parent, Raymond Perrot, *Le salon de la jeune peinture, Une histoire : 1950-1983*, Montreuil, J.P., 1983, pp.9-10.

³⁰関口、1950年9月、5頁。

³¹ブーレの記事の書誌情報は以下の通り。Jean Bouret, "Le premier Salon des Jeunes Peintres", *Arts*, 27 janvier 1950, p.1, p.4（以下、Bouret, 1950 と略記）。

³²ブーレが実際に使用した言葉は「réalisme néo-romantique」で「新しいロマン主義的傾向を持つレアリスム」と言う意味だった。Bouret, 1950, p.4.

³³関口、1951年1月、6頁。

³⁴関口、1952年1月、62頁。

³⁵関口、1952年5月。

³⁶以下の拙論を参照。福岡仁「戦後日本に於けるベルナール・ビュッフェの受容：1950-1963」『成城美学美術史』第31号、2025年3月。（以下、この文献は福岡、2025年と略記）。

³⁷土方、1950年8月、6-19頁；和田、1950年8月、36-38頁。

³⁸荻須高德「巴里通信：マチスとサロン・ド・メイ」『アトリエ』アルス、1950年9月、第284号、31頁。

³⁹サロン・ド・メ日本展に関しては、以下を参照。ベルナール・ドリヴァル「日仏交歓展に寄す」末松正樹訳「日仏美術交換 現代フランス美術展：サロン・ド・メ日本展」（展覧会カタログ）毎日新聞社、1951年、刊行月記載なし、頁数記載なし；林洋子「サロン・ド・メとアンフォルメル：1950年代のフランス現代美術の日本への影響」『東京都現代美術館紀要』東京都現代美術館、1998年、第3号、24-31頁。

⁴⁰末松正樹「サロン・ド・メエの人々」『芸術新潮』新潮社、1951年3月、第2巻第3号、75-79頁；末松正樹「プロメテの解縛」『みづゑ』美術出版社、1951年3月、第545号、7-9頁；瀧口修造「サロン・ド・メエを迎えて」『みづゑ』美術出版社、1951年3月、第545号、3-6頁。

⁴¹和田定夫「サロン・ド・メイについて」『アトリエ』アルス、1951年3月、第290号、52-53頁。

⁴²和田定夫「バゼンの〈青年画家の探求〉に就いて」『みづゑ』美術出版社、1951年3月、第545号、13頁。

⁴³和田定夫「現代フランス画家論4：ビュッフェとミノール」『みづゑ』美術出版社、1951年7月、第551号、21-27頁。

⁴⁴土方定一「アンドレ・ミノール」『美術手帳』美術出版社、1951年9月、第47号、8-10頁

⁴⁵田淵安一「巴里の窓VI――海外ニュース：ビュッへの大作」『アトリエ』アルス、1952年6月、第307号、4頁。

⁴⁶関口俊吾、1952年5月、60頁。

⁴⁷Pierre Descargues, "Aquarelles et peintures de Bernard Buffet", *Arts*, Paris, 02 fevrier 1951, p.4. ; Exh. cat., *Retrospective Bernard Buffet*, Paris, Le Musée d'Art moderne de la Ville de Paris, 2016-2017, p.21.

⁴⁸ビュッフェは生涯で約8,000点近い作品を制作し、同じ主題で構図を変化させたものも少なくない。題名のみで作品を同定する事は困難を極める為、カタログ・レゾネの番号も所蔵館の情報と共に付与する。ビュッフェのレゾネは、かつて彼が専属契約を結んでいたガルニエ画廊によって発行されたもの (*Bernard Buffet*, Paris, Maurice Garnier, 3 vol., 1986-2007) と、ベルナール・ビュッフェ財団によって現在も編纂が進められているもの (*Bernard Buffet: Catalogue Raisonné de l'Œuvre peint*, ed. Le Fonds de Dotation Bernard Buffet et la Galerie Maurice Garnier, Paris, 2 vol., 2019-2024.) の二種類存在する。前者は、今日的な研究状況からすると欠落した作品が多々見受けられ、後者は編纂の最中と言うこともあって、1958年の作品までしか纏められていない。加えて、後者では各作品にレゾネ番号が振られておらず、作品の同定に難がある。こうした状況を鑑みて、両方のレゾネに掲載が確認される作品には、レゾネ番号に加え頁番号を記載する。片方のみの場合は、レゾネ番号乃至頁番号を記載する。双方に掲載がない場合は、何も記載しない。猶、ガルニエ版はGMG、財団版はFDDBと略記する。

⁴⁹関口、1954年3月、55頁。

⁵⁰ジャン=ポール・サルトル「出口なし」『サルトル全集 第8巻』伊吹武彦訳、人文書院、1952年2月、101-150頁 (Jean-Paul Sartre, *Huis Clos*, Paris, Gallimard, 1947)。猶、この文献はサルトル、1952年2月と略記。

⁵¹関口、1954年3月で1954年の個展のテーマは「女」とされているが、正しくは「室内」である。

⁵²サルトル、1952年2月、150頁。

⁵³関口は1963年に発表した文章で、ビュッフェと初めて会ったのは1954年の「室内」展の時だと回想しているが、当時の文章を参照する限り、それは誤りだと思われる。書誌情報は以下の通り。関口、1963年5月、61頁。

⁵⁴関口、1955年4月、62-63頁。

⁵⁵同上、63頁。

⁵⁶関口、1956年4月、56頁。

⁵⁷同上、56頁。

⁵⁸関口、1958年5月。

⁵⁹関口、1959年5月。

⁶⁰関口、1960年5月。

⁶¹関口、1961年5月。

⁶²『第1回日仏具象派美術展』(展覧会カタログ)日仏具象作家協会、朝日新聞、1956年(以下この文献は『第1回日仏具象派美術展』、1956年と略記)。このカタログに展覧会の開催場所や期間などは記載されていないが、以下の文献に当時の情報が記録されている。柳亮「朝日新聞社・日仏具象作家協会主催 日仏具象派美術展」『みづゑ』美術出版社、1956年8月、第613号、39頁。

⁶³『第1回日仏具象派美術展』、1956年、24頁。会員は他に小野末、里見明正、寺田春式、深谷徹、矢口洋、山本豊市が務めており、アンドレ・ミノー、ポール・アイズプリ、レイモン・ゲリエ、ロジェ・モンタネ、ジャン・ルイ・ヴィネなどフランスの画家も会員として参加して

いた。

⁶⁴ビュッフェがこの展示に出品した《化粧する女》(FDDB, p.149:パリ、ベルナール・ビュッフェ財団)は、同時代文献で多くの芸術家や批評家に言及された。この点に関しては福岡、2025年の第2章を参照。

⁶⁵柳亮、田中岑、藤井令太郎、五味秀男、斎藤正夫「研究討論：ビュッフェの〈魚〉をめぐって」『みづゑ』美術出版社、1958年3月、第632号、33-36頁。猶、この記事で作品名は《おこぜ》とされているが、原題はRascasseであるため、本論では《カサゴ》とした。

⁶⁶関口、2000年、102頁。

⁶⁷関口は、1957年からパリの画商をインタビューする連載を開始し、その第1回目でダヴィッド・エ・ガルニエ画廊を選んでいる。関口「パリの画商・I」1957年10月。その他の記事の書誌情報は、註2と註7を参照。



fig.1
ベルナール・ビュッフェ
《キリストの受難：答刑》
1951年、油彩、265.0 × 477.0 cm、
ベルナール・ビュッフェ美術館



fig.2
ベルナール・ビュッフェ
《キリストの受難：磔刑》
1951年、油彩、271.5 × 481.5cm、
ベルナール・ビュッフェ財団
Collection Fonds de Dotation Bernard Buffet, Paris



fig.3
ベルナール・ビュッフェ
《キリストの受難：復活》
1951年、油彩、265.0 × 477.0 cm、
ベルナール・ビュッフェ美術館



fig.4
ベルナール・ビュッフェ
《室内：恋人》
1953年、油彩、195.0 × 297.0 cm、
ベルナール・ビュッフェ財団
Collection Fonds de Dotation Bernard Buffet, Paris



fig.5
ベルナール・ビュッフェ
《戦争の恐怖：戦争の天使》
1954年、油彩、265.0 × 685.0 cm、
ベルナール・ビュッフェ財団
Collection Fonds de Dotation Bernard Buffet, Paris

静岡近代美術年表稿 昭和戦後編 11

立花 義彰

1976(昭和51)年、県教育委員会に文化課が新設され、翌昭和52年度予算にて県立美術博物館建設調査費が計上されている。昭和51年度美術品買上に際しては、今日振り返れば軽率な勇み足の感があるのだが、同館への収蔵との報道がなされている。(読売静岡版S52.3/27, 静岡5/28)

1978(昭和53)年8月17日付毎日新聞からは、更に興味深い状況が知れるので以下引用する。

「県立美術博物館はいつ／構想生まれ六年目／県教委早期実現へ調査急ぐ／県教委の県立美術博物館建設計画は四十八年にクローズアップされたが、この直後オイルショックなどによる県の財政事情などで四年間たなあげ。それでも五十二、五十三年度に百万円ずつの調査費がつき、地道ながらも建設への第一歩を歩み出した。／県教委の基本構想は「県の特徴を生かした県民のための県立美術館づくり」県立美術博物館を新設することにより県内の美術愛好家が自発的に所蔵品を寄託寄贈してくれることを前提としている(以下略)」「県立美術博物館はいつ」毎日静岡東部, 中部, 遠州版8/17)

1978(昭和53)年秋には、県庁内で、県立美術博物館のための基金が検討されている。(静岡11/21)これは、ドルべらしの為の国策としての緊急輸入策(静岡11/28)に象徴されるオイルショックからの景気の回復や、毎日の記事にあるような美術愛好家の増加、それらに背中を押されたかのような、清水市文化会館、静岡市民文化会館の開館、県内美術館での展覧会の開催が背景として考えられる。1977(昭和52)年には菊川に常葉美術館が完成。画廊の開設も相次いだ。なお、静岡市内のジャズ喫茶JuJuの開店もこの時期である。

清水市文化会館では県内作家の規模の大きい回顧展が開催され、静岡市民文化会館では第63回二科静岡展が誘致されている。清水市文化会館の諸企画は、画家でもある同館の月見里シゲルの手になるもので、郷土作家回顧展シリーズとして注目すべきものが多い。

先にふれた県の寄贈だのみの収蔵も、市の方が一歩先行しており、文化功労者となった芹澤銈介が、静岡市へ作品

寄贈の意向を示したほか、熱海市への澤田政廣の作品寄贈等、市単位での記念館建設の動きが高まっていた。

長岡宏・伊藤勉黄「県美術この一年」(静岡S53.12/23)の文中の長岡の言を引用する「今年度の特徴としては、美術の一般化ということ挙げたい」として「美術館、文化会館等の意欲的な講演会、発表展示などには眼を見はらせるものがあつた」とし、常葉美術館の曾宮一念展、池田20世紀美術館での難波田龍起父子三人展を好企画としている。

さかのぼって1976(昭和51)年の県内美術館での展覧会としては、富士美術館を会場とする巨匠ブルーデル展、ロシア・ソビエト国宝絵画展の開催等がある。1978(昭和53)年には、三保文化ランドでの黎明期のソビエト絵画展、富士美術館のヴェイヤール展、佐野美術館での澤田政廣展があり、百貨店に目を移せば静岡田中屋伊勢丹での掛井五郎彫刻展の開催がある。美術館に関しては、静岡新聞でも富士美術館を筆頭としての「県下の美術館」連載(S51.5-6月)、「日本の美術館」連載(S51.4-5月)と啓発に努めている。

1976(昭和51)年から1978(昭和53)年の間の、展覧会以外の主要な出来事として、掛井五郎《パンサイヒル》中原悌二郎賞優秀賞受賞、芹澤銈介の文化功労者表彰がある。『北川民次版画全集 1928-1977』の刊行、清川泰次新作個展「線の世界」於東京資生堂ギャラリーもこの時期で重要な出来事と言える。

訃報としては、1976(昭和51)年の山口源、1977(昭和52)年の二橋美衡、佐野隆一、石子順三、白沢良の逝去。

県内での発表活動で、当時の稿者の関心を引いたのは、1976(昭和51年)と翌年夏の百人展。無論、作品的な完成度の問題はあつたであろうが、とにかく守旧的な雰囲気静岡にあって、新しい時代の到来を感じさせる企画であつた。新聞お決まりの表現ではあろうが「奇抜な作品もならぶ/集団個展の『百人展』」(中S52.8/30)から引用する。

「県内出身の武蔵野美、日本芸術大の学生やOBが主軸となり、初めて開くもので実際の出品者は九十五人。『百人展』としたのは百人が出品するという意味ではなく、芸術を志す

者は思想や宗教、信条などにとらわれなくて“百人百様”の考えで制作しようという意味」(中略)「若者らしく固定概念のとらわれない奇抜な作品が多い。出品者は、県内をはじめ東京、神奈川、千葉などの武蔵野美大、日本芸術大の学生やOB、大学講師、若手芸術家九十五人」(後略)

静岡新聞での言及が見当たらないので、ここに記す。

1978 昭和53年

- 1/ 1 野上魏「スケッチにきて定住」(朝日伊豆岳南版1/1)
- 1/ 1 相沢常樹《昭和の初めころの本町》(沼津朝日1/1)
- 1/ 1 志賀旦山《元旦の海》(沼津朝日1/1)
- 1/ 1 月見里シゲル、志賀旦山、大石千世「春に寄せる」(静岡1/1)
- 1/ 1 沢口三次油絵個展於浜松ギャラリー花菱(-7)。(朝日遠州版S52.12/31, 静岡1/5)
- 1/ 2 カレンダー展於東京東武デパート(-10)。上田毅八郎《世界の帆船カレンダー》大蔵省印刷局長賞受賞。(静岡1/16)
- 1/ 2 志賀旦山郷土絵巻書原画展・旦山会有志展於沼津ギャラリーほさか(-8)。(沼津朝日S52.12/29, 31, S53.1/1, 静岡1/5, 毎日静岡版S52.12/21)
- 1/ 2 入江泰吉写真展於新静岡センター(-16)。(静岡S52.12/31, S53.1/1, 4, 7, 毎日東, 中部, 遠州版S52.12/31, 朝日静岡版1/1, 読売静岡版1/5)
- 1/ 2 光風会浜松グループ第1回展於浜松ギャラリー蜷塚(-8)。(静岡S52.12/31, S53.1/7, 毎日東, 中部, 遠州版S52.12/30, 朝日遠州版S52.12/31)
- 1/ 2 西山翠嶂展於浜松西武(-5)。(朝日遠州版12/3)
- 1/ 長岡宏絵画展於静岡ラ・フォルア(-31)。(朝日静岡版1/7, 読売静岡版1/10, 26, 静岡1/14, 朝日静岡版1/18)
- 1/ 4 梅島堅一個展於静岡ガスサロン(-8)。(毎日静岡版S52.12/30, 静岡1/5)
- 1/ 5 赤堀正巳展於静岡幸文堂(-10)。(毎日静岡版S52.12/30, 朝日静岡版1/1, 読売静岡版1/10)
- 1/ 5 太田平八展於静岡谷島屋書店(-10)。(静岡12/26)
- 1/ 9 一東会小品展於浜松ギャラリー蜷塚(-22)。(毎日静岡版1/11, 静岡1/12, 13, 19, 朝日遠州版1/8)
- 1/12 第4回7刻展於東京現代彫刻センター(-28)。
掛井五郎出品。
- 1/12 竹久夢二展於静岡田中屋伊勢丹(-17)。(静岡

S52.12/31, S53.1/4, 5, 11, 13, 毎日東, 中部, 遠州版1/6, 7, 9, 12, 13)

- 1/12 黎明期のソビエト絵画展於三保文化ランド(-2/27)。(静岡1/13, 19, 30, 2/27, 朝日静岡版1/13)
- 1/12 河西賢太郎個展於静岡幸文堂(-17)。(静岡1/14, 朝日静岡版1/14, 県油協no.35)
- 1/12 井上市三郎展於浜松松菱(-17)。(朝日遠州版1/10)
- 1/ 地線第2回展於県庁西館展示室(-18)。(朝日静岡版1/17)
- 1/ 石坂浩二展於静岡田中屋伊勢丹(-17)。(静岡1/13)
- 1/ 山田朝春作陶展於静岡西武(-18)。(毎日静岡版1/18)
- 1/ 森有一展於浜松浜松画廊(-23)。(毎日静岡版1/18)
- 1/ 宮本義則展於静岡住友信託銀行静岡支店(-2/18)。(毎日静岡版1/18)
- 1/15 伊藤信次・伊藤弥兵衛展於引佐農協(-16)。(静岡1/12, 14, 朝日静岡版1/13, 14)
- 1/ 田村緋寿作品展於沼津東海銀行沼津支店(-2/10)。(沼津朝日1/19)
- 1/ 浜松市美術館、松本コレクション公開を発表。(朝日遠州版1/19)
- 1/19 鈴木満展於東京高島屋(-24)。
- 1/19 宮本豊月・山本朝春展於静岡田中屋(-24)。(朝日静岡版1/18)
- 1/19 樹風会展於浜松松菱(-24)。(朝日遠州版1/18)
- 1/19 坂東壮一版画展於浜松由美画廊(-31)。(朝日静岡版1/14, 静岡1/19, 26, 朝日遠州版1/19)
- 1/20 砂原放光《伊藤祐親像》除幕式於伊東。(静岡1/21*, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版1/21, 読売静岡版1/21)
- 1/20 横手良男展於静岡谷島屋書店(-24)。(読売静岡版1/21)
- 1/ アトリエC126版画展於浜松ナカムラ画廊(-28)。(毎日静岡版1/25, 静岡1/26)
- 1/24 林婦美子個展於静岡ガスサロン(-29)。(読売静岡版1/10, 24, 静岡1/19, 23, 26, 毎日東, 中部, 遠州版1/29)
- 1/26 久保田光亭堀端十二景展於静岡松坂屋(-31)。(静岡1/19, 25, 朝日静岡版1/27)
- 1/26 滝田博至写真展於静岡谷島屋(-12)。(毎日東, 中部, 遠州版1/17)
- 1/28 葛山朝書展於熱海ヤオハン(-29)。(静岡1/29)

- 1/30 市川正三「黎明期のソビエト絵画を見る」(静岡1/30)
- 1/31 清野弘滞欧作品パステル展於静岡ガスサロン(-2/5)。(毎日静岡版1/25, 静岡1/26, 清美協no.165)
- 1/ 焼津藍画廊オープン。(静岡6/5, S58.4/19)
- 2/ 1 山尾薫明《少女とヤシの実》[S11二科展]破損。(静岡2/16, 23, 毎日東部版2/25)
- 2/ 2 清水達三新作日本画展於静岡松坂屋(-14)。(静岡2/1)
- 2/ 2 近藤智得子展於静岡谷島屋(-7)。(静岡2/1, 朝日静岡版2/1, 毎日東, 中部, 遠州版2/5, 読売静岡版2/7)
- 2/ 3 「私の散歩道」平井俊男(静岡2/3)日下泰輔。(静岡2/24)
- 2/ 6 柿下木冠「世界の中の「書」」(静岡2/6)
- 2/ 6 ガストン・プチ、伊東市表敬訪問。(静岡2/7)
- 2/ 7 沼津青木紙店ギャラリー開設。(朝日静岡版2/21, 静岡2/17)
- 2/11 小川龍彦「創作版画回顧」(静岡2/11)
- 2/11 松浦青涛展於静岡喜仙(-20)。(静岡2/11)
- 2/14 平井俊男個展於静岡ガスサロン(-19)。(静岡2/9, 16, 27, 朝日静岡版2/14, 読売静岡版2/14, 毎日静岡版2/15)
- 2/ ピカソ以後の現代スペイン版画展於沼津ギャラリータケイ(-26)。(静岡2/16, 朝日静岡版2/17, 毎日静岡版2/22)
- 2/16 草炎会小品展於沼津ギャラリーほさか(-21)。(毎日静岡版2/15, 静岡2/16, 沼津毎日2/17)
- 2/16 県油絵代表作家選抜第9回展於静岡田中屋伊勢丹(-21)。(朝日静岡版2/15, 静岡2/16, 17, 読売静岡版2/14)
- 2/16 工藤甲人展於浜松松菱(-21)。(朝日遠州版2/16)
- 2/16 両角修版画展於浜松由美画廊(-28)。(毎日東, 中部, 遠州版2/12, 読売静岡版2/14, 静岡2/16, 18, 23, 朝日遠州版2/16)
- 2/17 近代日本の版画展於新静岡センター(-22)。(静岡2/11, 18)
- 2/17 竹久夢二展於浜松西武(-22)。(静岡2/16, 朝日遠州版2/17, 中日静岡版2/17)
- 2/17 加藤伸幸油絵個展於浜松元城アートギャラリー(-28)。(静岡2/16, 23, 朝日遠州版2/17)
- 2/18 白川義員「合成写真裁判の争点」(静岡2/18)
- 2/ 宮本美則展於静岡安田信託銀行静岡支店(-)。(静岡1/19)
- 2/20 杉山邦彦個展於東京村松画廊(-25)。(静岡2/18)
- 2/21 浦田周社木版画展於静岡ガスサロン(-26)。(静岡2/16, 23, 朝日静岡版2/20, 読売静岡版2/21, 毎日静岡版2/22)
- 2/23 増田大罌秀作童画展於静岡幸文堂(-28)。(朝日遠州版2/22, 県油協no.35)
- 2/23 松晨会日本画展於浜松松菱(-28)。(朝日遠州版2/22)
- 2/ 葛川朝三小品展於熱海青木紙店(-27)。(静岡2/23)
- 2/25 芹澤銈介世界の染と織展於浜松市美術館(-3/26)。(読売静岡版2/21, 3/7, 静岡2/26, 3/29, 毎日東, 中部, 遠州版2/26, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版2/25)
- 2/ 山崎大抱作品、西独の国立ハンブルグ美術館に収蔵。(静岡2/27)
- 3/ 1 ガストン・プチの世界展於池田20世紀美術館(-5/31)。(静岡2/7, 3/7, 朝日伊豆岳南版2/25, 朝日静岡版3/3, 8)
- 3/ 麻田浩銅版画展於静岡画廊しずおか(-6)。(静岡3/4)
- 3/ はなわ憲嗣・金子一治二人展於静岡ラ・フォルア(-31)。(読売静岡版3/7, 静岡3/18, 朝日静岡版3/29, 毎日東, 中部, 遠州版3/29, 毎日静岡版3/29)
- 3/ 2 「奇石博物館」(静岡3/2)
- 3/ 2 光風会静岡支部展於県庁西館展示室(-5)。(静岡2/27, 毎日静岡版3/1, 朝日静岡版3/2)
- 3/ 2 県日本画選抜七人展於静岡ガスサロン(-7)。(静岡3/1, 2, 4, 毎日東, 中, 西部版3/5)
- 3/ 太田銀次展於熱海青木紙店(-9)。(静岡3/2)
- 3/ 2 現代アメリカ版画展於浜松由美画廊(-14)。(朝日遠州版3/2, 静岡3/2, 9, 毎日遠州版3/5, 読売静岡版3/7)
- 3/ 3 金原宏行「遠州の文人と画人」(静岡3/3)
- 3/ 3 熊谷守一版画展於浜松由美画廊(-12)。(朝日遠州版3/3, 静岡3/9)
- 3/ 4 池谷雅之展於浜松ギャラリー花菱(-10)。(中日静岡版2/18, 毎日東, 中部, 遠州版3/5, 読売静岡版3/7)
- 3/ 水野憲一・大石正美・山下栄子三人展於浜松ギャラリー花菱(-10)。(静岡3/9)
- 3/ フランス名画巨匠展於伊東ギャラリーヤマモト(-14)。(開廊記念)。(静岡3/11, 13, 朝日静岡版3/11)
- 3/ 9 市川正三展於静岡田中屋伊勢丹(-14)。(読売静岡版3/7)
- 3/ 9 宮永岳彦版画展於静岡松坂屋(-14)。(静岡3/8)
- 3/ 秋本三歩展於沼津ギャラリーほさか(-14)。(静岡3/9)
- 3/13 ピカソ・国吉康雄版画展於浜松ナカムラ画廊(-18)。(朝日遠州版3/13, 静岡3/16)
- 3/14 井出芳志個展於静岡ガスサロン(-19)。(読売静岡版3/14, 静岡3/16, 18, 朝日静岡版3/16)
- 3/15 マリオ・アバチ版画展於沼津ギャラリータケイ(-21)。(沼津朝日3/16, 静岡3/18)
- 3/15 静岡市長、県立美術博物館に関して市内駿府会館跡地の予定地化を示唆。(読売静岡版2/28, 静岡3/15)
- 3/16 平松実、県無形文化財認定。(静岡3/30, 4/3)
- 3/16 井上重生展於伊東ギャラリーヤマモト(-21)。(朝日伊豆岳南版3/16, 静岡3/16)
- 3/ 井上公三版画展於沼津ギャラリーほさか(-21)。(沼津朝日3/16, 静岡3/16, 朝日伊豆岳南版3/17)
- 3/16 河本正新作日本画展於静岡松坂屋(-21)。(静岡3/15)
- 3/16 現代版画10人展於浜松由美画廊(-28)。(毎日中部, 遠州版3/12, 朝日遠州版3/16, 静岡3/22)
- 3/ 三好硯也展於伊東ギャラリーヤマモト(-29)。(毎日静岡版3/29)
- 3/ 吉田幸藏《自主の像》熱海中学に建立。(静岡3/18)
- 3/17 《可睡齋護国塔》県文化財指定。(静岡3/18)
- 3/17 吉田清志油絵個展於静岡西武(-22)。(読売静岡版3/7, 14, 21, 静岡3/11, 朝日静岡版3/13, 毎日中部, 遠州版3/19)
- 3/17 長船恒利・寺田信人・村田功 映像ずら展於県庁西館展示室(-21)。(静岡3/11, 朝日静岡版3/14, 読売静岡版3/14, 毎日東, 中部, 遠州版3/19)
- 3/20 川端政勝スケッチ展於静岡画廊しずおか(-4/5)。(清美協no.166)
- 3/22 湯地定正写真展於静岡ガスサロン(-26)。(朝日静岡版3/20, 静岡3/22, 25)
- 3/23 中村一人個展於沼津ギャラリーほさか(-28)。(静岡3/22, 毎日東, 中部, 遠州版3/26)
- 3/23 井出芳志作品展於静岡松坂屋(-28)。(《二人》(テラコッタ)他)。(読売静岡版3/14, 21, 朝日静岡版3/16, 静岡3/18, 22, 25*, 毎日東, 中部, 遠州版3/26)
- 3/23 望月礼三作品展於静岡幸文堂(-28)。(静岡3/18, 25, 朝日静岡版3/23)
- 3/25 細谷泰茲《少年とチャボ》贈呈式於静岡八幡山公園。(静岡3/24, 26*, 中日静岡版3/26)
- 3/26 「芸術作品も 東洋電産」(沼津朝日3/26)
- 3/ 木内克彫刻パステル画展於浜松浜松画廊(-31)。(朝日遠州版3/26, 毎日静岡版3/29)
- 3/ 松林トミ夫近況。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版3/28)
- 3/28 伊藤豊成個展於静岡ガスサロン(-4/2), 静岡幸文堂(3/30-4/4)。(静岡3/20, 30, 4/1, 朝日静岡版3/26, 毎日静岡版3/29)。
- 3/29 伊藤輝彦水彩画展於浜松松菱(-4/4)。(静岡3/22, 30, 朝日遠州版3/29)
- 3/30 「鈴木稔 この人」(静岡3/30)
- 3/31 白沢崇「海外見たまま」(静岡3/31)
- 4/ 1 喜仙開店1周年記念謝恩特売(-3)。(静岡4/1)
- 4/ 1 縣善三郎小品展於浜松ギャラリー花菱(-7)。(静岡3/30, 4/3, 朝日遠州版4/1, 読売遠州版4/4)
- 4/ 1 ギャラリークラフト開店。(朝日静岡版3/29, 毎日中部版3/29, 静岡4/3)
- 4/ 前島秀章・前島範久二人展於静岡ラ・フォルア(-30)。(静岡4/3, 読売静岡版4/11, 毎日静岡版4/12)
- 4/ 2 第31回二紀会展於浜松市美術館(-9)。(水野瑛朗《作品》(静岡3/27*, 4/3)
- 4/ 和田金剛作品展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(静岡4/6, 沼津朝日4/9)
- 4/ 浜松市美術館資料基金近況。(毎日静岡版4/5, 朝日遠州版4/11)
- 4/ 3 「平松実 この人」(静岡4/3)
- 4/ 5 木下伝三郎《達磨大師立像》除幕於修善寺達磨山。(静岡4/6, 読売静岡版4/8)
- 4/ 5 山田収《レリーフ》於富士川第一小学校。(静岡4/6, 読売静岡版4/26)
- 4/ 6 山口午朗油絵個展於沼津ギャラリーほさか(-11)。(静岡4/6, 沼津毎日4/8, 沼津朝日4/9, 静岡4/6, 毎日東, 中部, 遠州版4/9)
- 4/ 上田毅八郎展於県庁西館展示室(-12)。

- (静岡4/7, 朝日静岡版4/10)
- 4/ 牧田喜好「窓辺」(静岡4/7, 14, 21, 28, 5/3, 10, 17, 24, 31, 6/7, 14, 22, 28, 7/5, 12, 19, 26)
- 4/7 第64回光風会展於東京都美術館(-22)。
藤本東一良《トルーヴィルの浜》
新入選。(静岡4/1)
- 4/7 第8回日彫展於東京都美術館(-22)。
浅井行雄《立像》井戸義夫《女の顔》大村政夫《春の女精》澤田政廣《釈迦如来》堤達男《慈悲の手》
飛岡文一《聴音》平馬学《裸婦》平野富山《飜馬(道)》松田裕康《髪》山本利治《踊り子》和田金剛《ひつじ》(出品目録)
堤直美《毘》努力賞受賞。(静岡4/10)
- 4/7 川上澄生展於静岡画廊しずおか(-18)。(静岡4/3, 10, 読売静岡版4/4, 11, 毎日静岡版4/12)
- 4/ 志賀旦山訪中。(沼津毎日4/8)
- 4/8 小木麦個展於豊岡村郷土館(-9)。(静岡4/9)
- 4/8 オリジナル版画七人展於浜松ギャラリー花菱(-14)。(静岡4/6, 毎日東, 中部, 遠州版4/9)
- 4/9 小川龍彦「マイしずおか」(中日静岡版4/9)
- 4/ 今泉孝近況。(静岡4/10)
- 4/13 現代洋画選抜20人展於静岡田中屋伊勢丹(-18)。(静岡4/12, 15)
- 4/13 古田晴久作品展於浜松由美画廊(-18)。(静岡4/3, 13, 17, 読売静岡版4/11, 朝日遠州版4/13)
- 4/ 池田満寿夫・アイネス・ジョンストン二人展於静岡谷島屋書店(-18)。(静岡4/10, 読売静岡版4/11, 毎日静岡版4/12)
- 4/15 森下良三・ゲイル・スタインバーガー二人展於東京康画廊(-26)。(静岡4/10)
- 4/ 北村西望《飛躍》特別頒布会於静岡・沼津・浜松西武。(静岡4/15)
- 4/16 土屋豊・高橋昌巳・八木敏裕・横井弼四人展於沼津ギャラリータケイ(-29)。(沼津朝日3/30, 静岡4/13, 朝日伊豆岳南版4/13, 毎日東, 中部, 遠州版4/23)
- 4/16 森一三作モニュメント除幕於湖西市民会館。(静岡4/17)
- 4/18 河西賢太郎個展於静岡ガスサロン(-23)。(静岡4/13, 15, 朝日静岡版4/17, 読売静岡版4/18)
- 4/18 高倉清雄写真展於浜松市美術館(-23)。(静岡4/6, 19, 20, 朝日遠州版4/18, 毎日静岡版4/19, 読売静岡版4/19)
- 4/18 光陽会中部支部展於浜松市美術館(-23)。(朝日遠州版4/18)
- 4/18 山本直治水彩展於浜松浜松画廊(-25)。(朝日遠州版4/18, 静岡4/20, 毎日東, 中部, 遠州版4/23)
- 4/20 館野節子「うちの亭主」[館野弘青](静岡4/20)
- 4/20 県日本画27人第2回展於於静岡松坂屋(-25)。(静岡4/15, 19)
- 4/20 青木草風きりえ展於静岡谷島屋書店(-25)。(静岡4/15, 読売静岡版4/18, 24, 朝日静岡版4/20)
- 4/20 小竹隆夫写真展於静岡谷島屋書店(-25)。(静岡4/20, 毎日東, 中部, 遠州版4/23)
- 4/ 島岡達三作陶展於於静岡松坂屋(-25)。(静岡4/18)
- 4/21 本田和久版画展於清水渡辺画廊(-26)。(静岡4/17, 読売静岡版4/18)
- 4/21 藤原雄作陶展於静岡西武(-26)。(静岡4/20)
- 4/21 増田大罇個展於島田中電ホール(-26)。(朝日静岡版4/21, 静岡4/22, 毎日東, 中部, 遠州版4/23)
- 4/21 堤達男《プチャーチン像》設置。(静岡2/23, 4/19, 22)
- 4/22 旧岩科学校、郷土資料館として開館。(静岡S52.5/31, S53.3/5, 4/23, 30, S54.1/15, 11/28, 朝日伊豆岳南版4/26)
- 4/23 ヴェイヤール展於富士美術館(-5/15)。(読売静岡版4/12, 14, 15, 18, 19, 20, 21, 23, 24, 5/2, 7, 静岡4/7)
- 4/25 第52回国画会展於東京都美術館(-5/10)。
青木達弥《風車小屋》野田好子《小鳥よ、飛べ》栗山茂《古墳時代II》伊藤勉黄《花言葉》《腹話術の男》
- 4/25 第55回春陽会展於東京都美術館(-5/10)。
小栗哲郎《大和田村落》《大和田部落》
- 4/25 丘野顛麗写真展於静岡ガスサロン(-30)。(読売静岡版4/25)
- 4/27 鈴木儀一油絵展於浜松由美画廊(-5/2)。(朝日遠州版4/25, 読売静岡版4/25, 静岡4/28, 毎日東, 中部, 遠州版4/30)
- 4/27 近代日本画展於浜松松菱(-5/2)。(朝日遠州版4/27)
- 4/28 第21回安井賞受賞作品展於沼津西武(-5/3)。(静岡4/28)
- 4/29 原木錠治個展於県庁西館展示室(-5/5)。(朝日静岡版4/28, 静岡5/4, 5)
- 4/ 仲山進作個展於浜松西武(-5/3)。(静岡4/30, 5/8, 朝日遠州版4/30)
- 4/ 秋山二三九展於焼津市文化会館。(静岡4/30, 5/1)
- 5/1 吉野不二太郎油絵個展於静岡産業会館(-7)。(静岡4/29, 朝日静岡版4/29, 毎日東, 中部, 遠州版4/30)
- 5/1 川端政勝個展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-30)。(毎日東, 中部, 遠州版4/30, 清美協no.168)
- 5/ 郷土作家による郷土風景展於掛川ジャスコ(-7), 於浜岡原子力センター(13-20), 小笠町公民館(21-30)。(静岡5/4)
- 5/2 県版画協会会員近作版画小品第1回展於静岡ガスサロン(-7)。(毎日東, 中部, 遠州版4/30, 朝日静岡版5/1, 読売静岡版5/2, 静岡5/4, 5)
- 5/2 田中節子小品展於焼津プービィ(-31)。(静岡4/28, 朝日静岡版4/30, 読売静岡版5/16)
- 5/2 中部一陽会第4回展於浜松市美術館(-7)。(朝日遠州版5/1, 静岡5/3, 5)
- 5/3 臥牛会第2回展於三島せきや酒店(-9)。(朝日伊豆岳南版5/1, 沼津朝日5/3, 毎日静岡版5/3, 静岡5/4)
- 5/3 光風会七人展於静岡田中屋伊勢丹(-9)。(静岡4/29, 5/8, 読売静岡版5/2, 毎日東, 中部, 遠州版5/7)
- 5/3 栗原幸彦日本画展於浜松由美画廊(-9)。(静岡5/5)
- 5/ 城間早苗紙人形・大木茂写真展於沼津ギャラリーほさか(-8)。(静岡5/4, 毎日伊豆岳南版5/4, 静岡5/5, 沼津朝日5/5, 毎日東, 中部, 遠州版5/7)
- 5/4 藤田清司個展於清水戸田書店(-9)。(清美協no.168)
- 5/ 杉田美幸個展於静岡幸文堂(-9)。(静岡5/8)
- 5/5 志賀旦山「左手の温もり」(沼津朝日5/5)
- 5/5 青鳩会彫刻展於松崎ショッピングセンター(-7)。(静岡5/5)
- 5/6 成瀬憲、川端政雄、海野光弘、勝間田哲朗、笹本忠志、イタリア美術賞展出品。(毎日東, 中部, 遠州版4/18)
- 5/6 渡辺俊明個展於新居町町民センター(-7)。(静岡5/7)
- 5/7 丸茂湛祥大作展於東京上野の森美術館(-13)。(静岡5/8)
- 5/7 県美術家連盟第15回展於県庁西館展示室(-11)。(朝日静岡版5/7, 毎日東, 中部, 遠州版5/3, 静岡5/8)
- 5/7 藪崎好光喜寿の祝い於静岡東海軒。(静岡5/8)
- 5/8 「仲山進 この人」(静岡5/8)
- 5/8 裾野市富士山資料館開館。(静岡S50.9/23, S52.1/8, S53.5/1, 10, 毎日静岡版S51.1/12, 朝日伊豆岳南版S50.12/15, S53.5/8, 読売静岡版S54.7/6)
- 5/ 岡本博の世界展於東京ぎゃるり猿(-13)。(静岡5/8)
- 5/ 中村博・中村和子二人展於浜松ギャラリー花菱(-14)。(静岡5/8, 11)
- 5/9 村松正雄彫刻展於浜松市美術館(-14)。(静岡5/7)
- 5/ 第38回美術文化協会展於浜松市美術館(-14)。(静岡3/30, 5/11)
- 5/11 遠藤君雄油絵展於沼津ギャラリーほさか(-16)。(沼津朝日5/9, 13, 朝日伊豆岳南版5/10, 静岡5/11, 毎日東, 中部, 遠州版5/14)
- 5/11 池田正司水彩画近作展於清水戸田書店(-16)。(朝日静岡版5/11, 清美協no.169)
- 5/11 田中幸一展於静岡田中屋伊勢丹(-16)。(静岡5/10)
- 5/ 山本翠城・服部一秀展於静岡田中屋伊勢丹(-16)。(静岡5/11, 12)
- 5/12 《片岡泰吉胸像》除幕式於韭山。(静岡5/12*, 読売静岡版5/12*, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版5/20)
- 5/13 県文化奨励賞授賞式於静岡たちばな会館。太田儀八、柿下木冠他。(静岡4/21, 毎日東, 中部, 遠州版4/21, 読売静岡版4/21)
- 5/13 坂本好一展於静岡画廊しずおか(-22)。(毎日東, 中部, 遠州版5/7, 21, 静岡5/8)
- 5/15 平野泰彦・岐部琢美・戸塚秀三・中村ミナト彫刻展於東京村松画廊(-20)。
- 5/ 田中節子展於焼津プービィ(-30)。(毎日東, 中部, 遠州版5/17)
- 5/17 松下正次日本画展於焼津藪崎新聞店(-21)。(静岡5/8, 朝日静岡版5/16, 読売静岡版5/16)
- 5/18 小川幸彦作陶展於東京高島屋(-23)。
- 5/18 沼津アートクラブ油彩展於沼津ギャラリーほさか(-23)。(沼津毎日5/19, 静岡5/18, 毎日東部版5/21)
- 5/18 桑原実洋画展於於静岡松坂屋(-23)。(静岡5/17)
- 5/18 繁田博・狩野三也子二人展於静岡幸文堂(-23)。(朝日静岡版5/17, 静岡5/22)

- 5/18 大沢昌助・堀内規次石版画展於浜松由美画廊(-30)。(毎日東, 中部, 遠州版5/14, 読売静岡版5/16, 朝日遠州版5/17, 静岡5/18)
- 5/ 北川民次, 二科会会長となる。(静岡5/20)
- 5/20 曾宮一念展於常葉美術館(-6/15)。(静岡5/20, 21, 27, 6/2,8, 朝日遠州版5/20)
- 5/21 「川口潔 こんにちは」(沼津朝日5/21)
- 5/23 藤本東一良展於東京日動サロン(-30)。(美術グラフ27-7, 点描124, 東京5/26, 毎日5/26)
- 5/23 岩中徳次郎展於沼津ギャラリータケイ(-28)。(沼津朝日5/21, 23, 朝日伊豆岳南版5/23, 読売静岡版5/23, 毎日静岡版5/24, 静岡5/26)
- 5/23 壮炎会展於浜松市美術館(-28)。(読売静岡版5/23)
- 5/25 八木昌一・稲森祐一二人展於静岡幸文堂(-30)。(読売静岡版5/23, 静岡5/27)
- 5/ 白岩州崖展於沼津マルサン書店(-30)。(毎日東部版5/28, 朝日伊豆岳南版5/30, 読売静岡版5/30)
- 5/ 石川暢子ジュエリー展於静岡西武(-31)。(静岡5/25)
- 5/ 中山一司展於静岡産業会館(-30)。(朝日静岡版5/26, 毎日東, 中部, 遠州版5/28, 読売静岡版5/30)
- 5/29 水野欣三郎浜松市役所モニュメント一時撤去。(静岡5/30)
- 5/28 青島秀蘭・青島淑雄日本画展於駿府博物館(-6/11)。(静岡5/21, 28)
- 5/31 志賀旦山絵・上田治史文《中国の旅》(沼津朝日5/31, 6/1, 2, 3, 4)
- 5/31 太田利三展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-6/15)。(朝日静岡版5/30, 読売静岡版5/30, 静岡6/2, 9, 毎日静岡版6/4)
- 6/ 1 難波田龍起・難波田紀男・難波田史男三人展於池田20世紀美術館(-8/31)。(読売静岡版6/6, 静岡6/10, 16, 23)
- 6/ 1 稲葉泰樹展於沼津ギャラリーほさか(-6)。(沼津朝日6/1, 静岡6/2, 毎日東, 中部, 遠州版6/4)
- 6/ 1 ジャン・ジャンセン石版画展於沼津ギャラリータケイ(-15)。(沼津朝日5/31, 6/1, 朝日伊豆岳南版6/3, 静岡6/9)
- 6/ 1 市川正三油絵近作個展於静岡田中屋伊勢丹(-6)。(《奏者》他)。(毎日東, 中部, 遠州版5/28, 静岡5/31, 6/2, 3, 読売静岡版5/30, 6/6)
- 6/ 1 加山又造展於静岡ラ・フォルア(-30)。(朝日静岡版5/31, 静岡6/2, 9, 16, 23, 毎日東, 中部, 遠州版6/11)
- 6/ 1 松永伍一『少年』展於静岡谷島屋書店(-11)。(朝日静岡版6/1, 5)
- 6/ 1 八木洋行写真展於静岡谷島屋書店(-6)。(静岡5/26, 6/2, 5)
- 6/ 1 川端政勝個展於静岡幸文堂(-6)。(毎日東, 中部, 遠州版5/28, 静岡6/2, 朝日静岡版6/2, 清美協no.168)
- 6/ 1 田中幸一展於浜松遠鉄(-15)。(静岡5/30)
- 6/ 1 梶井昌展於浜松ギャラリー花菱(-7)。(毎日遠州版5/29, 朝日遠州版6/1, 静岡6/2, 読売遠州版6/6)
- 6/ 1 橋本博子銅版画展於浜松由美画廊(-6)。(朝日遠州版6/1, 静岡6/2, 毎日遠州版6/4, 読売遠州版6/6)
- 6/ 1 天竜川の風物を描く展於天竜市立中央公民館(-4)。(静岡5/26, 毎日東, 中部, 遠州版5/28)
- 6/ 山岡旦周展於伊東ギャラリーヤマモト(-6)。(毎日東, 中部, 遠州版6/4)
- 6/ 現代版画への誘い展於静岡谷島屋書店(-13)。(朝日静岡版6/2, 伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/5)
- 6/ 2 綱谷義郎展於静岡画廊しずおか(-12)。(毎日静岡版5/31, 6/4, 静岡6/2, 9, 読売静岡版6/6)
- 6/ 6 杉本三男展於静岡ガスサロン(-11)。(静岡5/26, 6/2, 9, 朝日静岡版6/6, 読売静岡版6/6)
- 6/ 7 久保田弘展於熱海サロン・ド・アオキ(-13)。(静岡6/8)
- 6/ 8 前田光一木版画展於沼津ギャラリーほさか(-13)。(沼津朝日6/6, 読売静岡版6/6)
- 6/ 8 富士市美術協会30周年記念展於吉原市民会館(-11)。(静岡6/2)
- 6/ 8 渡辺俊明版画展於静岡田中屋(-13)。(朝日静岡版6/7)
- 6/ 8 柴田俊個展於静岡幸文堂(-13)。(静岡5/26, 6/1, 2, 9, 12, 毎日東, 中部, 遠州版5/28, 読売静岡版6/6)
- 6/ 8 三輪雅章作陶展於浜松松菱(-13)。(朝日遠州版6/8, 静岡6/11)
- 6/ 8 神津克巳展於浜松ギャラリー花菱(-14)。(読売遠州版6/6, 毎日静岡版6/7, 朝日遠州版6/8, 静岡6/9)
- 6/ 9 御厨美術第9回展於小山町富士紡体育館(-11), 於富士イトーヨーカ堂(14-18)。(毎日静岡版6/7, 東部版6/10, 朝日伊豆岳南版6/14)
- 6/ 9 鈴木貞夫展於浜松西武(-14)。(朝日遠州版6/9, 読売浜松版6/13)
- 6/10 江崎敏夫展於富士グランドホテル(-12)。(静岡6/11)
- 6/13 丸山力生スケッチ展於静岡ガスサロン(-18)。(毎日東, 中部, 遠州版6/3, 朝日静岡版6/13, 読売静岡版6/13)
- 6/13 杉山良雄スケッチ展於県庁西館展示室(-15)。(毎日東, 中部, 遠州版6/11, 14, 朝日静岡版6/13, 読売静岡版6/13)
- 6/ 饗場二郎個展於浜松ギャラリーさいとう(-18)。(静岡6/16)
- 6/15 小林完, 文化庁長官表彰。(静岡6/15)
- 6/15 加藤省三展於伊東ギャラリーヤマモト(-20)。(朝日伊豆岳南版6/15, 静岡6/16, 19, 毎日東部版6/18)
- 6/15 風土展第22回展於沼津ギャラリーほさか(-20)。(沼津朝日6/15, 静岡6/16, 朝日伊豆岳南版6/20)
- 6/15 守時大融作陶展於沼津ギャラリーほさか(-20)。(静岡6/16, 毎日東, 中部, 遠州版6/18)
- 6/15 鷺巣丑蔵油絵個展於静岡幸文堂(-20)。(静岡6/9, 16, 毎日東, 中部, 遠州版6/11, 朝日静岡版6/17)
- 6/15 多賀新銅版画展於浜松由美画廊(-20)。(静岡6/9, 16, 朝日遠州版6/15, 読売浜松版6/13)
- 6/15 珍品展於浜松浜松画廊(-21)。(曾宮一念《焼岳》他)。(朝日遠州版6/15)
- 6/ 山本六三銅版画展於静岡画廊しずおか(-26)。(静岡6/16, 23, 毎日東, 中部, 遠州版6/21)
- 6/16 静岡二科写真展於新静岡センター(-21)。(静岡6/5)
- 6/16 松本織良写真展於浜松西武(-21)。(静岡6/17, 毎日東, 中部, 遠州版6/17)
- 6/17 柴田俊《雨のサーカス小屋》(静岡6/17)
- 6/18 清水市文化会館開館。(読売静岡版S47.6/6, S53.4/11, 5/30, 6/17, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版S49.3/9, S52.1/26, S53.2/18, 静岡2/9, 3/31, 4/7, 25, 5/28, 29, 6/17, 18, 8/29, S58.6/19)
- 6/18 清水市民美術展於清水市文化会館(-7/2)。(静岡6/17, 朝日静岡版6/17)
- 6/20 「鈴木貞夫」(読売静岡版6/20)
- 6/21 山尾薫明《少女とヤシの実》修復なる。(静岡2/16, 23, 25, 6/21, 23, 毎日東, 中部, 遠州版6/22, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版6/23)
- 6/21 県油彩美術家協会第6回展於県庁西館展示室(-25)。(静岡6/16, 21, 23, 24, 毎日東, 中部, 遠州版6/18, 読売静岡版6/20, 朝日静岡版6/21)
- 6/22 長谷川栄一水彩画展於静岡幸文堂(-27)。(読売静岡版6/20, 毎日東, 中部, 遠州版6/21, 朝日静岡版6/22, 静岡6/23)
- 6/22 高柳千賀子個展於静岡田中屋伊勢丹(-27)。(読売静岡版6/20, 毎日東, 中部, 遠州版6/25, 静岡6/26)
- 6/ 大川原久夫日本画展於浜松由美画廊(-27)。(静岡6/23)
- 6/22 成瀬憲展於沼津ギャラリーほさか(-27)。(沼津朝日6/22)
- 6/22 杉村勇展於静岡白岩画廊(-27)。(静岡6/19, 読売静岡版6/20, 毎日東, 中部, 遠州版6/21, 朝日静岡版6/22)
- 6/23 牧田浩子展於浜松西武(-28), 於静岡田中屋伊勢丹(7/27-8/1)。(静岡6/11, 23, 27, 7/21, 28, 朝日遠州版6/23, 24, 朝日静岡版7/28)
- 6/ 高野良之助個展於清水渡辺画廊(-28)。(静岡6/23)
- 6/25 ヴァン・ドンゲン展於浜松市美術館(-7/23)。(中日県内版6/ , 7/1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 静岡6/18, 23, 毎日東, 中部, 遠州版6/18, 読売静岡版6/20, 朝日遠州版6/26)
- 6/28 二科県支部5周年展於県庁西館展示室(-7/2)。(静岡4/3, 6/23, 朝日静岡6/28, 毎日静岡版6/28)
- 6/28 野中弘士展於浜松松菱(-7/4)。(朝日遠州版6/28, 静岡6/30)
- 6/29 前田守一個展於清水戸田書店(-7/4)。(静岡6/23, 30, 読売静岡版6/27, 毎日静岡版6/28)
- 6/29 土屋賀容子滯仏作品展於伊東ギャラリーヤマモト(-7/4)。(朝日伊豆岳南版6/29, 静岡6/30)
- 6/29 池田満寿夫作品展於静岡田中屋伊勢丹(-7/4)。(静岡6/28)
- 6/29 藤野嘉市個展於静岡幸文堂(-7/4)。(静岡6/23, 30, 毎日静岡版6/28, 朝日静岡版6/29)

- 6/29 鈴木重種作品展於浜松由美画廊(-7/4)。
(朝日遠州版6/29, 静岡6/30)
- 6/ 国際女流作家版画展於静岡谷島屋書店(-7/4)。
(静岡6/30)
- 6/ 桑原茂ヒマラヤ写真展於静岡谷島屋書店(-7/4)。
(朝日静岡版6/30, 静岡7/1, 読売静岡版7/4)
- 6/ 高野良之助個展於静岡白岩画廊(-7/4)。
(静岡7/1)
- 6/30 太田銀治近況。(静岡6/30)
- 6/30 水口祐理展於沼津ギャラリーほさか(-7/4)。
(沼津朝日6/30)
- 6/30 池田正司、由比町教育長に選任される。(静岡7/1)
/ 鈴木康雄展於袋井農事センター(-7/2)。
(中日静岡版7/2)
- 7/ ポール・ジャックレー木版画展於静岡ラ・フォルア
(-31)。(読売静岡版7/4, 11, 18, 静岡7/7, 14, 21, 28, 朝日静岡版7/13)
- 7/ 3 中西浩写真展於東京キャノンサロン(-8)。
(沼津毎日7/4)
- 7/ 3 ギャラリー Uグループ展・プロセスII於東京ギャラリー U(-8)。杉山邦彦参加。
- 7/ 4 近代日本代表作家絵画展於清水市文化会館(-16)。(読売静岡版7/4, 6, 11, 静岡7/5, 毎日東, 中部, 遠州版7/9, 朝日静岡版7/9, 清美協no.170)
- 7/ 4 前田光一木版画展於静岡ガスサロン(-9)。
(読売静岡版7/4, 毎日静岡版7/5)
- 7/ 長田信義写真展於県庁西館展示室(-9)。
(静岡7/7)
- 7/ 二重作龍夫《叙情歌》富士宮市に寄贈。
(静岡7/5, 朝日静岡版7/7, 毎日静岡版7/11)
- 7/ 伊藤隆史展於清水市文化会館内ループ(-9)。
(朝日静岡版7/7, 毎日静岡版7/9)
- 7/ 大高秀翠展於静岡住友信託銀行静岡支店(-29)。
(静岡7/14, 21, 28)
- 7/ 5 「杉山一明 一灯焼」7/8, 9公開。(沼津朝日7/5)
- 7/ 5 現代日本画選抜七人展於静岡田中屋伊勢丹(-11)。
(静岡7/4, 8)
- 7/ 6 且山会20周年記念展於沼津ギャラリーほさか(-11)。
(沼津毎日6/28, 沼津朝日7/4, 朝日伊豆岳南版7/4, 毎日静岡版7/5)
- 7/ 6 沢村美佐子洋画展於静岡松坂屋(-11)。
(静岡7/6, 7, 朝日静岡版7/6)
- 7/ 6 小笠原淑郎個展於浜松由美画廊(-11)。(毎日静岡版7/5, 朝日遠州版7/6, 静岡7/7)
- 7/ 7 横尾芳月美人画展於沼津西武(-19)。
(朝日伊豆岳南版7/7)
- 7/ 8 「松永礼三」(沼津毎日7/8)
- 7/ 8 近藤浩一路展於神奈川県立近代美術館(-30)。
(東京7/14, 毎日7/18, 朝日7/20, 読売7/26)
- 7/ 土屋賀容子展於伊東ギャラリーヤマモト(-14)。
(毎日東, 中部, 遠州版7/14)
- 7/11 川端政勝展於東京明治画廊(-16)。
(読売静岡版7/11)
- 7/ 鈴木康司日本画展於清水市文化会館内ループ(-20)。(朝日静岡版7/16, 読売静岡版7/18)
- 7/13 沼津イシバシプラザ、オープン。(沼津朝HS50.10/4, S51.3/11, 5/25, S53.2/19, 4/29, 5/23, 静岡7/8, 12, 13, 16, 毎日静岡版S53.2/23, 毎日東, 中部, 遠州版7/12, 読売静岡版7/15)
- 7/13 山田収彫刻展於沼津ギャラリーほさか(-18)。(沼津朝日7/13, 朝日伊豆岳南版7/13, 毎日東部版7/16)
- 7/13 吉野不二太郎個展於清水戸田書店(-18)。(読売静岡版7/11, 毎日静岡版7/12, 静岡7/14, 15, 朝日静岡版7/14, 中日静岡版7/14)
- 7/13 畦地梅太郎木版画展於浜松由美画廊(-25)。(静岡7/8, 14, 17, 21, 読売静岡版7/11, 毎日静岡版7/12, 朝日遠州版7/12)
- 7/ 高橋幹二展於伊東ギャラリーヤマモト(-18)。
(毎日東, 中部, 遠州版7/14, 16)
- 7/14 伊藤隆史パステル画展於清水渡辺画廊(-20)。
(静岡7/14, 読売静岡版7/18)
- 7/15 青木達弥「画家鳥海青児の周辺」(静岡7/15)
- 7/15 柴田隆二「とられたつるべ」(静岡7/15)
- 7/15 「金原宏行 きょうの顔」(中日静岡版7/15)
- 7/15 平馬学《大地》帯広市へ寄贈。(静岡7/15)
- 7/15 安倍修三郎個展於沼津天心画廊(-18)。(沼津朝日7/13, 静岡7/14, 毎日東, 中部, 遠州版7/16)
- 7/ 高橋和生個展於焼津藍画廊(-30)。(静岡7/18)
- 7/18 市川正三「現代人間シリーズしつけ」(静岡7/18)
- 7/18 堤達男《紫苑の乙女》レリーフ除幕式於三島北高。
(静岡7/19)
- 7/19 「浜松市美術館 ほしい市民ギャラリー」
(読売遠州版7/19)
- 7/22 望月通陽染布展於静岡ギャラリークラフト(-27)。
(静岡7/21, 朝日静岡版7/21)
- 7/24 石川茂男・森下武油絵二人展於静岡松坂屋(-8/1)。
(静岡7/21, 28)
- 7/25 大石靖個展於伊東ギャラリーヤマモト(-8/1)。
(静岡7/28, 朝日伊豆岳南版7/28)
- 7/25 杉村孝展於静岡ガスサロン(-30)。
(静岡7/21, 27, 28)
- 7/ 渡辺富三展於清水ワタナベ(-30)。
(朝日静岡版7/29)
- 7/26 県版画協会第43回展於県庁西館展示室(-30)。
- 7/27 草炎会第2回展於沼津ギャラリーほさか(-8/1)。
(沼津毎日7/26, 静岡7/28, 朝日伊豆岳南版7/28)
- 7/27 久保寺光弘油彩展於沼津ギャラリーほさか(-8/1)。
(沼津朝日7/20)
- 7/29 現代の版画展於浜松市美術館(-9/24)。
(毎日静岡版7/26, 朝日遠州版7/28)
- 8/ 1 県水彩画協会第28回展於清水市文化会館(-6)。
(静岡7/21, 28, 8/1, 4)
- 8/ 1 滝井のぼる展於静岡ガスサロン(-6)。(毎日静岡版7/26, 朝日静岡版7/30, 中日静岡版8/3)
- 8/ 1 杉山青樹路個展於静岡ラ・フォルア(-15)。(静岡7/28, 8/4, 7, 11, 朝日静岡版7/30, 毎日静岡版8/2)
- 8/ 1 佐野静恵個展於静岡東海銀行静岡支店(-31)。
(静岡7/21, 28, 8/4, 朝日静岡版8/1)
- 8/ 増田大罇ミニ画展於静岡白岩画廊(-6)。(静岡8/4)
- 8/ 2 ねむの木の子どもたちとまり子展於静岡田中屋伊勢丹(-8)。(静岡7/29, 8/2, 8, 9, 22, 毎日東, 中部, 遠州版8/2, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/2, 中日静岡版8/2, 3)
- 8/ 2 浦田周社展於静岡田中屋伊勢丹(-8)。
(朝日静岡版8/1)
- 8/ 秋山二三九小品展於焼津藍画廊(-15)。
(朝日静岡版8/2)
- 8/ 3 武智幹夫・重岡建治写真・デッサン展於伊東ギャラリーヤマモト(-15)。(朝日東部, 伊豆版8/2, 静岡8/4, 11, 毎日静岡版8/11)
- 8/ 3 遠藤知義個展於沼津ギャラリーほさか(-8)。
(沼津朝日8/1, 朝日伊豆岳南版8/3, 静岡8/4)
- 8/ 3 太田京子・太田恭一・市野三接展於静岡幸文堂(-8)。
(朝日静岡版8/1, 毎日静岡版8/2)
- 8/ 3 佐藤勝彦展於静岡谷島屋書店(-8)。
(毎日静岡版8/2, 朝日静岡版8/3)
- 8/ 3 《人生継走》草薙運動場。(静岡8/4)
- 8/ 3 岡本透水彩画展於浜松由美画廊(-8)。
(静岡7/28, 8/4, 朝日遠州版8/3)
- 8/ 8 松田江畔書作展於清水市文化会館(-13)。
(静岡8/4, 9, 朝日静岡版8/10)
- 8/ 8 伊藤勉黄上海思い出のスケッチ展於静岡ガスサロン(-13)。(静岡7/31, 8/7, 毎日東, 中部, 遠州版8/6, 朝日静岡版8/10)
- 8/ 8 光陽会中部支部展於浜松市美術館(-13)。
(静岡8/4, 10, 11, 中日遠州版8/9)
- 8/ 8 鈴木啓支写真展於浜松市美術館(-13)。(静岡8/4)
- 8/ 8 勝直義個展於浜松ギャラリー花菱(-14)。
(毎日静岡版8/2, 静岡8/4, 朝日遠州版8/8)
- 8/10 林婦美子個展於静岡白岩画廊(-15)。
(毎日静岡版8/9, 静岡8/11)
- 8/10 現代書作家五人展於静岡松坂屋(-15)。
(静岡8/9, 11, 朝日静岡版8/12)
- 8/10 佐々木松次郎作品展於浜松由美画廊(-15)。
(毎日静岡版8/2, 静岡8/4, 10, 朝日遠州版8/10)
- 8/11 平井俊男個展於清水市文化会館(-20)。(静岡8/7, 11, 13, 朝日静岡版8/12, 読売静岡版8/15)
- 8/ 丸茂湛祥展於富士本蔵寺(-15)。(静岡8/16)
- 8/12 大庭修二とその周辺展於御殿場ギャラリー御殿場(-)。(毎日静岡版8/11)
- 8/ 縣善三郎展於浜松アートサロン(-22)。(毎日静岡東, 中部, 遠州版8/13, 朝日静岡版8/13)
- 8/ 『豊竹光雄水彩画集』刊行。(沼津毎日8/13)
- 8/15 青春の墓標展於東京セントラル美術館(-9/3)。
中村萬平《霜子》《自画像》《S子像》
- 8/15 藤枝美術協会展於静岡ガスサロン(-20)。
(読売静岡版8/15, 毎日静岡版8/16)
- 8/ 日本水彩画会浜松支部第4回展於浜松市美術館(-20)。(静岡8/11, 17)
- 8/16 杉山直穂個展於静岡ギャラリークラフト(-21)。(毎日東, 中部, 遠州版8/13, 朝日静岡版8/16, 静岡8/21)

- 8/17 「県立美術博物館はいつ」(毎日東, 中部, 遠州版8/17)
- 8/17 饗場二郎個展於伊東ギャラリーヤマモト(-22)。(朝日伊豆岳南版8/17, 毎日東部版8/20, 静岡8/21, 25)
- 8/17 中荃幸治油絵展於沼津ギャラリーほさか(-22)。(毎日静岡版8/11, 沼津朝日8/13, 朝日伊豆岳南版8/17)
- 8/17 青木一郎展於静岡白岩画廊(-22)。(毎日静岡版8/13, 読売静岡版8/15)
- 8/17 水上悦油絵個展於静岡谷島屋書店(-22)。(静岡8/11, 毎日東, 中部, 遠州版8/13, 読売静岡版8/15, 朝日静岡版8/17)
- 8/17 京焼四人展於静岡松坂屋(-29)。(静岡8/16)
- 8/ 榎原学備前焼の世界展於静岡田中屋伊勢丹(-22)。(毎日静岡版8/18, 静岡8/19)
- 8/ 県善三郎小品展於浜松鴨江アートサロン(-22)。(静岡8/11, 毎日東, 中部, 遠州版8/13)
- 8/ 谷内六郎展於浜松西武(-23)。(朝日遠州版8/19)
- 8/19 渡辺達正銅版画展於浜松由美画廊(-29)。(毎日静岡版8/16, 読売静岡版8/22, 静岡8/25)
- 8/19 中島啓輔作陶展於浜松ギャラリー蛭塚(-28)。(朝日遠州版8/17, 静岡8/25)
- 8/ 藤原マモル個展於静岡さくらやギャラリー(-28)。(毎日東, 中部, 遠州版8/20, 読売静岡版8/22, 静岡8/25)
- 8/ 増田大罇展於静岡サンマリノ(-31)。(朝日静岡版8/19, 読売静岡版8/23, 毎日静岡版9/5)
- 8/21 曾宮一念素描と書展於浜松ナカムラ画廊(-26)。(朝日遠州版8/21, 読売静岡版8/22, 静岡8/25)
- 8/22 竹内哲絵画展於浜松ギャラリー花菱(-31)。(読売静岡版8/18, 朝日遠州版8/22, 静岡8/26)
- 8/ 荒木繁日本画展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-9/13)。(毎日静岡版8/23)
- 8/24 且山会第8回展於沼津ギャラリーほさか(-29)。(沼津朝日8/17, 沼津毎日8/18, 25, 毎日東, 中部, 遠州版8/20, 静岡8/25)
- 8/24 伊倉和勝展於御殿場ギャラリー御殿場(-29)。(毎日東, 中部, 遠州版8/20)
- 8/24 杉村孝《聖観音菩薩像》開眼於藤枝東国寺。(静岡8/25)
- 8/24 宮田三郎展於浜松松菱(-29)。(浜松遠州版8/24)
- 8/ 大川達男作品展於伊東ギャラリーヤマモト(-29)。(静岡8/25, 毎日静岡版8/27)
- 8/ 大塚亮治木彫面展於静岡田中屋伊勢丹(-29)。(静岡8/26)
- 8/25 獺黙庵子展於東京渋谷東急(-30)。(沼津毎日8/23)
- 8/25 丘野顛麗展於静岡谷島屋書店(-29)。(朝日静岡版8/24, 静岡8/25, 9/11, 毎日東, 中部, 遠州版8/25, 27)
- 8/ シュール四人展於静岡谷島屋書店(-9/5)。(静岡8/25, 9/1, 毎日静岡版8/27, 9/5, 読売静岡版8/29)
- 8/28 北川民次展於東京飯田画廊(-9/9)。(東京9/1, 日経9/1, 朝日9/2, 毎日9/4, 読売9/7)
- 8/29 「熱海中生徒たち別荘旧居を研究」(静岡8/29)
- 8/29 白日会中部支部水彩展於静岡ガスサロン(-9/3)。(静岡8/25)
- 8/30 創元会浜松展於浜松市美術館(-9/6)。(毎日東, 中部, 遠州版8/27, 静岡9/1)
- 8/30 鈴木康雄展於浜松松菱(-9/5)。(朝日遠州版8/29)
- 8/ 滝沢彦一油絵個展於静岡長崎屋(-9/4)。(静岡9/2)
- 8/31 中野清光展於沼津ギャラリーほさか(-9/5)。(沼津毎日8/29, 毎日東, 中部, 遠州版8/30, 朝日伊豆岳南版8/30, 静岡9/1, 読売静岡版9/5)
- 8/31 早川薫太郎展於浜松由美画廊(-9/5)。(読売静岡版8/29)
- 8/ 日本画連盟会員第2回展於静岡松坂屋(-5)。(静岡9/1)
- 9/ 1 鈴木慶則展:あぶりだしによる 於東京ギャラリー手(-14)。
- 9/ 1 菅沼稔版画展於沼津ギャラリーほさか(-5)。(沼津毎日8/31, 沼津朝日9/1, 静岡9/1, 毎日東部版9/3)
- 9/ 1 文化勲章受章作家十人逸品展於沼津西武(-13)。(沼津朝日9/1)
- 9/ 1 近藤吾郎油絵個展於御殿場ギャラリー御殿場(-10/1)。(朝日伊豆岳南版8/31, 伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/1, 静岡9/1, 8, 22, 15, 毎日静岡版9/13)
- 9/ 1 沢松耕雲陶展於焼津藍画廊(-10)。(朝日静岡版8/30)
- 9/ 佐藤成幸作陶展於静岡ギャラリー春野(-9/5)。(朝日静岡版9/3)
- 9/ 仲山進作、文部省在外研究員としてイタリア留学。(静岡4/30)
- 9/ 村床信次《残照》蒲原町文化センターに寄贈。(静岡9/4)
- 9/ 北川民次、二科会会長辞任、退会。(中日9/6, 読売9/5, 朝日9/5, 東京9/5, 25, 静岡9/6, 10/21)
- 9/ 池田20世紀美術館展示替。(静岡9/5)
- 9/ 2 池田20世紀美術館所蔵作品展於伊東ギャラリーヤマモト(-17)。(静岡9/2, 8)
- 9/ 3 杉山哲朗個展於沼津池田画廊(-10)。(沼津毎日8/24, 9/9, 沼津朝日9/20, 毎日東, 中部, 遠州版8/30, 静岡9/1, 6, 読売静岡版9/15)
- 9/ ホアン・ミロ版画展於沼津ギャラリータケイ(-9)。(沼津朝日9/7, 静岡9/8)
- 9/ 5 「山下美佐江 女性カメラマン登場」(静岡9/5)
- 9/ 5 太田雅匠展於浜松市美術館(-10)。(朝日遠州版9/5)
- 9/ リチャード・アランビー・ブルックス写真展於静岡ガスサロン(-10)。(読売静岡版8/27, 9/5, 朝日静岡版9/7)
- 9/ 福地啓治展於浜松浜松画廊(-12)。(朝日遠州版9/5, 静岡9/8, 毎日静岡版9/10)
- 9/ 7 第63回二科会展於東京都美術館(-24)。(新入選者)。(静岡9/6, 18, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/6, 読売静岡版9/6)
- 9/ 7 県油彩美術作家秀作展於静岡田中屋伊勢丹(-12)。(静岡9/2,8, 読売静岡版9/5)
- 9/ 7 岐部兆治個展於静岡幸文堂(-12)。(静岡9/1, 8, 毎日東, 中部, 遠州版9/3, 読売静岡版9/5, 朝日静岡版9/7)
- 9/ 7 現代版画展於浜松由美画廊(-12)。(毎日東, 中部, 遠州版9/3, 朝日遠州版9/7, 静岡9/8)
- 9/ 湯地定正写真展於清水戸田書店(-12)。(静岡9/8, 毎日東, 中部, 遠州版9/10)
- 9/ アートエキジビションmuu於静岡田中屋伊勢丹(-12)。(静岡9/8, 毎日静岡版9/8, 10)
- 9/10 ギャラリー静岡オープン。オープン記念作品於藤枝ギャラリー静岡(-20) (静岡9/8, 11, 15, 10/27, 読売静岡版9/12, 朝日静岡版9/28)
- 9/10 山本康夫、高齢者肖像画制作寄贈。(静岡9/8)
- 9/10 小無田泉展於浜松ギャラリー花菱(-19)。(読売静岡版9/5, 毎日静岡版9/8, 朝日遠州版9/11)
- 9/ 杉村勇展於焼津藍画廊(-20)。(読売静岡版9/12, 朝日静岡版9/13, 15)
- 9/12 曾宮一念展於大阪梅田近代美術館(-10/1)。
- 9/12 斎藤計子イラスト展於静岡ガスサロン(-17)。(毎日東, 中部, 遠州版8/30, 読売静岡版9/5)
- 9/14 山田重男木彫小品展於沼津ギャラリーほさか(-17)。(沼津朝日9/17, 静岡9/15)
- 9/14 陶芸燦匠会第21回展於静岡松坂屋(-19)。(静岡9/13, 15, 朝日静岡版9/14)
- 9/14 小林洋子個展於静岡谷島屋書店(-19)。(静岡9/8, 15, 読売静岡版9/19)
- 9/14 トシエ・ゲブリエル展於浜松由美画廊(-19)。(毎日静岡版9/13, 朝日遠州版9/14, 静岡9/15)
- 9/15 山田勇《希望の像》除幕式於沼津勤労青年ホーム。(沼津毎日9/15, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/16)
- 9/15 加藤清美個展於静岡画廊しずおか(-25)。(読売静岡版9/12, 毎日静岡版9/13, 23, 静岡9/22)
- 9/15 杉田美幸展於静岡ギャラリークラフト(-20)。(読売静岡版9/12, 静岡9/15)
- 9/18 北川民次新作展於名古屋日動画廊(-29)。
- 9/20 川端政雄・杉本三男近作小品展於静岡さくらやギャラリー(-25)。(静岡9/15, 22)
- 9/21 池田正司近況。(静岡9/21)
- 9/21 ル・サロン選抜展於浜松松菱(-10/3)。(静岡9/20, 朝日遠州版9/21, 中日遠州版9/21)
- 9/21 集団はままつ写真展於浜松由美画廊(-26)。(中日遠州版9/20, 朝日遠州版9/21, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/22, 22, 読売静岡版9/22, 24)
- 9/ 藤田まさと詩謡書展於静岡松坂屋(-26)。(静岡9/22, 朝日静岡版9/22)
- 9/22 第42回新制作展於東京都美術館(-10/12)。(掛井五郎《アジアの女》細谷泰茲《指人形》《家族'78》)
- 9/22 山下清作品展於清水市文化会館(-27)。(静岡9/22, 読売静岡版9/22)
- 9/23 片瀬和夫「芸術と生活のはざま」(静岡9/23)
- 9/23 滝沢清展於清水市文化会館(-10/7)。(静岡9/24, 29, 読売静岡版9/26)
- 9/23 澤田政廣展於佐野美術館(-11/5)。(静岡9/8, 22,

- 23, 11/3, 毎日東, 中部, 遠州版9/23, 沼津朝日10/10, 24, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/30, 9/19, 伊豆岳南版9/29)
- 9/23 フランス絵画展於新静岡センター(-10/5)。(静岡9/18, 22, 27, 30)
- 9/25 雨村徳光《愛児観音》贈呈式於清水西友。(静岡9/26)
- 9/28 長谷川渉近況。(静岡9/28, 29)
- 9/28 相磯喜代子個展於沼津ギャラリーほさか(-10/3)。(朝日伊豆岳南版9/28, 静岡9/29)
- 9/28 滝沢清・池田正司・川端政雄展於清水市文化会館(-10/7)。(朝日静岡版9/23, 28, 静岡9/24, 29, 読売静岡版9/26, 10/5, 毎日静岡版9/27, 清美協no.173)
- 9/28 桜井誠油絵個展於静岡谷島屋書店(-10/3)。(朝日静岡版9/28, 静岡9/29, 毎日東, 中部, 遠州版10/1)
- 9/28 林谷龍奎作陶展於静岡松坂屋(-10/3)。(静岡9/27, 29, 10/2, 朝日静岡版9/28)
- 9/28 芹沢銈介模様即売会於静岡松坂屋(-10/10)。(朝日静岡版9/26)
- 9/28 森田岩夫淡彩展於静岡田中屋伊勢丹(-10/3)。(朝日静岡版9/26)
- 9/28 長野弥生個展於浜松由美画廊(-10/3)。(読売静岡版9/26, 毎日静岡版9/27, 静岡9/29)
- 9/28 高野良之助展於浜松ギャラリー花菱(-10/4)。(読売静岡版9/27, 朝日遠州版9/28, 毎日遠州版10/1)
- 9/ 三好久枝個展於伊東ギャラリーヤマモト(-10/3)。(静岡9/29, 毎日東, 中部, 遠州版10/1)
- 9/ ベル・エッポック作家版画展於静岡画廊静岡(-10/4)。(読売静岡版9/26, 静岡9/29, 毎日東, 中部, 遠州版10/1)
- 9/29 山下充とパステル画展於東京日動画廊(-10/7)。(朝日10/7)
- 9/30 柴田俊「砂漠」(静岡9/30)
- 9/30 静岡市公会堂閉館。(中日静岡版S48.5/22, S52.6/21, 毎日中部, 遠州版S52.6/17, 毎日静岡版1/12, 静岡S52.6/3, S53.1/10, 2/7, 9/11, S54.8/16, 11/15, 朝日静岡版1/12)
- / 掛井五郎展於東京現代彫刻センター(-10/7)。(毎日10/3)
- 10/ 1 山田安近作展於静岡ラ・フォルア(-31)。(読売静岡版9/6, 毎日東, 中部, 遠州版9/27, 静岡版10/4, 静岡10/20, 27)
- 10/ 前田光一個展於静岡ガスサロン(-)。(静岡12/20)
- 10/ 2 「林谷龍奎 ひと」(静岡10/2)
- 10/ 3 内山雨海書展於東京セントラル美術館(-8)。(静岡9/11)
- 10/ 5 渡辺大造個展於沼津ギャラリーほさか(-10)。(沼津毎日10/5, 朝日伊豆岳南版10/5, 読売静岡版10/5, 静岡10/6, 毎日東, 中部, 遠州版10/8)
- 10/ 5 柴田俊展於静岡幸文堂(-10)。(朝日静岡版10/5, 読売静岡版10/5)
- 10/ 5 小谷和夫展於島田中電ホール(-10)。(読売静岡版10/5)
- 10/ 5 古田晴久展於浜松ギャラリー花菱(-11)。(朝日遠州版10/5, 静岡10/6, 毎日東, 中部, 遠州版10/8)
- 10/ 5 栗原幸彦日本画展於浜松由美画廊(-10)。(朝日遠州版10/5, 静岡10/6)
- 10/ 難波田龍起銅版画集発刊記念展於静岡谷島屋書店(-17)。(静岡10/6, 13, 朝日静岡版10/6, 読売静岡版10/12, 毎日東, 中部, 遠州版10/15)
- 10/ 松永光玉《流水》焼津市へ寄贈。(読売静岡版10/7, 中日静岡版10/24)
- 10/ 6 「掛川城内に美術館を」(静岡10/6)
- 10/ 6 芹沢銈介小品展於静岡西武(-11)。(朝日静岡版8/21, 静岡9/10, 10/5, 7, 読売静岡版10/4, 5, 日経静岡版10/4)
- 10/ 6 大樋年郎自撰茶陶展於静岡西武(-11)。(静岡10/5)
- 10/ 7 柿下木冠「書の母なる国中国へ」(静岡10/7, 14)
- 10/ 7 服部孝彦・柳原彰・白井早苗やきもの三人展於焼津林叟寺(-11)。(静岡9/29, 毎日東, 中部, 遠州版10/8, 読売静岡版10/5)
- 10/ 9 静岡県大写真展於県庁西館展示室(-15)。シンポジウム, 東松照明他参加。(静岡10/9, 毎日静岡版10/12)
- 10/11 伊豆美術展第16回展於修善寺伊豆中央農協(-15)。(静岡10/12)
- 10/11 伴野美恵子水彩展於静岡ガスサロン(-15)。(毎日静岡版10/4, 10, 静岡10/6, 13, 朝日静岡版10/13)
- 10/11 新槐樹社第20回展於県庁西館展示室(-15)。(静岡10/6, 13)
- 10/12 永瀬孝作陶展於伊東ギャラリーヤマモト(-17)。(静岡10/13, 16)
- 10/12 大塚節夫展於沼津ギャラリーほさか(-17)。(沼津毎日10/5, 朝日伊豆岳南版10/12, 読売静岡版10/12, 静岡10/13, 毎日東, 中部, 遠州版10/15)
- 10/12 滝川武版画展於清水戸田書店(-16)。(静岡10/6, 13, 朝日静岡版10/13)
- 10/12 地線展於静岡伊勢丹(-17)。(読売静岡版10/12, 朝日静岡版10/15)
- 10/12 佐藤暢男銅版画展於浜松由美画廊(-17)。(毎日東, 中部, 遠州版10/8, 朝日遠州版10/12, 静岡10/13)
- 10/12 現代洋画実力作家5人展於浜松松菱(-17)。(朝日静岡版10/12)
- 10/13 柳沢紀子銅版画展於浜松西武(-18)。(静岡10/12, 15, 朝日遠州版10/15, 読売遠州版10/17)
- 10/ 原川裕子ファッションイラスト展於静岡松坂屋(-18)。(静岡10/13)
- 10/14 近代日本画の巨匠展於神奈川県立近代美術館(-11/12)。近藤浩一路《京洛十題のうち 市原野夕照》《同 市原野立夏》中村岳陵《水蔭》《孫》
- 10/14 第5回創画会展於東京都美術館(-29)。秋野不矩《黄土》
- 10/14 第32回二紀展於東京都美術館(-29)。水野欣三郎《棺》
- 10/14 「後藤清吉郎 こんにちは話題の人」(静岡10/14)
- 10/ 山田勇《希望の像》完成於沼津市立勤労青少年ホーム。(静岡10/15)
- 10/ 岡沢虎二郎作品展於静岡スナック喫茶絵画(-)。(静岡10/21)
- 10/15 サルバドール・ダリ版画展於沼津ギャラリータケイ(-25)。(沼津毎日10/15, 沼津朝日10/15, 静岡10/20)
- 10/16 「伊藤勉黄 この人に聞く」(静岡10/16)
- 10/ 小山勇《風ん子》2点《雪ん子》浜松高砂小に寄贈。(静岡10/18, 中日遠州版10/21)
- 10/ 那須野浩・野中弘士『わが佐鳴湖』刊行。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版10/19)
- 10/18 韓国画家汕村作品、大邱文化放送より静岡市へ寄贈される。(静岡10/19, 読売静岡版10/19)
- 10/19 新制作協会オリジナルリトグラフ展於沼津ギャラリーほさか(-24)。(沼津朝日10/19)
- 10/ 鈴木白鴻・成田真洞・和田考之 磊書第3回展於沼津ギャラリーほさか(-24)。(沼津毎日10/21, 毎日東, 中部, 遠州版10/22)
- 10/19 横山央児個展於伊東ギャラリーヤマモト(-24)。(毎日静岡版10/18, 朝日伊豆岳南版10/18, 読売静岡版10/19, 静岡10/20)
- 10/19 増田大罇喜寿展於静岡田中屋伊勢丹(-24)。(静岡10/13, 20, 21, 毎日静岡版10/18, 読売静岡版10/19, 22, 朝日静岡版10/18, 21)
- 10/19 天野清一油絵個展於静岡幸文堂(-24)。(読売静岡版10/19, 静岡10/20)
- 10/19 勝見裕介展於島田中電(-25)。(中日静岡版10/20)
- 10/19 高橋典明個展於浜松由美画廊(-24)。(毎日東, 中部, 遠州版10/15, 読売静岡版10/19, 静岡10/20)
- 10/19 鈴木貞夫墨彩展於浜松遠鉄(-23)。(朝日遠州版10/19, 読売静岡版10/19)
- 10/ 野中弘士画『わが佐鳴湖』(朝日静岡版10/19)
- 10/20 「八木秀之助 この人と」(朝日静岡版10/20)
- 10/20 申相浩展於新静岡センター(-11/8)。(静岡10/21)
- 10/20 平井顕斎展於常葉美術館(-11/10)。(読売静岡版10/19, 静岡10/21, 30, 11/3)
- 10/21 近代日本画展於浜松市美術館(-11/15)。(静岡9/14, 10/21, 朝日遠州版10/21, 中日静岡版10/31)
- 10/21 画廊・画材店共同広告(静岡10/21)
- 10/ 二重作龍夫後援会発足於富士宮。(静岡10/23)
- 10/22 「佐野丹丘 こんにちは」(沼津朝日10/22)
- 10/22 「美術と歴史の殿堂実現はいつ」(静岡10/22)
- 10/22 太田銀治展於東京(-27)。(朝日伊豆岳南版10/21)
- 10/22 浜松市美術館友の会会員愛蔵品展於浜松市美術館(-29)。(静岡10/20, 21)
- 10/23 赤堀尚展於東京銀座和光(-31)。(沼津朝日10/24, 沼津毎日10/24)
- 10/23 造景美術展於浜松静銀鍛冶町支店(-28)。(静岡10/20, 24)
- 10/24 海野光弘版画展於静岡ガスサロン(-29)。(読売静岡版10/19, 26, 毎日東, 中部, 遠州版10/22, 25, 朝日静岡版10/20, 24, 25, 静岡10/27)
- 10/25 白美会第1回展於沼津イシバシプラザ(-30)。(朝日伊豆岳南版10/25)
- 10/25 写実派協会展於県庁西館展示室(-29)。(朝日静岡版10/25, 読売静岡版10/26)
- 10/26 益子焼新進作家6人展於沼津ギャラリーほさか(-31)。(沼津毎日10/27, 沼津朝日10/26, 朝日伊豆岳南版10/26, 毎日東, 中部, 遠州版10/29)

- 10/26 塚越仁慈油彩画展於清水渡辺画廊(-11/9)。(静岡10/21, 28, 朝日静岡版10/28)
- 10/26 伊藤勉黄版画展於静岡松坂屋(-31)。(静岡10/16, 25, 27, 朝日静岡版10/26, 読売静岡版10/26)
- 10/26 勝山陽個展於静岡幸文堂(-31)。(朝日静岡版10/26, 静岡10/27)
- 10/26 小山勇油絵個展於浜松由美画廊(-31)。(静岡10/18, 20, 27, 毎日遠州版10/25, 中日遠州版10/27)
- 10/27 県重要文化財所有者連絡会議発足。(静岡9/2)
- 10/27 長沢脩而「第2回美芸展」(沼津朝日10/27)
- 10/27 大石靖展於大仁ギャラリーさつき(-31)。(朝日伊豆岳南版10/27)
- 10/29 野沢義宣個展於ギャラリー御殿場(-11/5)。(静岡10/27, 11/3)
- 10/ 佐々木功《残春》小山町立青少年会館に寄贈。(静岡10/29)
- 10/31 青木草風きりえ展於静岡ガスサロン(-11/5)。(毎日東, 中部, 遠州版10/25, 静岡10/27, 11/3, 朝日静岡版10/31, 伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/1, 読売静岡版11/2)
- 11/ 1 行動美術展於浜松市美術館(-7)。(読売静岡版10/26, 毎日東, 中部, 遠州版10/29, 静岡10/30, 11/2, 朝日遠州版11/1, 中日遠州版11/2)
- 11/ シャガール版画展於静岡ラ・フォルリア(-30)。(静岡11/11, 17, 20, 24, 朝日静岡版11/1, 読売静岡版11/16)
- 11/ 2 第10回日展於東京都美術館(-26)。
藤本東一良《古城の港》浅井行雄《花》大村政夫《麦の女》館野弘青《鶏匠》堤達男《忍びよるたそがれ》杉本宗一《ポデービルの男》平野富山《母子順風》和田金剛《祈り》
篠田幸夫《めばえ》入選。(静岡11/18)
新入選者。(毎日東, 中部, 遠州版10/27)
- 11/ 2 「鳥羽録一 こんにちは話題の人」(静岡11/2)
- 11/ 2 風土展於沼津ギャラリーほさか(-7)。(沼津朝日10/31, 沼津毎日11/2, 静岡11/3)
- 11/ 2 川端政勝個展於清水戸田書店(-7)。(静岡10/27, 11/3, 毎日東, 中部, 遠州版10/29, 読売静岡版11/2)
- 11/ 2 チコン・コレクション名作浮世絵二百年展於静岡松坂屋(-7)。(静岡10/7, 30, 11/1, 3, 4, 朝日静岡版10/17, 28, 31, 11/2, 3)
- 11/ 2 求正美油彩画展於浜松由美画廊(-7)。(読売静岡版10/26, 静岡10/27, 11/3, 中日遠州版10/27, 朝日遠州版11/2)
- 11/ 2 掛井五郎彫刻展於静岡田中屋伊勢丹(-7)。(《バンザイ・ヒル》《夏の花》他。(毎日静岡版10/31, 静岡10/28, 11/2, 3, 5, 朝日静岡版11/2, 読売静岡版11/2)
- 11/ 3 篠田幸夫《華》除幕式於清水市文化会館。(静岡11/3, 読売静岡版11/3)
- 11/ 3 静岡市民文化会館開館。(日経静岡版S47.1/25, 中日遠州版S47.2/14, S48.11/5, 12/16, S50.1/16, 静岡版S52.4/13, 11/10, 12/2, 4, S53.1/4, 7/5, 8/31, 9/5, 10/22, 11/2, 静岡S48.3/29, S52.2/6, 8/9, 19, 22, S53.3/8, 4/12, 14, 26, 5/10, 26, 8/3, 22, 29, 9/5, 30, 10/6, 19, 11/2, 12/1. 16. 3, S54.2/27, 9/5, 10/22, 11/4, 毎日東, 中部, 遠州版S48.10/10, 毎日静岡版S50.4/11, 10/31, S52.2/6, S53.11/4, 読売静岡版S48.9/19, S50.9/13, S53.1/10, 7/4, 朝日静岡, 遠州版S52.11/3, S53.1/12, 5/8, 10/29)
掛井五郎《南アルプス》(中日静岡版S52.11/10, 毎日静岡版4/27, 毎日東, 中部, 遠州版10/24, 31, 静岡4/20, 10/28, 11/2, 3, 5, S57.6/21, 朝日静岡, 遠州版4/20)
南淳一《豊穰》(朝日静岡, 遠州版5/2)
神成滂《譜見の詩》(中日静岡版S52.11/10, 朝日静岡版10/29, 静岡11/2)
芹沢銈介《緞帳》(中日静岡版S52.11/10, 静岡4/14, 11/2, 朝日静岡版6/22, 読売静岡版9/5, 伊豆岳南, 静岡, 遠州版9/6)
宮崎萬平《バラの花》(読売静岡版1/10, 9/5, 静岡11/2)
- 11/ 3 愛宕山画廊油絵展於焼津藪崎新聞店(-5)。(朝日静岡11/3)
- 11/ 4 ルノワール版画展於静岡画廊しずおか(-14)。(静岡10/28, 毎日東, 中部, 遠州版11/5)
- 11/ 4 杉村勇油絵展於静岡三菱信託銀行静岡支店(-17)。(静岡11/3, 10, 朝日静岡版11/4, 6, 毎日静岡版11/8, 読売静岡版11/16)
- 11/ 市川鉦治展於藤枝ギャラリー静岡(-18)。(朝日静岡版11/10, 毎日静岡版11/15)
- 11/ 7 田中貴山展於静岡ガスサロン(-12)。(朝日静岡版11/5, 9, 毎日静岡版11/8)
- 11/ 8 県芸術祭第18回於清水市文化会館・県庁西館展示室(8-12)、於県庁西館展示室(22-26)、於浜松市美術館(22-29)。審査員:森田曠平, 杉本儀八, 大竹省三, 上田薫, 島田章三, 上條信山, 伊藤鳳雲, 左右木愛弼, 富永直樹, 馬場雄二, 若江漢字, 関野準一郎。(静岡10/28, 11/9, 23, 読売静岡版11/8, 9, 12/7, 中日静岡版11/8, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版8/2, 11/9)
- 11/ 9 静流会小品展於沼津ギャラリーほさか(-14)。(沼津朝日11/7, 読売静岡版11/9, 静岡11/10, 朝日伊豆岳南版11/10)
- 11/ 9 小池知澄遺作スケッチ展於沼津ギャラリーほさか(-14)。(朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/5, 伊豆岳南版11/9, 沼津朝日11/8, 静岡11/10, 毎日静岡版11/5, 10)
- 11/ 9 松本豪展於伊東ギャラリーヤマモト(-13)。(毎日静岡版11/10)
- 11/ 9 堀池慶作個展於清水戸田書店(-14)。(清美協no.174)
- 11/ 9 青木達弥作品展於静岡松坂屋(-14)。(読売静岡版11/9, 毎日静岡版11/5, 10, 静岡11/11)
- 11/ 9 長谷川安信版画展於浜松ギャラリー花菱(-18)。(毎日静岡版11/8, 朝日遠州版11/8, 静岡11/10)
- 11/ 9 犬塚友吉展於浜松由美画廊(-14)。(朝日遠州版11/9, 静岡11/10)
- 11/ 後藤蕉堂書作展於浜松松菱(-14)。(静岡11/12, 毎日東, 中部, 遠州版11/12)
- 11/ 竹内勝行展於浜松ギャラリー蛭塚(-19)。(読売静岡版11/16)
- 11/10 みくりや美術展第10回展於御殿場市民会館(-12)。(静岡11/3, 12, 毎日静岡版11/5, 8, 読売静岡版11/9)
- 11/10 黒崎義介伊豆山神社天井画292枚奉納。(朝日伊豆岳南版11/8, 毎日静岡版12/1)
- 11/10 沼津市美術展30周年記念郷土選抜作家展於沼津西武(-13)。(沼津朝日S52.6/9, S53.8/30, 11/7, 沼津毎日S52.6/15, 7/6, 朝日伊豆岳南, 静岡, 遠州版11/10)
- 11/10 ミュシャ展於新静岡センター(-19)。(中日県内版10/10, 11/5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 16, 静岡11/4, 9, 11, 15)
- 11/10 杉山京子油絵個展於静岡クラフトギャラリー(-15)。(静岡11/10, 読売静岡版11/9, 朝日静岡版11/10, 毎日東, 中部, 遠州版11/12)
- 11/ 小林朝路展於沼津西武(-22)。(沼津朝日11/11)
- 11/11 初期南画展於佐野美術館(-12/24)。(沼津朝日11/9)
- 11/12 土橋妙子逝去。享年73。(静岡11/13, 20)
- 11/14 資生堂アートハウス, オープン。(毎日静岡版S52.10/20, S53.11/18, 静岡11/11, 朝日遠州版11/15)
- 11/ 杉山茂油絵個展於清水市文化会館(-19)。(静岡11/17)
- 11/ はなわ憲嗣個展於県庁西館展示室(-19)。(静岡11/17)
- 11/15 第63回二科静岡展於静岡市民文化会館(-27)。(静岡9/26, 10/12, 15, 20, 21, 26, 28, 29, 11/4, 5, 7, 9, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 18, 20, 21, 25, 28, 毎日東, 中部, 遠州版11/26)
- 11/16 坂上一栄水墨墨彩展於県庁西館展示室(-19)。(静岡11/10, 毎日静岡版11/15, 朝日静岡版11/15, 読売静岡版11/16)
- 11/16 杉山照治・杉山瑛子二人展於静岡谷島屋書店(-21)。(毎日東, 中部, 遠州版11/12, 朝日静岡版11/16, 読売静岡版11/16, 静岡11/17, 18)
- 11/16 森義利版画展於浜松由美画廊(-21)。(静岡11/11, 17, 20, 毎日遠州版11/12, 読売静岡版11/16, 朝日遠州版11/16)
- 11/ 山崎肇・大島賢一・菊間賢三油 彩画三人展於伊東ギャラリーヤマモト(-21)。(静岡11/17, 18, 毎日静岡版11/17)
- 11/ さわらび会於沼津ギャラリーほさか(-21)。(沼津朝日11/17, 朝日伊豆岳南版11/18, 静岡11/20)
- 11/17 レオナルド・フジタ版画展於沼津ギャラリータケイ(-26)。(沼津朝日11/17, 21, 朝日伊豆岳南版11/19, 静岡11/24)
- 11/17 エクスリプリス展於静岡画廊静岡(-28)。(静岡11/17)
- 11/ バーナード・リーチ展於浜松西武(-22)。(朝日遠州版11/18)

- 11/18 大庭祐輔小品展於浜松遠鉄(-23)。(静岡11/4, 朝日遠州版11/22)
- 11/18 岐部兆治展於岡部ギャラリー静額(-27)。(静岡11/17, 24, 朝日静岡版11/19)
- 11/ 長谷川富三郎板画展於富士イトーヨーカ堂富士店(-23)。(静岡11/18)
- 11/19 「篠田幸夫 こんにちは話題の人」(静岡11/19)
- 11/19 トレチャコフ美術館の名品展於富士美術館(-12/18)。(静岡11/3, 9, 18, 読売静岡版11/16)
- 11/19 吉崎京一油絵個展於浜松ギャラリー花菱(-26)。(静岡11/13, 17, 朝日遠州版11/19)
- 11/21 鈴木慶則絵画展於清水市文化会館(-26)。(静岡11/17, 毎日静岡版11/22)
- 11/21 戦後の県版画代表作品展於清水市文化会館(-26)。(静岡11/17, 22, 毎日静岡版11/22, 朝日静岡版11/22, 読売静岡版11/23)
- 11/21 前島範久木彫展於静岡ガスサロン(-26)。(朝日静岡版11/21, 静岡11/24)
- 11/21 山本竹次油絵個展於焼津藍画廊(-30)。(静岡11/17, 朝日静岡版11/21)
- 11/ 虹陶第2回展於浜松商工会館(-26)。(静岡11/24)
- 11/22 沢松耕雲展作陶展於静岡さくらやギャラリー(-27)。(朝日静岡版11/21)
- 11/23 「東俊光 いま私は」(読売静岡版11/23)
- 11/23 下田くら「下田舜堂 うちの亭主」(静岡11/23)
- 11/23 吉田清志油絵個展於静岡田中屋伊勢丹(-28)。(静岡11/17, 毎日静岡版11/22, 読売静岡版11/23)
- 11/23 複数による「複数と私」展於谷島屋書店(-28)。(静岡11/20, 24, 読売静岡版11/23, 毎日東, 中部, 遠州版11/26)
- 11/23 石川茂男展於浜松松菱(-28)。(朝日遠州版11/23)
- 11/ 佐藤徹油絵個展於浜松由美画廊(-28)。(静岡11/24, 毎日東, 中部, 遠州版11/26)
- 11/26 荒内博作陶展於新静岡センター(-12/1)。(読売静岡版11/26, 朝日静岡版11/29)
- 11/27 沢村美佐子個展於東京資生堂ギャラリー(-12/2)
- 11/29 森義彦作陶展於静岡ギャラリークラフト(-12/4)。(毎日東, 中部, 遠州版11/26, 12/3, 静岡11/27, 12/1, 朝日静岡版11/28, 読売静岡版11/30)
- 11/29 村木甫展於岡部ギャラリー静額(-12/8)。(朝日静岡版11/28)
- 11/30 成瀬憲油彩展於沼津ギャラリーほさか(-12/5)。(沼津毎日11/29, 沼津朝日11/30, 読売静岡版11/30, 静岡12/1)
- 11/30 吉野不二太郎個展於静岡幸文堂(-12/5)。(静岡11/27, 12/1, 読売静岡版11/30, 朝日静岡版12/1, 毎日東, 中部, 遠州版12/3)
- 11/30 久保田光亭水墨画展於静岡松坂屋(-12/3)。(静岡11/29, 12/1, 朝日静岡版11/30)
- 11/30 藪崎昭展於静岡谷島屋書店(-12/6)。(毎日東, 中部, 遠州版11/26, 静岡12/1, 2)
- 11/ 藤田真也展於伊東ギャラリーヤマモト(-12/5)。(静岡12/1, 朝日伊豆岳南版12/3)
- 11/ 田中千之・大川原久夫・栗原幸彦展於浜松由美画廊(-5)。(毎日東, 中部, 遠州版12/3)
- 11/ 秋野不矩、京都市文化功労者表彰。
- 12/ 1 斎藤真一初期作品展於東京不忍画廊(-28)。
- 12/ 1 武山敏江展於静岡ラ・フォルア(-29)。(静岡11/27, 毎日静岡版12/6)
- 12/ 1 東俊光作品展於静岡市民文化会館(-10)、於静岡テレビ(14-20)。(読売静岡版11/23, 静岡12/2, 15)
- 12/ 7 遠藤竹次展於沼津ギャラリータケイ(-13)。(毎日静岡版12/1, 朝日静岡版12/5, 沼津朝日12/7, 読売静岡版12/7, 静岡12/8)
- 12/ 7 大庭祐輔展於静岡谷島屋(-20)。(毎日中部, 遠州版12/6, 16, 読売静岡版12/7, 中日県内版12/8, 静岡12/8, 9, 朝日静岡版12/10)
- 12/ 7 渡辺貞雄版画展於浜松由美画廊(-19)。(静岡12/1, 8)
- 12/ 鳩巣会第4回展於沼津ギャラリーほさか(-13)。(沼津朝日12/8)
- 12/ 加藤孝道陶芸展於沼津西武(-13)。(沼津朝日12/8)
- 12/ 若尾和呂展於静岡田中屋伊勢丹(-12)。(朝日静岡版12/8)
- 12/ 徳川家書初め、中央図書館に寄贈される。(静岡12/8)
- 12/11 落合英男個展於県庁西館展示室(-17)。(静岡12/8, 朝日静岡版12/12, 毎日静岡版12/13, 読売静岡版12/14)
- 12/11 深谷徹展於浜松ギャラリー花菱(-27)。(静岡12/8, 15, 22, 毎日静岡版12/10, 朝日静岡版12/10)
- 12/12 市川正三展於清水市文化会館(-17)。12/17.講演会。(読売静岡版12/7, 14, 静岡12/14, 毎日東, 中部, 遠州版12/17)
- 12/13 杉山青樹路展・青洞会16回展於静岡田中屋伊勢丹(-19)。(静岡12/8, 15, 毎日静岡版12/13, 朝日静岡版12/13)
- 12/ 三橋硯也展於伊東ギャラリーヤマモト(-19)。(静岡12/15)
- 12/15 平井俊男油彩色紙展於清水ワタナベ(-21)。(毎日静岡版12/13, 読売静岡版12/14, 静岡12/15, 朝日静岡版12/15)
- 12/16 牧田久治・松下正次展於焼津藍画廊(-31)。(朝日静岡版12/15, 静岡12/22)
- 12/19 吉野不二太郎油絵展於清水市文化会館(-24)。(読売静岡版12/14, 静岡12/15, 毎日東, 中部, 遠州版12/17, 24, 朝日静岡版12/17)
- 12/19 自由美術静岡展於浜松市美術館(-24)。(毎日東, 中部, 遠州版12/17, 朝日遠州版12/18, 静岡12/22)
- 12/ 田畑武雄展於浜松元城アートギャラリー(-24)。(毎日東, 中部, 遠州版12/24)
- 12/20 柴田秀夫近況。(静岡12/20)
- 12/ 山田収《妙覚寺仁王像》制作。(静岡12/21)
- 12/21 グループノア展於沼津マルサン書店(-26)。(朝日伊豆岳南版12/21, 静岡12/25, 沼津朝日12/26)
- 12/ 木下伝三郎《母子像》於天城湯ヶ島山村開発センター。(静岡12/23)
- 12/ 堤達男《母子像》於富士みどりご保育園。(静岡12/23)
- 12/23 長岡宏・伊藤勉黄「県美術この一年」(静岡12/23)
- 12/23 松林トミ夫逝去。52歳。(静岡12/24, 25)
- 12/ 大川原平八《秋の穂高》大井川町中央公民館に寄贈。(静岡12/27)
- / 谷内六郎原画《西洋館の思い出》壁画完成於静岡谷島屋。(静岡H29.7/5)

新たな学校連携の試み — オンライン授業の実践例 —

掛川市二の丸美術館 飯田杏子

はじめに

美術館や博物館(以下、博物館という)において学校との連携は重要な事業として位置づけられてきている。児童生徒が博物館を訪れ実物資料を見て、その実物資料の力を実体験として得られることは教室内の授業においては得られない感動を生む。また、学校から出られないという様々な障害をクリアするべく、博物館から実物資料を学校へ持参し、児童生徒に実際に見てもらうことも出前授業などと略称して実施されてきている。

こうした現状の中、過密化してきている学校での授業や行事の為、これまでの学校との連携授業の実施に大きな障害が出てきている。それらの課題解決として、博物館と学校とをライブ配信によりつなげ、生の博物館を見てもらおうというのが「オンライン授業」である。この「オンライン授業」のメリットは学校側の正規授業の時間内に実施することができる点であるが、内容について博物館側が十分対応できるかという課題もある。こうした課題がある中、一つの試みとして実施した例を紹介し、さらに今後の改善を加え、より良い学校との連携が実現できる一つの事例として紹介する。

1 現在の状況

(1) 市内の小・中・高等学校数および在籍数と地理的状況

令和6年度現在、掛川市内には小学校22校、中学校9校、高等学校4校があり、在籍児童・生徒数は、小学生6,289人、中学生3,165人、高校生2,440人である。掛川市は南北に長い為、美術館から一番遠い学校は距離にして約30km、車で約40分かかると一方、一番近い学校は美術館から300mの位置にある。

(2) オンライン授業に至った経緯

上述のように、市内には35校の小中学校・高等学校が存在するが、市内全域の児童生徒が平等に美術館を利用できるための方策を取るには課題がある。特に大きな課題は、交通手段と授業時間の確保である。交

通手段については、市のバスを借りての移動等配慮もなされてきてはいるが限定的である。授業時間確保については、はじめにでも述べたように、学校の過密化してきている年間スケジュールの中、他の授業との調整もあり容易ではない。コロナ禍以降、校外学習を取り止めた学校もあり、教育課程の中に、児童生徒の美術館訪問を位置付けることはハードルが高いものと思われる。

一方、2019年から始まった「GIGAスクール構想」によって全国の小中学校では児童生徒に1人1台タブレット端末が支給され、高速大容量通信ネットワークが整備されるなど、学校のICT環境は急速に進展しICTを活用した教育が広がっている。高等学校においても、教科「情報I」の必履修化や情報活用能力育成の重要性を踏まえ、同様の対応が取られている。

このように、学校現場において美術館との新たな連携を進める土台が築かれつつある中、市内全ての児童生徒が等しく美術館を活用できるようZoomを用いたオンライン授業を計画し実施した。

2 これまでの学校連携

これまでの学校連携は、図工や美術の時間に学芸員が学校に赴き、アートカードを利用した鑑賞教育が主であった。学習指導要領には「美術館等との連携や活用」が記されており、美術館側も鑑賞教育を行うことで、児童生徒の美術への興味関心を高め、美術館を訪れる機会を作り出そうとしていた。

3 実施報告

【令和5年度実施分】

(1) 日 時 令和6年2月14日(水) 13:15～14:00

実施校 掛川市立中小学校

学 年 3年生 18人

題 材 展覧会「ちょっと昔の暮らし展 — 道具と暮らしの移り変わり —」

科 目 社会科

目 的 これまで行っていた図工や美術の時間で

の鑑賞教育以外に、他の教科や内容での学校との連携を探るため、小学3年生の社会科の学習単元「かわる道具とくらし」に対応したものととして当館で計画・開催されていた展覧会を題材に授業を行った。

展覧会の趣旨・内容

市内の小中学生に美術館に足を運んでもらう、または知ってもらう機会となるよう、小学校3年生の社会科の単元「かわる道具とくらし」に対応したものととして計画・開催した。児童生徒の祖父母・父母世代の子供の頃の生活の様子を、身近にある生活道具や文具、お菓子のパッケージデザインを用いて紹介した。道具や暮らしの変化の紹介だけではなく、デザインの変化にも焦点を当てることで、教科書の内容を実際に自分の目で見て学ぶと同時に、新たなデザインを創り出す楽しさを感じてもらうことを目的として開催した。

ア 授業内容

下記の内容を授業で取り扱った。事前に作成したPowerPointの資料や実物は画面共有機能で見てもらい、双方がリアルタイムで確認できるようにした。

また、魔法瓶(ポット)の機能面の進化の説明では実演をした。

- ◆ ご飯を炊く道具と保温する道具の移り変わり
- ◆ 魔法瓶(ポット)の機能面の進化とデザインの変遷
- ◆ 昭和30～40年代に発売されたロングセラー商品(主にお菓子)のパッケージデザイン
- ◆ 「あなたオリジナルのポットのデザインを考えてみよう」(図1)のワークシートへの記入

イ 児童からの感想

※読み易くするために、平仮名を漢字にしたり接続詞を変更したが内容は変えていない

- ◆ オンライン授業で回転するポットや花柄のポットを初めて知りました。
- ◆ 今の炊飯器と昔の炊飯器は見た目が一緒で、今の炊飯器はご飯を炊くのと温めておくのと2つできるけど、昔は温めておくのしかできないというのを初めて知って勉強になった。
- ◆ 昔も今も色んなことを工夫しているんだなと思いました。これからも色んな物を見て昔はどうだったのか

予想してみたいです

(2) 日 時 令和6年2月15日(木)、18日(月)、19日(火)
(各50分)

実施校 静岡県立横須賀高等学校

学 年 1年生 3クラス 51名(美術選択者)

題 材 展覧会「ちょっと昔の暮らし展 — 道具と暮らしの移り変わり —」

科 目 美術I

目 的 展覧会の中でもデザインに関する部分に焦点を当て、「伝えることや使うことなどの目的や機能などを考えた表現」に触れ、デザインが生活や社会に果たす役割について考えることを目標とした。また、事前の打合せの段階で美術館がどんな場所か知らない、行ったことがない生徒が多いと聞いていたので、小学校のオンライン授業用に作成した美術館紹介の動画を用いて、美術館への理解を深めることも目的とした。

ア 授業内容

下記の内容を授業で取り扱った。授業形態は先に実施した小学校と同様である。

- ◆ 展覧会を開催した目的
- ◆ '64東京オリンピックポスター
- ◆ 魔法瓶(ポット)の機能面の進化とデザインの変遷
- ◆ 昭和レトロブーム
- ◆ 「あなたオリジナルのポットのデザインを考えてみよう」(図1)のワークシートへの記入

イ 生徒からの感想

- ◆ オンラインで現地とつながることで実際の話の間近で聞くことができる点が通常授業と比べ良い点だと思った。また、実際の展示について知れることも良いと感じた。
- ◆ デザインや形は時代によってかなり変わっていることがわかった。機能が向上するとそれに合わせた形になる。今回話を聞いて道具のデザインについてもっと知りたいと思った。
- ◆ 美術館がどのようなものか分かった。色々な発展について分かった。

【令和6年度実施分(12月末現在)】

(3)日 時 令和6年6月14日(金) 10:50~11:35

実施校 掛川市立佐東小学校

学 年 3年生 22名

題 材 掛川の歴史・文化・美術を知ろう

科 目 社会科

目 的 小学3年生の社会「市の様子-古いたてものがある所」、中学校社会「身近な地域の歴史」、総合的な学習の時間「地域や学校の特色に応じた課題」に対応するものとして計画した授業である。学校の位置する場所にかかわらず、市の中心部にある掛川城や歴史的建造物、文化財について知ることで、ひいては、自分が住む地域の歴史文化遺産にも興味を持ち調べようとする姿勢を育むことを目的とした。

ア 授業内容

下記の7つの施設を取り上げ、それぞれについて中の様子を撮影した動画や画像を用いて紹介した。児童が飽きないようにするため、時々クイズを出したり掛川城の説明では、歴史とともに児童が興味を示しそうな石落としや狭間等のお城の防御設備についても説明した。

- ◆ 掛川城
- ◆ 御殿
- ◆ 二の丸美術館
- ◆ ステンドグラス美術館
- ◆ 報徳図書館
- ◆ 小夜の中山 久延寺
- ◆ 日坂

(4)日 時 令和6年7月4日(木)

9:30~10:20/10:30~11:20

実施校 掛川市立城東中学校

学 年 3年生 2クラス(32名/31名)

題 材 美術館について・学芸員の仕事とは

科 目 美術科

目 的 美術館の役割、展覧会ができていくまでの工程や学芸員の仕事を説明・紹介し、美術館に親しみを感じてもらおうと同時に、学芸員の仕事に対する理解を深めることを目的に授業を行った。

経 緯 当初、予定にはない授業内容だったが令和

6年度のオンライン授業実施一覧(表1)を見た美術担当の先生より、「美術の時間に自分で作品展を企画し、ミニチュアを展示する予定があるが、美術館や博物館に行ったことがない生徒や関心が薄い生徒も多いため、生徒が興味を持つきっかけを作りたい」との依頼を受け実施した。

ア 授業内容

授業実施時に開催していた展覧会を題材とし、展覧会の開催前と開催後の学芸員の仕事や実際の展示替えの時の話をした。イメージを膨らませやすくするため、特に、展示替えの時の説明では事前に撮影していた作業時の画像を用いて、展示室が出来上がっていく様子を示しながら、展示作業の際に気を配っていること等を説明した。

イ 生徒からの感想

- ◆ 美術館に行った際には、作品だけではなく展示室全体の雰囲気も見てみたいと思いました。
 - ◆ 将来、なりたいものの視野が広がりました。
 - ◆ 学芸員の仕事について気になっていたもので、知ることができて嬉しかったです。
 - ◆ 展示の仕方に様々な工夫や配慮がされていることを知りました。
 - ◆ 展覧会を作るために沢山の過程があり、苦労していることがわかりました。
 - ◆ 今度美術館に行った時には、作品だけではなく展示の工夫など新しい視点でも見たいです。
- この他にも、実際に美術館に行ってみたくなった、美術館に興味を湧いた等の美術館に対する興味関心が高まったことが伺える感想が多く寄せられた。

おわりに

今後、ICTを活用した美術館と学校との連携はますます増えていくことが予想される。最後に、今回オンライン授業を実施し、得た成果と今後の課題について述べる。

成果

- ◆ 美術館の存在や役割、学芸員の仕事について伝えることができ、美術館に対し親しみを感じるとともに、興味関心を持ってもらうことができた。
- ◆ これまでの出前授業に代わる新しい学校連携の可能性を探れた。

今後の課題

- ◆ オンライン授業の内容を学校側が求めているものと一致させ、利用しやすくするため、計画段階から内容について学校側から指導・アドバイスを受けられるような体制を整えること。
- ◆ 同一学区内の同一学年であれば、同じ時間帯に同じ授業を受けることを可能にするなど、美術館対1校だけではなく、美術館対複数校といった形での実施を目指していく。

展覧会に関連する業務と並行し、オンライン授業を実施することは学芸員の負担を増やすことにつながる。しかし、他の業務の効率化を図りつつオンライン授業を継続していくことは、美術館が社会教育施設として十分に機能するためにも大切なことである。また、子どもの頃に美術館という存在に触れ、その楽しみ方を覚えた子供たちはきっと将来の美術館利用者・支援者となるだろう。長期的に見れば、オンライン授業は美術館利用者のすそ野を広げることもつながっていく取組みなのである。一方、学芸員側にとっても児童生徒の前でわかりやすく話すということは、自分が担当した展覧会でのギャラリートークにいかせるものであり、短期的には大変だが将来的に必ず自分の仕事にいかされてくるものだとと言える。

「はじめに」は日比野館長、ほかは飯田が執筆した。

謝辞

オンライン授業の機会をいただき、ご協力賜りました掛川市立中小学校、掛川市立佐東小学校、掛川市立城東中学校、静岡県立横須賀高等学校の校長先生をはじめ学校関係者の方々に御礼申し上げます。



図1 ワークシート

令和6年度 掛川市二の丸美術館 オンライン授業実施予定一覧

展覧会・会期	対象学年	内容	実施時期	教科書、学習指導要領該当箇所
特別講座 掛川の歴史・文化・美術を知ろう	小学生 高校生	美術館周辺にある掛川城、御殿、大日本報徳社、竹の丸、龍華院など周辺の歴史文化遺産について紹介する。 【紹介する施設】 ① 掛川市二の丸美術館 ② 掛川市ステンドグラス美術館 ③ 掛川城・御殿 ④ 大日本報徳社 ⑤ 竹の丸 ⑥ 龍華院	6月 9月	① 小学3年社会 市の様子-古いたてものがある所 ② 中学校社会 第1章 第2節 「身近な地域の歴史」 ③ 総合的な学習の時間 「地域や学校の特色に応じた課題」
企画展 掛川城・高天神城・横須賀城のすべて 10月5日(土)~11月24日(日) ※会期中は、展覧会を見学することも可能です。	小6 中3	「掛川城」「高天神城」「横須賀城」の掛川三城について、成り立ちやゆかりの人々を紹介し、郷土の歴史に興味を持ってもらう。	10月 11月	① 中学校社会 第1章 第2節 「身近な地域の歴史」 ② 総合的な学習の時間 「地域や学校の特色に応じた課題」
企画展 2024掛川市民アートフェスタ 美術館テーマ展示 「ちょっと昔の暮らし展」 11月30日(土)~1月5日(日) ※会期中は、展覧会を見学することも可能です。	小3	児童の祖父母・父母の子供の頃の生活の様子を身近にある生活道具や文房具、お菓子のパッケージを中心に紹介し、教科書の内容を実際に自分の目で見て学べる機会を提供。	12月 令和7年2月	小学3年社会 わたしたちの市の歩み-かわる道具とくらし
特別講座 富士山を描こう	小学生 高校生	富士山の成り立ちや絵画や歌に表現されてきた富士山(浮世絵版画、文人画、牧野宗則作品、工芸品)を紹介し、それぞれの心の中にある富士山を自由な発想で表現してもらう。	令和7年2月頃 ※ご希望があれば随時	図画工作・美術

表1 令和6年度 オンライン授業実施予定一覧

対話型鑑賞の医療現場での活用に向けた 美術館学芸員と医療従事者の連携 - 第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会への参加を通して -

浜松市美術館 島口直弥

1 はじめに

筆者が勤務する浜松市美術館は、研究者を招聘しての講演会、作家による展示解説やワークショップ、学校(子供・教員)を対象にした出前講座や研修会等、展示会の内容や館藏品、地域ゆかりの作家・作品や文化財をもとにした多様な教育普及活動を展開してきた。

そうした中で令和6年、医師や薬剤師等の医療従事者が入会する「一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会」の学術大会が浜松市で開催されることとなり、聖隷浜松病院総合診療内科の本間陽一郎氏より、学術大会におけるプログラム(インタラクティブセッション)への参加の打診を受けた。このインタラクティブセッションは、医師等が患者の診療に際し、眼前で生じている事象を漏らさず察知することや、その言語化、情報の精査、思考等に関する教育方略に美術作品の鑑賞を取り入れることが有効であるという考えに基づいて実施したプログラムで、医学教育として対話型鑑賞を実践する「ミルク」の代表を務める獨協医科大学の森永康平氏が企画に加わった。筆者は学術大会開催都市所在の美術館学芸員として、プログラム内容の検討段階から参加した。

浜松市美術館では、美術作品の鑑賞活動を医療従事者との連携のもと、医療・診療行為の改善をねらいに実施した例は殆どなかった。美術館(学芸員)と病院(医療従事者)との新たな連携体制を構築し、医療現場における美術作品の鑑賞活動のさらなる可能性を見出すことを目指し、本件の一連の計画に臨んだ。

2 インタラクティブセッションのねらいと題材選定

今回のインタラクティブセッションは「医療を護るのはAIか、地に足のついた対話のデザインか。～わかるよりも気づきを変える、対話型鑑賞を体験しよう～」を題目に実施された。実施の経緯やねらいについては、学会学術大会抄録(2024年、本間氏執筆)において示されている(図1)。

AIの発達により情報を検索する能力の差別化は小さくなり、患者さんが抱える問題の抽出と立案こそが医療従事者に求められる時代に入るのは間違いないだろう。一方で学生や研修医と接していると、疾患の病態や診断基準、検査の重要な所見の獲得には熱心であるのに、眼前で生じている事象を漏らさず察知し、言語化する力、情報を吟味しながら考える力の不足を感じることは少なくない。体系だった教育方略がない実情も私達を悩ませている。

対話型鑑賞は患者に生じている事象を察知し、言語化する力の教育方略として類のない可能性がある。各参加者はアート作品についての気づきを言語化し、それをメンバーでも共有しながら理解をより一層深めていく鑑賞手法だ。作品に関連した情報は、一旦伏せておくことで、参加者の気づきを表出するハードルが下がり、正解のない芸術の解釈に様々な判断材料から自発的に迫っていくことを促せることに醍醐味がある。全員が平等な立場で気づきを共有することが可能なため、職種間の知識差も超えることが可能となり、組織内のFaculty Development(FD)での教育手法としてのヒントもあるだろう。

海外では医療従事者へのアート教育の導入は活発であり、対話型鑑賞を活用しながら現場に求められる能力が涵養できることの報告も散見されるが、国内ではそもそも体験する場がないことが課題であった。今回、医学教育として対話型鑑賞を実践するミルクの森永康平先生を招き、実際に体験できる場を企画した。さらに、鑑賞する題材の選定やファシリテーションの協力で浜松市美術館の学芸員、島口直弥様にも協力を仰いだ。

皮肉にも「最適な情報を求める忙しさ故、眼前の人・モノ・コトの解像度が落ちる」という、未だかつてない時代が到来している。対話型鑑賞の体験を契機に「ありのまま」に向き合うことの尊さ、教育への可能性を見出してほしい。

図1 会学術大会抄録(2024年、本間氏執筆)

題目と抄録にあるように、今回のインタラクティブセッションでは美術作品の対話型鑑賞を行うこととなっていた。筆者は、本間氏と森永氏、対話型鑑賞のファシリテーターとし

て参加予定の今村弥生氏(杏林大学・自治医科大学)、石黒一美氏(日本歯科大学)、岡崎三枝子氏(秋田大学)とともに、対話型鑑賞の題材となる作品の選定について話し合いを重ねた。「ミルク」を主宰する森永氏は獨協医科大学を中心に、幅広い教育機関、医療従事者を対象とした対話型鑑賞を実施しており、中でも宇都宮市美術館、長崎県美術館、山梨県美術館と、全国の公立美術館を会場とした対話型鑑賞会の実績は特筆される。筆者は学術大会が行われる都市の美術館学芸員として、全国から集う学術大会の参加者に、この地域ゆかりの美術作品に触れてほしいと考えた。

そこで対話型鑑賞の対象として提案したのが仏像であった。筆者は勤務館において「みほとけのキセキ-遠州・三河の寺宝展-」(2021年)、「みほとけのキセキII-遠州・三河のしられざる祈り-」(2023年)を企画・運営してきた。浜松市を中心とする遠州地域(静岡県西部地域)には、平安・鎌倉時代に遡る古仏が100躯近く伝来する。展示会開催と調査研究の成果を生かし、参加者に遠州地域の仏像の魅力を味わいながらインタラクティブセッションを楽しんでほしいと考えた。

仏像は彫刻作品で、立体的な造形が最大の特徴である。鑑賞する角度や視線の高さによって目視できる箇所が変わり、顔の表情や姿勢、像の雰囲気や印象等の感じ方にも変化を及ぼす。また、髪型、表情、服制、装飾、持物、印相(手の形)、姿勢等の造形は多岐にわたり、それぞれ仏教の考え方に基づく意味付けがされる。対話型鑑賞では、仏像の歴史的、芸術的な価値、学術上の価値、仏教的な意味付けは一旦隅におく。造形的な要素を根拠に参加者同士が気づきや考えを公平な立場で自由に出し合い、参加者同士でそれぞれの気づきを共有しながら、仏像に対する自分なりの意味や価値を見出したり、他者との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりすることが可能となる。

仏像を多面的・多角的に細部を含め観察し、想像を膨らませることは、医療現場において一面からでは測れない患者の症状を具に観察し情報を精査しながら思考することにつながる。参加者同士の公平かつ自由な対話は、患者の症状や治療方針について言語化し、立場を超え様々な可能性を検討する姿勢につながる。

医療従事者が日々対峙するのは生身の患者であり、人体表現に近い立体作品としての仏像は、今回のプログラムにおける題材に適したものであると考えた。

3 仏像をもとにした対話型鑑賞の先行事例

筆者は展示会に出陳した仏像から鑑賞活動を考案し、主に小・中学生を対象に実践を重ねてきた。例えば、展示室中央に展示された千手観音立像を友達と対話をしながら全方位から鑑賞し、造形的なよさや美しさをより感じられる「鑑賞地点」を探す活動、両腕を失った天王立像を鑑賞し、製作当初のポーズについて体を動かしながら予想する活動等、複数の活動を行った。

その中で特に子供たちが楽しんで取り組んだ活動の1つが四天王立像(平安～鎌倉時代(12世紀)応賀寺蔵)のポージングをもとにした対話型鑑賞である。子供たちは四天王立像(持国天(図2)・増長天・広目天・多聞天)の中から気に入った像を1躯選び、その像を選んだ子供同士でグループを作る。グループの代表者1人が仏像と同じポーズをとり(図3)、他の子供は仏像と代表者のポーズを見比べながら、ポーズの精度を高めるために指示を出す。これを、代表者を交代したり対象の仏像を変えたりしながら繰り返す。



図2 応賀寺持国天立像



図3 ポージングをする小学生

仏像のポージングによる対話型鑑賞は、ポーズをとる側にとっては、体を動かしながら仏像という鑑賞対象そのものに慣れ親しむことができる。加えて、顔や表情、首の向き、腕の高さ、脚の曲げ伸ばし等、体を動かすことによって分かる身体的な特徴からその造形を感じ取ったり理解したりすることができる。ポーズを指示する側にとっては、ポーズの精度を高めるという課題設定が内発的動機につながり、仏像を多面的・多角的に、細部の表現に至るまで鑑賞することにつながる。鑑賞の過程で仏像の造形的なよさや美しさ、仏像ならではの表現の面白さを味わうことができる。

先行事例をふまえ、今回のインタラクティブセッションでの仏像をもとにした対話型鑑賞でも、仏像のポージングを取り入れることとした。インタラクティブセッションに参加するの

は医療従事者であり、仏像のポーズを、体を動かしながら表すことで、仏像の造形を人体の特徴と比較しながら鑑賞し、医療従事者ならではの視点が見いだされる可能性も期待した。

4 インタラクティブセッションの実際

(1) インタラクティブセッションの概要(図4・5)

① 題目

インタラクティブセッション8

医療を護るのはAIか、地に足のついた対話のデザインか。
～わかるよりも気づきを変える、対話型鑑賞を体験しよう～

② 副題

仏像を見るー体を動かしながら楽しく対話ー

③ 日時

令和6年6月8日(土)午後2時～午後3時30分

④ 場所

アクトシティ浜松コンgresセンター 52会議室

⑤ 参加者

第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会参加者のうち30名(当日先着順)

⑥ ファシリテーター

森永康平(獨協医科大学・ミルク)

本間陽一郎(聖隷浜松病院総合診療内科)

今村弥生(杏林大学医学部精神神経科学教室)

石黒一美(日本歯科大学東京短期大学)

島口直弥(浜松市美術館・浜松市教育委員会)



図5 会場風景(左から森永氏、今村氏、筆者、石黒氏、本間氏)

(2) 仏像のポージングによる対話型鑑賞

① 題材とした仏像についてー応賀寺増長天立像ー

今回のインタラクティブセッションにおける対話型鑑賞では、先行事例の小・中学生を対象にした実践同様、湖西市・応賀寺の四天王立像のうち増長天立像(図6)を題材に選んだ。四天王立像をはじめとした天王立像は、如来像や菩薩像等に比べ、手や足、体全体の動きが大きく、各像様々な姿を示す。ポーズをとったりポーズの指示を出したりする際に、複数の情報を組み合わせたり情報を精査する必要が生じる。インタラクティブセッションのねらいを考慮したとき、今回も天王立像を選択することが妥当であると考えた。

応賀寺の四天王立像は、針葉樹と思われる一材をもとに、割削造りあるいは寄木造りで造像され、像内部は頭部・体幹部ともに削り抜かれる(内削り)。目には水晶が嵌入されている(玉眼)。各像それぞれ戟や宝剣、宝珠等の持物を執り、邪鬼を踏みつけて立つ。面相部の忿怒相は玉眼に起因する写実性が看取されるが、総じて控えめである。動勢の誇張が特徴的な四天王としては抑揚が抑えられている。頭部の低めの垂髻の形状、腰周りの豊かな肉取りを含め、本作は平安時代末から鎌倉時代にかけての12世紀末の製作と推定される。

応賀寺の四天王立像のポーズをとったりポーズを指示したりする上で重要な視点は、やや前傾の姿勢と大きな腰の捻りである。そして、前傾の姿勢は側面から、腰の捻りは背面から鑑賞することで、正面からのみの鑑賞に比べより際立つ。ポーズの精度を高めるためには、この2点の再現が重要であり、その再現には像の多面的・多角的な鑑賞が必須といえる。



図6 応賀寺増長天立像(全身正面・上半身別角度)

② 対話型鑑賞の手順と方法

先行事例の小・中学生を対象とした実践では、仏像が展示された美術館の展示室で実物を鑑賞しながら活動を展開した。そのため、仏像を様々な角度から鑑賞することが可能であった。今回のインタラクティブセッションでは実物の鑑賞は叶わないため、全6方向(正面・右斜側面・右側面・左斜側面・左側面・背面)から撮影した仏像の画像を活用した。

参加者30人を5人6グループに分け、グループの中で仏像のポージングをする代表者1人を決める。その後、各グループに鑑賞する仏像の画像6点(A4版・カラー印刷)を配布するが、この際ポージングをする代表者に仏像の画像が見えないように留意する。ポージングの指示を始める前に、指示役は画像を確認しながら、特徴的な体の動き、難しそうな体の動きを対話しながら確認していく。確認が済んだ段階で代表者に対し、ポージングの指示を出していく。

ポージングが固まった段階で、各グループで仏像のポーズをとる代表者をスマートフォン等で撮影しておく。そして、代表者を含めグループ全員で改めて鑑賞した仏像の画像を、撮影した代表者の写真と見比べながら確認する。代表者はポージングをしてみても感じたこと(大変だったこと、難しかったこと等)、ポーズをとった仏像の画像を目にしての感想、ポーズをとったことで分かる仏像の造形等について、指示役の参加者に伝えたり、指示役は代表者に質問をしたりして、対話を通した仏像の造形への理解を深めていく。その後、代表者を変えながら、活動を繰り返す。

ポージングをすること、ポージングの指示を出すことを通して、仏像そのものの造形的なよさや美しさ、面白さへの気付き、自分なりの見方や感じ方、様々な疑問等が生じることがある。こうした気付きや疑問についても自由に発言し、

グループで共有しながら仏像に対する見方や感じ方を深めたり、意味や価値を見出したりすることを大切にする。例えば表情への気付きから「この仏像はなぜ怒っているのだろうか」という疑問が生じた場合、ポーズした側の視点、ポーズを指示した側の視点からその意味を予想し、互いの考えを出し合い、集団としての考えを形成することも考えられる。

③ ファシリテーターの役割

ア 多面的・多角的な視点の提示

仏像のポージングでは、ポーズの指示を出す側が像正面の画像からの情報ばかりに注目し、側面や背面から情報に注意が向かないことが想定される。ポージングの過程でファシリテーターは、ポージングの指示が正面の画像をもとにしたものに偏らないように、各方向からの画像を確認するよう、必要に応じた声掛けを行う必要がある。また、頭、体幹部、腕、脚等、像の中のある一部位の修正にばかり気を取られ、様々な部位に視点が向かなくなる状況も想定される。像の様々な部位に注意を払うよう、活動の様子を見ながらの適切な助言が必要になろう。加えて、ポーズをとった側とポーズを指示した側とは、仏像の造形についての見方や感じ方が異なる。ファシリテーターは活動への参加の仕方の違いで生じる参加者の見方や感じ方の違いも想定し、そのことを指摘したり尋ねたりしながら、多面的・多角的な視点による対話の展開を促したい。

イ 発言の根拠を明確にする

今回の対話型鑑賞では仏像のポージングを通しての気付きや疑問をもとにした参加者の多様かつ自由な発言を促していく。しかし、その発言は鑑賞する対象の形や色彩、大きさや存在感、迫力や雰囲気等、造形的な視点を根拠にする必要がある。例えば、なぜそのように思ったのか、作品のどこから感じ取ったのかを明確に示しながらの対話が展開されることが大切であり、ファシリテーターには、補助的な発問や質問を挟んだり、根拠の確認を促したりすることが求められる。

ウ 対話をつなぐ、広げる、深める

仏像のポージングをしたり、ポージングの指示をしたりする活動を通して、仏像の造形への気付きや疑問が生じ、それらをもとに自然発生的に対話が生じたり、その広がりや深まりが見られれば、充実した対話型鑑賞が具現化したものといえよう。しかし、ポージングそのものが目的化し、仏像に対する見方や感じ方の広がりや造形的なよさや美しさ、面白さへの気付きにつながらないケースも想定される。



図4 インタラクティブセッションの広報用資料

ファシリテーターは、ポージングの過程における参加者の対話に耳を傾け、仏像の造形的なよさや美しさ、面白さ、仏像ならではの造形に対する疑問等につながる可能性のある発言(「つぶやき」を含む)を拾い上げたり、参加者同士の発言をつないだりしながら、気づきを参加者全員で共有したり、生じた疑問についてどう考えるか投げかける補助発問をしたりする等、臨機応変な対応が求められる。また、仏像の造形に対する参加者の見方や感じ方の広がりや対話の深まりにつながりそうな視点を提示し、対話のテーマに設定することも考えられる。

エ 過度な情報提供、対話介入への注意

今回の対話型鑑賞では、仏像に関する学術的な情報(製作時期、様式、品質構造、作者、芸術的な価値、歴史的・文化的な価値、宗教的な意味等)は伏せ、参加者自身による造形への気づき、疑問をもとにした対話が展開をされることを期待する。ファシリテーターは不用意に仏像に関する情報を提供することは避けたい。参加者自身の見方や感じ方を大切に、自分なりの意味や価値を創造する営みにおいて、参加者に先入観を与えるような情報提供は控えたい。ただし、情報を提供することが対話の広がりや深まりにつながるものと判断できる場合にはその限りではない。例えば、仏像の持物に関する情報を与えた方が、その持物の意味や使用用途等をもとにした対話の深まりが期待できる場合、製作時期の情報を与えた方が、その時代の歴史的な背景をもとに議論が深まりそうな場合等が考えられる。視点も過度に提示すればよいというものではない。1つの視点でも仏像の造形に対する様々な見方や感じ方が窺え、充実した議論が展開されている場合、他の視点の提示で対話を遮ることは避けなければならない。

④ 参加者の様子

参加者は各グループにおいて、仏像のポージングを行う代表者を決め、他の参加者が仏像を各方向から撮影した画像を見ながらポーズの指示を始めた。「腕をもう少し高く」、「手はしっかり握る」、「左膝をやや前に」、「腰を捻って」等、仏像の各部の造形を確認しながらポーズの精度を高めていった。ポーズが完成に近づくと、左右や背面からの画像と照らし合わせながら、どの方向からもポーズに齟齬がないように注意を払ったり、顔の表情にこだわったりと、細部の表現を追求しようとする動きが見られた(図7)。ポーズが固まったグループからポージングをした代表者の写真を撮影し(図8)、代表者を交代し活動を複数回繰り返した。

その後、各ファシリテーターの助言、視点の提示を交えながら、ポージングを通しての仏像の造形への気づきや疑問を具体的に出し合い、対話を広げたり深めたりした。

森永氏がファシリテーターを務めたグループでは、仏像の造形的な諸要素をもとに、様々な視点からの話題があがった(図9)。



図7 仏像の写真をもとに仏像のポージングに挑戦する参加者



図8 完成した仏像のポージング

- 頭部について
 - ・帽子をかぶっているように見える。
 - ・こういう髪型なのかもしれない。
- 表情について
 - ・怒りの表情を浮かべている。
 - ・怒りと余裕(驕り)が混在しているようだ。
- 服装について
 - ・すごく動き辛そうだ。 ・夏だととても暑そう。
 - ・変なところに継ぎ目が見られる。
 - ・材質は皮なのか、あるいは金属なのか。
- 持物について
 - ・刀は取り外しが可能なように見える。
 - ・この刀の意味はなんだろうか。
- 足元について

- ・足元に何かいるように見える。 ・蛙かもしれない。
- 像全体について
 - ・神なのか、人間なのか。 ・何かを成敗しているのか。
 - ・成敗中なのか、成敗後の決めポーズなのか。

図9 森永氏のグループにおける対話の概要

このグループの対話は「頭部」、「表情」、「服装」、「持物」、「足元」、「像全体」と、仏像の様々な部位に視点が向いていることが伺える。「頭部」については「帽子」と「髪型」、「表情」については「怒り」と「余裕(驕り)」、「服装」については「皮」と「金属」、像全体については「神」と「人間」、「成敗中」と「成敗後」と、各視点において対話の対立軸ともなりうる様々な見方や感じ方が表出している。「服装」については「すごく動き辛そうだ」、「夏だととても暑そう」と、仏像の立場を想像する様子も見られる。「怒りと余裕(驕り)が混在している」、「神なのか、人間なのか」、「何かを成敗しているのか」等、仏像の造形的な諸要素からイメージを膨らませ、自分なりの意味や価値を見出す様子も伺えた。

筆者がファシリテーターを務めたグループでは、主に次のような話題があがった(図10)。

- ポーズをとった代表者の発言
 - ・左手にかなり力が入った。何かを押さえつけているのかもしれない。
 - ・その代わりに右手は余裕をもって振りかざしている感じがする。
 - ・相手を倒して「どうだ!」って感じがする。これは敵を倒した後かもしれない。または、これから倒すのかもしれない。
- ポーズを指示した側も含めた対話
 - ・敵は誰なのか。 ・敵は目には見えないものかもしれない。
 - ・敵は自分自身か。
 - ・ポーズからも自分を鼓舞しているのかも。
 - ・敵を倒した後かもしれない。見る角度によって表情が変わり「にやっ」と勝ち誇ったように見える。
 - ・二面性があるのかも。右手と左手の力の入れ具合も違うから、そこにも二面性が表れているのかもしれない。
 - ・ももこした雲のようなものに乗っている。雲に乗って戦いに「いざ行かん」とする感じ。孫悟空と筋斗雲のイメージ。
 - ・仏像の色が気になる。剥がれているように見える。
 - ・もとからこの色なのか。
 - ・下の土台は色が違う。形からすると波かも。
 - ・仏像って普通は運みたいなものに座っているのでは。

図10 筆者のグループにおける対話の概要

このグループでは、ポーズをとった代表者がその感想として、腕の力の入り方に着目した。そのことからこの仏像が何かを倒す、あるいはこれから倒すのではないかと想像した。この発言をきっかけに、倒す相手について想像を膨らませている。そして、倒す敵は自分自身である、若しくはポーズに立ち返り自分自身を鼓舞しているのではないかとという推論に至った。

その後、角度によって表情の見え方が変化することを根拠に、「にやっ」と笑みがこぼれる様子が垣間見えることから、敵と戦った後の勝ち誇った姿であるという予想を立てた。さらに表情の変化から、この仏像の二面性を指摘する声上がり、左右の手の力の入れ方の違いもその根拠の1つとしてあがった。

同じ仏像を鑑賞しても各グループ(メンバー)により仏像の造形に対する気づきや疑問は多様で、対話の流れも全く異なるものになった。そこで、グループでの活動終了後に、各グループで撮影した代表者の仏像ポージング写真を集約し、スクリーンに投影して参加者全員で共有した。その際に、各グループで話題が上がったことを紹介し合うことで、他のグループの気づきや疑問、対話における話題を共有した(図11)。

参加者全員による情報共有の時間において、複数のグループで仏像が何の上に乗っているのかについての疑問が生じていたことが分かった(図12)。これは「邪鬼」で、仏教の世界で悪戯を働く存在の象徴である。四天王立像をはじめとする天王立像は、この邪鬼を踏みつけることによって仏の世界を仏敵から守る姿勢を示している。つまり天王立像は守護神としての性格をもち、そのために憤怒相を示し、甲冑を着けたり武器を持ったりした姿で表される。参加者の疑問をもとにこの「邪鬼」について補足説明を加えることで、鑑賞した仏像の意味や役割について確認することができた。



図11 全員で対話内容を共有する
図12 邪鬼への気付きを全員で確認

5 取り組みの成果と連携の意義

インタラクティブセッション実施後、参加者にアンケートを実施し、対話型鑑賞と医療現場(診療・教育)との関連について尋ね、複数人から回答を得た(図13)。

- ・よく観察すること、多角的に捉えることの重要性を再認識した。
- ・患者さんの状態を想像で決めつけるのは怖いと感じた。先入観なく観察することを意識したい。
- ・患者さんの表情などを見て、次の対応を考える等の訓練に使いたい
- ・対話型鑑賞を医学部の教育で必修にすればよいと思う。
- ・ちょうど症例検討をやりはじめたばかりなので、言語化の難しさと重要さが強く頭に残った。
- ・ものごとの見方は画一的ではない。フラットな対話で事実も多角的に捉えられるかもしれない。
- ・多職種によるカンファレンスにおいて生かせると思った。
- ・観察が重要であること、多様性が必要であることを感じた。
- ・対話型鑑賞を患者さんとしてみると楽しいかもしれない。
- ・ナイチンゲールが「看護はサイエンスでありアートである」と言ったが、少し分かった気がした。

図13 参加者のアンケートの回答(一部抜粋・下線筆者)

複数の参加者が「観察」の重要性を再認識しつつ、ものごとを先入観なく多面的・多角的に捉えることの必要性を指摘している、その上で、臨床現場や医学教育の場面を具体的に想起し、活用を模索する参加者もいた。同時に「多職種」、「多様性」のようにものごとを様々な視点で捉えることの重要性を見出す声、立場を越えた「フラット」な対話の必要性を主張する声もあがった。参加者の一原愛心

さん(鹿児島大学医学部医学科)は、今回のインタラクティブセッションを次のように振り返り(図14)、対話型鑑賞の医療現場での活用の有用性や可能性について言及している。

私のグループでは、1人1枚写真を持ってポーズの指示をしていったのですが、私が持っている写真から読み取れることを指示した時に、「こっちの写真ではこう見えるよ」という指摘をいただく場面が何度かありました。その時に、仏像のほんの一部の面しか見えてないんだな、と強く感じました。この気づきは医療現場でも当てはまると思っていて、私が知っている患者さんは、患者さんの一面を切り取ったものでしかないことを認識するきっかけになると思いました。なので、対話型鑑賞を定期的に行うことで全人的な医療の提供に繋がると思います。また、チームの仲を深めたり、連携を強めたりするのも有用だと思います。

図14 参加者のふりかえり

今回のインタラクティブセッションを中心になって企画した本間氏と森永氏は、仏像のポーズによる鑑賞の医療現場の立場からの有用性について、それぞれ次のように振り返る(図15)。

○本間氏
当然だが、患者の「お腹が痛い」は、個々で異なる。医療者は、診断をする際、「お腹が痛い」というコンテキストから、個々の「お腹が痛い」にアプローチする。つまり、診断とは、「共通コンテキストを持つ目の前の患者から、情報を引き出し、医学用語で言語化する」作業である。一方、仏像一つではない。持国天でも、共通コンテキストはあるが、一体一体に個性がある。その個性を言語化する作業が、今回のワークショップであった。残念ながら、医療現場において、実臨床で経験する以外、この言語化教育の方略は存在しない。今回の仏像のポーズ鑑賞は、目の前の事象を個別具体化し、言語化する診療のトレーニングにつながる。

○森永氏
今回は、平素と異なる仏像のポーズの模倣も意識した対話型鑑賞のワークショップを行いました。普段見過ごしがちな表情、身体の向き、姿勢、歩き方などは、患者さんの心理状態や病状を推測する手がかりにもなります。今回は仏像を題材として言語化し、言語化・共有するプロセスを通して、参加者は非言語情報への意識を高め、新たな発見を得ることができました。また、チームで協力し、多様な意見を調整しながら共通理解を形成する過程を体験することで、医療現場に

おける多職種連携の重要性を再認識しました。円滑なコミュニケーションと相互理解は、患者中心の医療を提供するために不可欠です。

図15 仏像のポーズ鑑賞の医療現場の立場からの有用性

また、医療従事者向けの対話型鑑賞会に、筆者のような美術館学芸員が参加する意義について、各氏は次のように振り返る(図16)。

○本間氏
医療者が対話型鑑賞を行うことで、診断能力向上等の効果が示されている。そのため、海外では、対話型鑑賞が医学教育に組み込まれている。日本で、徐々に医療者に浸透しつつあるが、対話型鑑賞を経験する場が少ない。さらに、対話型鑑賞の教育方略を医療者は持ち合わせていないため、手探りでやっているのが実情である。そのため、美術館学芸員の参加により、医療者は、対話型鑑賞の具体的方略を学習できる。今回、浜松市美術館学芸員に依頼し、仏像ポーズの対話型鑑賞を行った。個人的に、経験がない対話型鑑賞法であった。この手法を使うことで、今まで「背中をみて学ぶ」ことを強めてきた医療手技の教育に応用できる可能性を考えた。

○森永氏
今回、美術館学芸員様に企画段階から参加いただけたことで、専門的な知識や作品への視点に触れることができました。仏像の文化的背景やポーズに込められた意味を深く感じ、理解することができ、鑑賞体験がより豊かなものになったと感じています。本来交わる機会の少ない学芸員様と医療従事者が対話を続けることで、医療と芸術という異なる分野においても、共通の視点や異なるアプローチがあることに気づき、それぞれの専門性を高め合い、新たな可能性を探求する、貴重な学びの場となることが期待されます。

図16 医療従事者向け対話型鑑賞会への美術館学芸員の参加意義

本間氏、森永氏は、仏像のポーズをもとにした対話型鑑賞について、従来、臨床現場でしか経験できなかった目の前の患者やその症例に関する非言語情報の言語化に関する教育方略としての可能性、多職種のメンバーがチームで協力し、意見調整・共通理解を図る経験を積む場としての可能性を見出した。その上で、美術館学芸員との連携について、学芸員のもつ作品に関する情報や鑑賞の視点に関する専門的な知見を活用しながら、医療従事者が従来あまり持ち合わせていないことが多い対話型鑑賞の教

育方略を具体的に学ぶ機会となったことを評価している。加えて、医療と芸術という異分野間の共通する視点、異なるアプローチを相互に学び合い高め合えるメリットも指摘された。

6 おわりに

第15回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会への参加という機会を頂き、医療従事者を対象とした対話型鑑賞、臨床の現場や医療教育の現場で活用可能な対話型鑑賞に初めて取り組んだ。自身の展覧会企画、調査研究の成果、教育普及活動の実践をどのように生かすことができるか未知数であったが、本間氏や森永氏、ファシリテーターの石黒氏、今村氏の助言・協力によって、参加者の医学的見地からの学びに寄与する活動が具現できたことを喜ばしく思う(図17)。筆者にとっても学芸員として自身の研究分野に新たな視座を見出す貴重な経験となった。美術作品に関する調査研究、対話型鑑賞をはじめとした教育普及活動といった学芸員としての仕事が、医療従事者・医療現場という新たなコミュニティとつながったこと、その連携の形を具体的な実践を通して見出し、一定の成果をあげられたことは意義深い。今後も医療従事者・医療現場はもちろん、様々なコミュニティとの連携の可能性を視野に入れながら研究に努めていきたい。



図17 左から本間氏、筆者、森永氏、石黒氏

令和4年9月 台風15号被害での文化財レスキュー ～静岡平和資料センター水難資料救済活動について～ まとめ報告

特定非営利活動法人 NPO 文化財を守る会 友田千恵

1 はじめに
2022年9月23日夜から24日未明にかけて、台風15号が静岡県内の広い地域に大雨を降らせた。静岡市周辺は9月23日夜遅くから24日明け方にかけて猛烈な雨が降り、12時間降水量が静岡市では観測史上1位を更新するような猛烈な雨であった。静岡平和資料センターは1970年代から、空襲の体験記・体験画や実物資料の収集、展示を行っている団体である。市内数カ所に分散して保存、管理されている収集資料の内静岡市立南部図書館に保管されている資料が被害にあった。被災した資料はまずセンターの会員達により緊急レスキューされた。その後避難的凍結保存に掛けられ、約1年を掛けて洗浄クリーニング、乾燥、整理保存の作業が進められた。本報告では主に静岡市平和資料センター、西蔵寺、NPO文化財を守る会の3団体連携で行われた水難資料救済活動をNPO文化財を守る会の立場からまとめてお伝えする。

2 発災以降の時系列
2022年
9月24日 静岡市立南部図書館からの電話連絡を受け静岡平和資料センター長(以下資料センター)田中文雄氏が状況確認に南部図書館へ入る
9月24日 静岡県博物館協会(以下県博協)より「大雨被害調査報告の依頼」メールが加盟団体に入る
9月26日 資料センターにより資料の一次救出作業が行われる
9月28日 資料センターから県博協にメールによる被害状況報告が行われる。このメールにより県博協会員内に被災情報が共有され、西蔵寺、NPO文化財を守る会(以下守る会)も状況を知ることとなる
9月29日 県博協が現地に入り状況を確認。田中氏と今後の対策を協議
9月30日 守る会より資料センターへ一時保管、資材、人

員等協力の申し出
10月3日 資料センターにより救出する資料の仕分け。数点ずつまとめて透明袋に入れ密封
10月4日 守る会技術者が現地状況確認。守る会の業務用冷凍庫の受け入れ準備
10月5日 南部図書館から守る会事務局に資料を移動。資料を凍結。
10月8日 守る会により数点をテスト解凍、洗浄、乾燥。作業計画(人員、資材、費用、スペース、工程)の検討
10月15日 水難資料救済作業1回目 参加者13名 作業計画のテスト検証
10月20日 西蔵寺立花義彰氏より資料センターへ協力の申し出
10月21日 西蔵寺内を作業場所とし冷凍庫を設置することが決定する
10月26日 資料センターへ守る会より作業計画とそれに伴う費用計画が正式に提出される
11月19日 水難資料救済作業2回目 参加者11名 守る会から西蔵寺へ被災資料を移動
2023年
2月26日 水難資料救済作業3回目、以降同年7月9日までの間に6回の作業を経てすべての救済資料の解凍、洗浄、乾燥が終了する
11月23日 2回の資料整理日を経てすべての作業が完了する。救済作業11回。のべ参加人数150人
2024年
1月29日 作業が完了した「救済資料」が西蔵寺から資料センターに移動される

- 3 作業内容
- ① 作業日数
2022/10/15、11/19、2023/2/26、4/9、4/30、5/7、6/11、6/17、7/9、10/9、11/23(全11回)
 - ② 作業主体 静岡平和資料センター
 - ③ 作業員(ボランティア)
静岡平和資料センター 10人、西蔵寺1人、静岡県立中央図書館6人、NPO文化財を守る会11人(全28人、のべ150人)
 - ④ 作業場所
西蔵寺(静岡市葵区片羽町79)
 - ⑤ 救済された資料
ハガキ類、印画紙写真、コピー印刷物(レーザーコピー、インクジェットコピー)、塗工紙印刷物、新聞紙、ノート、印刷製本等約2072点
 - ⑥ 基本の工程(例:ハガキスクラップ)
 1. 前日から解凍しておく
 2. 全ページの着事前写真撮影をする
 3. 前ページにページ番号をふる
 4. ページ番号に対応する番号の枝番をハガキにふる
 5. 貼ってあるページからハガキを取り外す
 6. 水を張ったバットにハガキを入れて揺すり洗いをする
 7. 吸水紙で水を吸い取る
 8. エタノールを表裏噴霧する
 9. 自然乾燥させる

被災した資料は現代のもので、ハガキ、印画紙写真、新聞の切り抜き、レーザーコピー、インクジェットコピー、塗工紙のチラシや紙質が粗雑な戦時下の紙類などがあった。それらは、ステープラーで綴じられたり、クリアファイルにまとめられたり、スクラップブックに貼られた状態になっていた。そして浸水してはいるものの泥などの異物混入は見られなかった。基本の作業工程はファイルされた状態から資料を取り出しファイル材は廃棄。資料を洗浄、殺菌、乾燥を作業するという手順とした。

昭和初期の頃と思われる写真は特別に注意が必要であった。経年劣化と水損によって表面のゼラチン層が崩れてしまっており、ゼラチン層はエタノールに反応して変成するため、殺菌消毒は行わず、水による洗浄のみにとどめて乾燥させた。インク類もエタノールに反応して滲むものが多

くあり、殺菌作業は一点一点部分テストを行ってから進める必要があった。インクジェットプリンターによって印刷された資料類や写真類は水に弱く、すでにインクが流れ落ちてしまっているものが多くあり、洗浄作業は困難であった。

このように多種にわたる材質と劣化具合のものを取り扱うことになり、まずは材質を代表するものをいくつか抽出してテスト作業を行い、作業計画を立てた。そして工程が一律で扱いやすく小さくて丈夫なハガキ類を選んで作業をスタートすることにした。作業をできるだけわかりやすく単純にするため、ボランティア作業員を「調査(ナンバリングと撮影)」「解体」「洗浄」「吸水」「乾燥」のグループに分け、各グループに守る会の経験者が入るようにした。また作業日を連続でとることができず1日毎に作業を完了させなければならなかったため、「調査」～「乾燥」までを素早く行うことができるよう送風乾燥と熱乾燥の両方を取り入れた。工程がスムーズに進行するようになったところで、写真類やインク類が混じるものに着手していくことにした。「洗浄」グループにテスト係を置いて、1点ずつ水への反応を確認しながら作業を進めていった。

作業回数を重ねていくうちに、何度も参加して下さる作業員の方々は経験を深め、工程毎の専門係として携わってくれるようになっていった。

4 まとめ
本水難資料救済活動をおこなっている期間は新型コロナウイルス感染症のまん延防止等重点措置が終了しその後感染症法5類に移行するまでの収束期間にあっていた。1週間前からの健康観察、活動日の感染予防対策、感染による活動日延期などもあって、活動完了までには1年以上の期間を要した。今振り返ってみれば通常とは異なるレスキュー活動であったと思われる。ただ発災して以降、関係各所との連絡、情報共有、材料や道具類、場所の確保、人員の確保、作業での役割分担など実際に動いたことによる経験の蓄積という意味で、誤解を恐れずに言えば非常に貴重な体験と得がたいネットワークを持つことができたと思う。またの多くの方にボランティア作業員として参加してもらい、その方々との経験共有も今後の大きな財産となった。そして静岡県博物館協会の災害連絡網メールがこの水難資料救済活動の連携の始まりだったことを振り返り、情報共有とネットワーク構築の大切さを肝に銘じながら今後の弊会でのレスキュー活動に繋げていきたい。

付記

静岡平和資料センター田中文雄様、西蔵寺立花義彰様には本報告作成にあたり多くの記録、資料、写真のご協力を頂きました。代表して報告する役を頂き感謝申し上げます。

5 工程写真



調査・撮影



洗浄

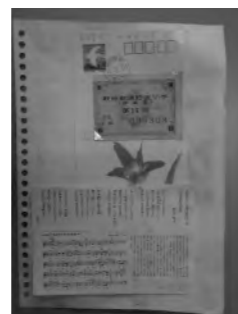


吸水



乾燥

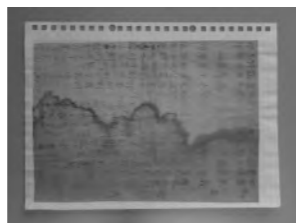
6 処置前処置後 比較写真



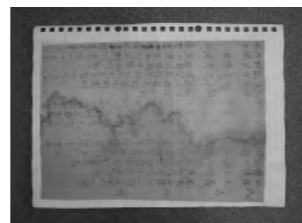
修理前



修理後



修理前



修理後



修理前



修理後



修理前



修理後



修理前



修理後

【静岡平和資料センター】救済された資料リスト

名称	点数	作業日	種別
大東亜戦争(3) 郵趣50年	123点	2022年10月15日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
嘉南大川	1冊	2022年10月15日	製本冊子
大東亜戦争(2) 郵趣50年 戦後	68点	2023年2月26日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
大東亜戦争50年 空襲	6点	2023年2月26日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
日記(河村利一)	3点	2023年2月26日	日記原本
大東亜戦争 郵趣50年 銃後(1)	27点	2023年2月26日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
風船爆弾展 資料写真と手紙	22点	2023年2月26日	新聞、コピー印刷、塗工紙チラシのクリアファイル
風船爆弾展 写真	27点	2023年2月26日	コピー印刷のクリアファイル
戦争中の暮らし展 (後半)1989.1.28 写真	10点	2023年2月26日	印画紙写真
岡部史談	1冊	2023年2月26日	製本冊子
フィリピン島関係記録 青山葉子さん寄贈2006.7.9	11点	2023年2月26日	コピー印刷、コピー印刷製本、製本冊子
県下の空襲II展	66点	2023年2月26日	新聞、コピー印刷のクリアファイル
戦争中の暮らし展 (前半)1989.1.28 写真とネガ	46点	2023年2月26日	印画紙写真
写真コピー	3点	2023年2月26日	コピー印刷
偲 小林大兄	3部	2023年2月26日	印刷写真、コピー印刷
第1期種痘済証	1部	2023年2月26日	証書原本
大東亜戦争50年(1) S16～S17.12.31 写真2枚	2点	2023年2月26日	印画紙写真
軍隊手帳(河村利作)	1点	2023年4月9日	日記原本
昭和17年日記(河村利一)	1点	2023年4月9日	日記原本
昭和18年常用日記(河村利一)	1点	2023年4月9日	日記原本
風船爆弾関係 (協力いただいた各地の方々からの手紙等)+写真4枚	42点	2023年4月9日	コピー印刷、コピー印刷冊子、新聞、印画紙写真
ピースあいち開館式写真	1冊	2023年4月9日	印画紙写真
岸本美成さん 蒙疆・宣化	1冊	2023年4月9日	コピー印刷製本、
太平洋戦争 防空警報手記 (河村利一編)	1冊	2023年4月9日	印画紙写真
太平洋戦争 防空警報手記 S16～S20 (河村利一編)	164点	2023年4月30日	手記原本、コピー印刷、新聞のスクラップブック
切手が語る20世紀の戦争・平和展(仮)	76点	2023年4月30日	切手、コピー印刷、ハガキのファイル
太平洋戦争 防空警報手記 (河村利一編)(20の副本)	64点	2023年4月30日	コピー印刷
大東亜戦争 私の歴史(岸本美成)	129点	2023年4月30日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
大東亜戦争50年 大東亜戦争(2) S18.1.1～S19.7.18	118点	2023年5月7日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
絵本展・ホロコースト展・静岡の戦争別紙詳細	65点	2023年5月7日	印画紙写真
第五福竜丸展示館・埼玉県平和資料館 (1994.8.26)	36点	2023年5月7日	印画紙写真
戦争と子ども他写真集	48点	2023年5月7日	印画紙写真
オープン展示他3点	3点	2023年5月7日	印画紙写真
県下の空襲II 2001～2002	45点	2023年5月7日	印画紙写真
城東町にある軍施設の写真	1枚	2023年5月7日	印刷写真
平和への想い	1点	2023年5月7日	製本冊子
常設展「静岡と戦争」	1冊	2023年5月7日	印画紙写真
小林有義さんの写真資料「第三部(裏表紙) 醜の御盾として」19枚	19枚	2023年5月7日	印画紙写真
人間は有史以来…プロローグ	58点	2023年5月7日	コピー印刷
友情の人形展 2003年	1冊	2023年5月7日	印画紙写真
きざとり調査④	52点	2023年5月7日	印画紙写真
仙台市戦災復興会館(1994)	47点	2023年5月7日	印画紙写真
空襲体験画展 2003.6.19～10.26	40点	2023年5月7日	印画紙写真
風船爆弾 写真アルバム1990年代～2010年代	42点	2023年5月7日	印画紙写真
先生兵隊参戦記(法月六)	1点	2023年5月7日	コピー印刷製本
河村利作関連資料46-27まで	27点	2023年5月7日	コピー印刷、証書類原本
風船爆弾 英語版	1冊	2023年6月11日	コピー印刷、印画紙写真
戦争の記録SHIZUOKA 写真アルバム	30点	2023年6月11日	印画紙写真
子ども達に知ってほしい戦争	28点	2023年6月11日	コピー印刷、印画紙写真
県下の空襲I	22点	2023年6月11日	印画紙写真
戦争の記録SHIZUOKA 静岡市民ギャラリー(2000.6.20～6.25市教委と共催)	34点	2023年6月11日	印画紙写真
戦争の記録SHIZUOKA センターでの同展示	34点	2023年6月11日	印画紙写真
センター所蔵資料と関連資料	43点	2023年6月11日	コピー印刷
戦争と子ども展 ロバートキャバ展 核の20世紀等	36点	2023年6月11日	コピー印刷、切り抜き等
山田勝彦さん提供の展示したユーゴの子供の絵の写真	1束	2023年6月11日	インクジェット写真
国境なき医師団からの写真とスライド	38点	2023年6月11日	新聞、コピー印刷、印画紙写真、インクジェット写真
旧ユーゴの子供の絵の写真	1点	2023年6月11日	コピー印刷
大東亜戦争50年 軍歴	5点	2023年6月17日	ハガキ、コピー印刷のスクラップブック
大東亜戦争 郵趣50年大東亜戦争4	15点	2023年6月17日	コピー印刷のスクラップブック
常設展示・展示壁面写真等1～49	21点	2023年6月17日	クリアファイルにコピー印刷、コピー印刷製本、印画紙写真、インクジェット写真
清水写真展1～50	50点	2023年6月17日	コピー印刷、塗工紙チラシ
ペン・シャーン ラッキードラゴンシリーズ	6点	2023年6月17日	コピー印刷、コピー印刷製本、インクジェット印刷
山梨さん写真(銃後の暮らし) 空襲体験画展1～8	7点	2023年6月17日	コピー印刷、切り抜き等
小川孝太郎さんの地図と写真、小川さん他の方の地図も同封	8点	2023年6月17日	コピー印刷、切り抜き等
太平洋戦争 手記(核兵器戦) S16.12.8～S20.8.15 (河村利一編)59-9	1点	2023年7月9日	原稿用紙記録、塗工紙チラシ
岡部史談 (再登場)	1冊	2023年7月9日	製本冊子
友情の人形展 2003年	24点	2023年7月9日	コピー印刷、塗工紙チラシ
切手集	106点	2023年7月9日	コピー印刷、
赤紙がきた展(1988.4.17～7.12)	54点	2023年7月9日	コピー印刷のスクラップ、塗工紙チラシ

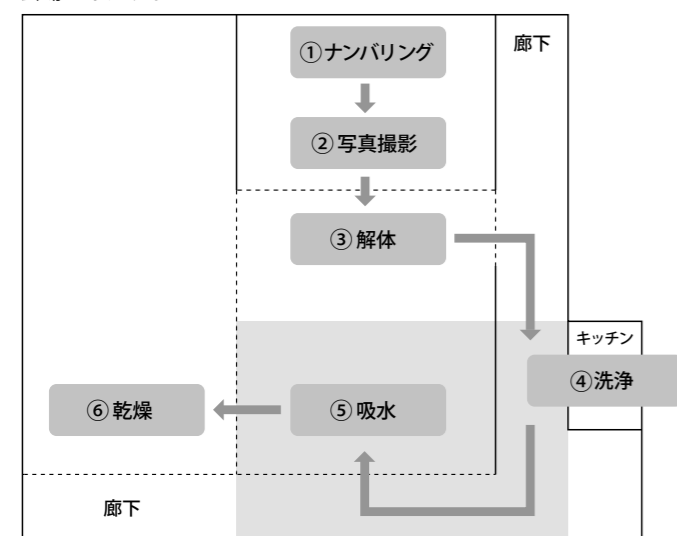
合計点数 2072点

使用した資材一覧

消耗品	
品名	用途
無水エタノール	資料の消毒用
除菌ウェットティッシュ	手指消毒、環境消毒
手洗いソープ	手指消毒
ペーパータオル	手指消毒
吸水紙	資料を取り扱う場所の敷紙、自然乾燥時の敷紙
養生紙	劣化が進んだ資料を吸水乾燥する際の保護
キッチンペーパー	洗浄した資料の吸水
新聞紙	洗浄した資料の吸水
シリコンペーパー	熱乾燥時の資料保護
梱包用クラフト紙	会場床面の保護
農業用ビニールフィルム(穴なし長尺)	会場床面の保護
ガムテープ	会場床面の保護
塗装用マスキングテープ	会場床面の保護
養生テープ	会場床面の保護
使い捨てビニール手袋	特に汚れた資料の取り扱い
ゴミ袋(45リットル)	
ぞうきん	

道具類	
品名	用途
冷蔵庫	凍結保存用
乾燥用仕切り 大	写真の乾燥用
乾燥用仕切り 小	写真の乾燥用
霧吹き	消毒用エタノール噴霧用と水洗浄用
計量カップ	消毒用エタノールと水の配合量計測用
網戸の網	水洗浄時の資料保護用
バット 大	水洗浄用
バット 中	洗浄後の資料の移動用
バット 小	洗浄後の資料の移動用
ピンセット	資料の解体、取り扱い用
竹へら	資料の解体、取り扱い用
ハサミ	クリアファイルの解体用
カッター	クリアファイルの解体用
ステンレスニッパー	ステープラーの除去
アイロン	熱乾燥用
アイロン用板 シナベニヤ	熱乾燥時の敷板
扇風機	自然乾燥用
延長コード	アイロン、扇風機用
作業テーブル	写真撮影、洗浄、吸水、乾燥それぞれのエリアが必要
作業椅子	写真撮影、洗浄、吸水、乾燥それぞれのエリアが必要
複写台	写真撮影
デジタルカメラ	写真撮影

会場レイアウト



2023(令和5)年度 第1回講習会 袋井市・森町 史跡視察(報告)

袋井市教育委員会(静岡県博物館協会事業推進グループ) 白澤 崇
浜松市美術館(静岡県博物館協会事業推進グループ) 島口直弥

1 視察の概要(島口)

静岡県博物館協会では例年加盟館の学芸員や職員を対象に、静岡県内外の博物館や史跡等を巡っての臨地講習を企画してきた。令和2年度から令和4年度はコロナ禍により実施の見送りを余儀なくされたが、令和5年度は袋井市・森町を目的地として4年ぶりに実施することができた。旅程は次の通り(表1)。

表1 視察の旅程(2024年1月31日)

時刻	訪問先
10:00	袋井駅(集合)
10:30	西楽寺
12:00	金與食堂(昼食)
13:20	森町立歴史民俗資料館
14:10	種茂家・北嶋靴店
15:45	小國神社
17:30	袋井駅(解散)



図1 西楽寺本堂を視察する参加者

(2) 西楽寺の仏像(島口)

西楽寺には平安時代に製作された仏像が6軀伝来している。本堂の阿弥陀如来及び両脇侍坐像(12世紀・静岡県指定文化財)は、定朝様式の則った正統的かつ都ぶりの秀作である。鎌倉時代に流行する玉眼がいち早く取り入れられている点も注目される。薬師堂には薬師如来坐像(12世紀・静岡県指定文化財)が安置される。こちらも定朝様式を踏襲した等身像であるが、その左右に中尊より1世紀ほど遡る一木造りの菩薩立像2軀(11世紀)が安置される点は見逃せない。参加者は筆者の解説のもと、仏像の様式や作風、造像技法について学び、袋井市域の仏教文化の栄華、西楽寺の繁栄に思いを馳せながら仏像鑑賞を楽しんだ(図2)。



図2 西楽寺薬師堂の仏像を拝観する参加者

2 西楽寺の見学

(1) 西楽寺本堂(白澤)

西楽寺は袋井市でも北の森町との市境にほど近い場所に位置し、神亀元(724)年に行基によって開かれたと伝えられる真言宗の古刹である。令和6年には開創1300年を迎える。

戦国期から江戸時代にかけては、武將の庇護を受け繁栄するが、特に徳川家との繋がりが深かったことが、近年、寺に伝わる古文書の解読によって明らかとなってきた。

隆盛の名残りを伝える本堂は、平成の解体修理の際に発見された墨書によって享保20(1735)年ごろに建て替えられたもので、入母屋造りのこけら葺きの大屋根と、破風には優美な彫刻が施されていることを特徴とする。

ご本尊を安置する本堂は、県指定文化財である(図1)。堂内を丸山住職よりご案内頂いた。

3 森町立歴史民俗資料館の見学(白澤)

森町の見学スタートは、森町立歴史民俗資料館。建物は明治18(1885)年に建てられた旧周智郡役所を移築。現存する郡役所の建物は全国的にも珍しく、県内でも唯一の存在で、森町指定文化財。

館内には町内の遺跡から出土した石器や土器などの考古資料、農具、生活用具、鈴木藤三郎(日本近代製糖の父)をはじめとした郷土の偉人の紹介など、建物の雰囲気と相まって、タイムスリップしたような感覚に陥る(図3)。

松浦館長さんから丁寧な説明を頂いた。



図3 旧周智郡役所を移築した森町立歴史民俗資料館

4 種茂家・北嶋靴店の見学(白澤)

明治時代末期に建てられた種茂家は呉服を取り扱っていた家柄。

近年、街中の伝統的な建物やお蔵を保存・活用するため、森町では「町並みと蔵展」を企画したりして、新たな魅力の発信をしている。

当日も、種茂家の保存と活用に努力されておられる遠州木三の里連の代表である榎原さんに建物の概要を説明頂いた。

小雨交じりの当日、森町の狭い街なかの道を歩いていくと、靴屋さんに到着。北嶋靴店の歴史は古く、天保13(1842)年に遡り、現在の店主は七代目である。伝統の製法と素材にこだわり、本物の味にこだわっている(図4)。



図4 北嶋靴店で甘酒と漬物を振る舞う北嶋恵介店主

6 小國神社の見学(白澤)

大己貴命をご祭神とする遠江国の一宮の古社である。春の桜や、花菖蒲、秋の紅葉と四季を通じて広い境内には見どころが満載である。

日も傾きかけ、神聖な空気とともに少しひんやりとしながら参拝を終えた。

最後は、鳥居の横にある「ことまち横丁」で旅の土産をお買い上げ。森町ならではの、お茶やお茶を使ったスイーツ、近年では変わり種のかりん糖や、りんご飴などもなかなかの人気である。

7 史跡視察を終えて(鳥口)

静岡県は東西に広く、同じ県内でも市町によってその歴史や文化、風土は千差万別である。今回の袋井市・森町の史跡視察は、建築物や美術作品、歴史史料等の実物に直接触れることを通して、そのことを再認識させてくれた。また、1つの地域に焦点を当て、その地域の歴史や文化、風土等について、日夜県内の様々なフィールドで活動する学芸員や博物館職員が共有できたこと、互いの専門性の垣根を越えて対話し合えたことは意義深いように思われる。今回の史跡視察は、横に長く広い静岡県において、歴史、美術、自然史等、多様な館が加盟している静岡県博物館協会ならではの講習会ともいえる。今後も静岡県内の様々な地域に焦点を当て、継続して取り組んでいきたい。

2023(令和5)年度 第2回講習会 文化財救済と史料ネット(報告)

岐阜県美術館
静岡文化芸術大学
浜松市博物館(静岡県博物館協会事業推進グループ)

廣江泰孝
西田かほる
橋本充悠

静岡県博物館協会では、2022年度に引き続き災害時における文化財救済について取り上げた講習会「文化財救済と史料ネット」を博物館協会加盟館園および一般の方を対象として実施した。実施概要は以下の通りである。

日時 令和6年3月10日(日)午後1時～午後4時

会場 静岡文化芸術大学南176大講義室

参加人数 50名

内容 「私たちが守っているもの-岐阜県美術館で実践している日常の保存管理、災害への備え」

廣江泰孝氏(岐阜県美術館課長補佐兼学芸係長)

※現担当主幹兼学芸係長

「古文書を継承していくために-史料調査の経験をふまえて-」

西田かほる氏(静岡文化芸術大学教授)

なお、本講習は浜松市文化財課が所管する文化財サポーター向けの講座としても位置付けられ、文化財サポーター 19名の参加があった。

講習会の内容としては、廣江氏からは日常業務の延長線上にある岐阜県美術館の防災対策について、西田氏からは平時からの防災対策としての史料所在調査や関係機関の連携への展望についてお話いただいた。その内容の要約については各講師にご寄稿いただいたので以下に掲載する。

2022年度の講習会を踏まえ、本講習ではどのように防災のために実践をしていくかを考えさせられる内容となった。特に災害発生時に防災を考えるのではなく、災害発生時に必要な対応がとれるよう平時から準備や実践しておくということが、両講師の講演に共通する点であったといえる。

私たちが守っているもの-岐阜県美術館で実践している日常の保管管理、災害への備え-

廣江泰孝



これまでに保存担当として体験した、国内外での様々な災害対応経験から、岐阜県美術館で実践している防災減災への取り組みについて紹介する。主に日常業務としての取り組み方から、施設工事等美術館機能を更新する際の保存担当としての関わり方まで掘り上げていった、総合的な防災対策へと至る考え方を、順を追って説明する。

災害への対応は、常に実践をイメージしながら検討していく必要がある。しかし、想定できるイメージの幅は、防災知識や被災体験の有無によって大きく異なる。また被災の過程や状況は個々に異なり、対応時期によっては判断も異なってくる。ひとたび発生すれば、甚大な被害へと至る災害の、根底にある問題を知ることが重要となる。

はじめに、美術館としての施設機能や日常管理を前提とした災害とは何かについて、考えてみる。毎年実施する消防訓練は、地震後の火災をはじめ、様々な発火原因を想定して行っている。また、建物としての耐震基準以外に、展示や保存時における免震や制振といった様々な考え方を導入して総合的な防災訓練に取り組んでいる。風雨による雨漏りや浸水、破損など、自然災害への対応については、施設機能の維持管理を前提とした防災体制を敷いており、常時

監視状態に館全体を置いている。また盗難や意図的な破壊、損傷行為などの直接的な被害となる人的災害については、有人警備と機械警備双方による防犯体制を整えている。その他にも、収蔵品に損傷をもたらす美術館ならではの例として、照明設備や、温湿度環境を制御する空調設備、空気環境等による環境被害や、虫菌害といった生物被害が挙げられる。尤も、学芸員や作業員による収蔵品の取り扱い時が最も危険であり、どれだけ熟達していてもその都度適切な対応が求められることは言うまでもない。

ところで、災害への対応としての防災とはどのようなものであろうか。守るべきものを様々な災害要因から防ぐことであり、その根幹を支えているのが、美術館としての施設機能や日常管理、そして学芸員をはじめとする館員の業務に他ならない。しかし、現実には、誰のための何のための防災準備だったのかと、被災現場に立つ度に、その問題に直面する。人知の及ばぬ甚大な被害を前にして、また大規模災害における救援活動では、救済する人も物も、全てを対象とすることは難しく、その時点における優先順位を検討し、選択して作業することになる。結局のところ、防災を心がけることも、被災から少しでも収蔵品を遠ざけることも、管理する学芸員の意思が反映した姿だと気づかされた時に、そうまでして守る意味を確認することができるし、その対処方法が通常と異なっても、あり得る理由に気づかされる。

災害から守るということは、どういうことか。自館にとって守るべき物は何か。対象を明確にイメージした時、日常業務の延長線上に、自館にしか思いつかない、災害から守る方法を発見できるかもしれない。様々な災害から守ることを検討するばかりが、防災の向かう先ではない。それではかかる費用も人も長続きしない。

どうやって守るのか。まずは展示室や収蔵庫等の保管場所について徹底的に知ることから始める。どのような展示や保管方法ならば災害を防ぐことができるのか、施設仕様から考えてみる。次に作品の状態や保管環境を知ることだ。そして何よりも、自分の専門分野のみならず全ての収蔵品について取り扱い方に習熟しておくことが学芸員には求められる。

防災で本当に必要な考え方はここからである。誰がどのようなことを心がけて日常管理しているか、関わっている人の仕事を知ることが重要である。守りたい収蔵品の構造、技法、梱包方法から搬送の仕方まで知ることと同じ位、取り扱ってきた人から得る情報には、多くの防災上の智慧が隠

されている。また保存状態から、その収蔵品に今起きている事について経過を追ってどれだけ知っているか、日頃から観察者としての接し方を意識してほしい。その上で、日常管理に必要な、保存に関する知識や技術について、研修会や講座等、学ぶ機会があるならば積極的に参加してほしい。災害を未然に防ぐことは、一歩でも私たちが守っているものに近づこうとする努力が、防災の考え方の原点にある。発災時の対処方法を考えていく上で、重要な判断基準となる。もし被災館として救援要請をせざるを得ない状況になったとしても、残された施設機能と資材を最大限活用して、まず自館職員で初動に取りかかることができる。緊急時の避難及び保管方法は、収蔵館として守りたいことを明確に示した現れであり、その後の館に併せた救援活動方針の基軸となる。

こうした日常業務における取り組みや実践経験が、施設工事等美術館機能を更新する際に、作品の保存環境整備や、総合的な防災対策へ関わっていくことへ繋がっていく。今後、機会があれば岐阜県美術館で行っている具体的な日常対応から被災時の対策まで、ご紹介したい。

「古文書を継承していくために一史料調査の経験をふまえて」

西田かほる



今回の報告で求められたのは、①県内の古文書の所在状況(調査状況・所在把握状況・調査にかかる課題)、②所蔵者の現状(抱える課題)、③各所蔵者の文書保管状況(災害時に想定されるリスク)、④史料救済のためのネットワーク、⑤研究者としての史料救済への関り(自治体・博物館などとの連携の展望)である。これら全てに応じることは難しいが、浜松市域を事例として、いくつかの点について

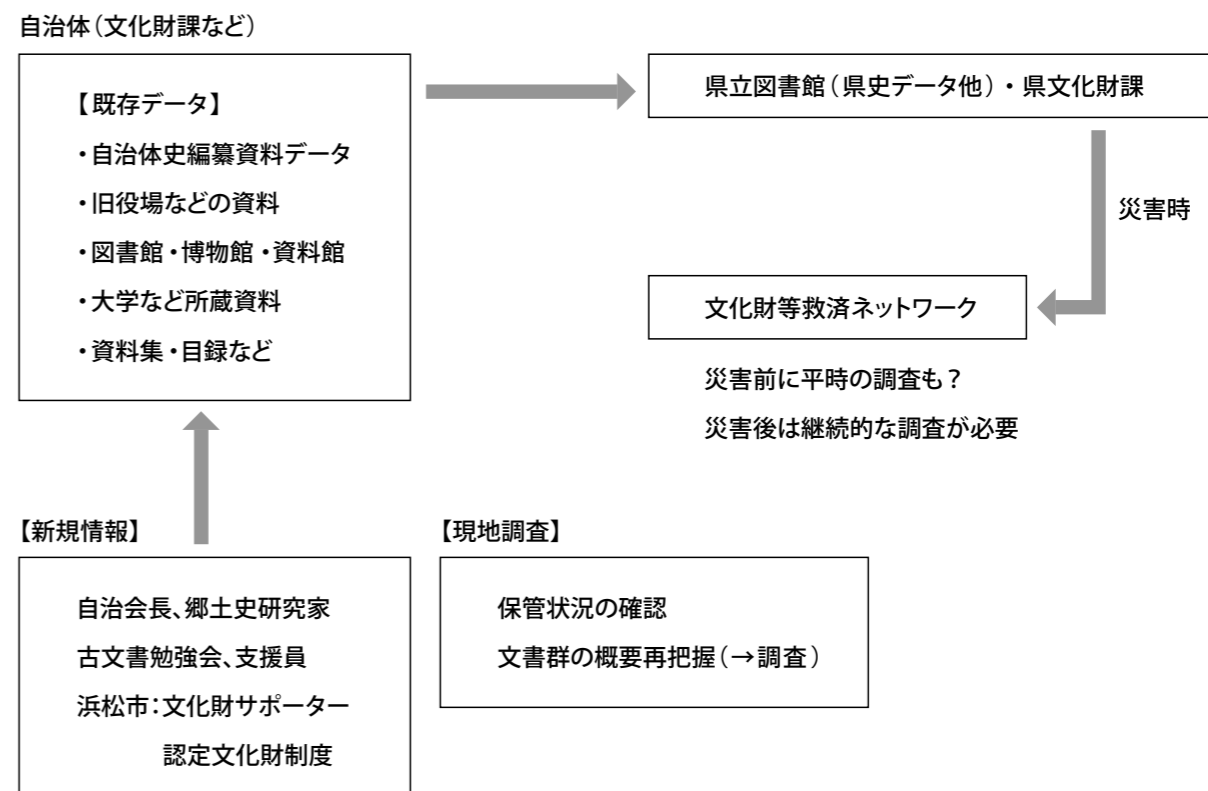
述べた。報告では、全国的な史料の滅失状況、戦後の史料調査の動向、地域・所蔵者の現状および静岡県内の史料調査活動の主体、県西部地域における自治体史や目録の刊行状況について紹介したが、ここでは紙幅の都合上、平時の災害対策として述べた連携の展望についてのみ記す。

災害から史料を守るためには、災害がおこる前に史料の所在情報のデータベースを作成することが重要と考える。浜松市域において自治体史編さんの際などに把握された古文書所在件数は、およそ620である(図書館、博物館所蔵を除く)。まずはこのような既存の調査データを自治体ごとに集約し、それを県立図書館や県文化財課で一括して保管する体制が作れないだろうか。そうすれば災害時に必要に応じて市町村や文化財救済ネットワークに情報を提供することができ、救済のための素早い対応が可能になる。現在「文化財保存活用地域計画」が各自治体で作成され、未指定文化財の把握がすすめられていることから、それらを集約して災害対策に利用することもできよう。また新規の所在情報は、地域の自治会長や郷土史研究者、古文書勉強会の方々、浜松市であれば博物館の文化財サポーターや認定文化財制度における所蔵者・推薦者といった地域

の歴史に関心を持つ市民との連携によって、把握・収集することも可能になると考える。そのうえで現地に赴き史料の保管状況を確認するとともに、所蔵者への史料の意義を説明する。これまで刊行された史料目録は、史料群の一部である場合も多いことから、文書群全体を再把握し、必要に応じて調査を実施することも期待できる。調査の実働は、大学や史料調査団体あるいは古文書研究会のような団体が担えるが、連携の核は、地域における信頼と情報網、恒常的な活動を行い得る博物館や文化財課などが望ましいのではないかと。

他方、過疎化や高齢化が進む現状の中で、史料の維持管理ができなくなっている所蔵者も多いことから、史料の受け入れ場所の確保も準備する必要がある。その他、災害対応に関連し、自治体の防災事業の中に文化財を積極的に組み込めないであろうか。

構想を語ることは簡単であるが、実行するのは難しい。各地の先行事例に学びながら、できることを少しずつ進めていきたい。報告後、浜松市博物館と連携して、浜松市域の史料所在把握に取り組み始めたところである。



突撃!となりのミュージアム! Vol.4

-「様々な分野の学芸員が業務の悩みを語る」篇-(報告)

掛川市二の丸美術館
 浜松市美術館(静岡県博物館協会事業推進グループ)
 袋井市歴史文化館(静岡県博物館協会事業推進グループ)
 袋井市歴史文化館
 袋井市歴史文化館
 静岡県立美術館(静岡県博物館協会事務局)

飯田杏子
 島口直弥
 白澤崇
 杉山侑暉
 高塚真之
 薄田大輔

1. はじめに(薄田)

静岡県博物館協会では、加盟館園同士が日々の関心事を共有しあう場として、相互インタビューを実施している。今回は、歴史、美術、考古など様々な専門分野の学芸員が集い、日々の業務で抱えている悩みを率直に意見交換することを目的に開催された。本稿では、相互インタビューで話題に上がった事柄についてその概要を紹介する。

2. 展覧会における諸問題(薄田)

学芸員が企画する展覧会が必ずしも多くのニーズに応えられているわけではない。絵画などをコレクションの軸とする掛川市二の丸美術館では「掛川城に隣接するため、掛川城の歴史などを紹介する博物館的な要素も求められていると感じる」と飯田学芸員は語る。

展示方法では、島口学芸員は「仏像の展示では、美術館の展示であるところを大切にしたい」という。ケースに仏像を密に羅列するだけでは、資料展示の意味合いが強く、造形的なよさや美しさが伝えづらい。広い展示室の中央に仏像を一体のみ展示しても場が持ち、通常、拝むことができない背後も鑑賞できるよう工夫しているという。古文書の展示でも悩みは尽きない。翻刻や要約だけでもキャプションは膨大である。高塚学芸員は「言葉をたくさん並べないと伝わらないこともある一方、省略して簡潔に書いた方が読んでもれる人が多い」と相反する問題にどう対応するのか日々模索しているという。

3. 学芸員の調査研究における現状と課題(島口)

袋井市歴史文化館は、館内で古文書整理・調査を行う。杉山学芸員は「資料の取り扱いには慎重な作業が必要。集中して行うことが大切」という。白澤館長は「調査中『ちょっと電話』とはいかない。資料にもよくない」と語る。

掛川市二の丸美術館は年6~7本の企画展を学芸員3名で運営し、契約・予算事務、広報も担う。飯田学芸員は「『学芸員は新しいことを勉強しなきゃ』と言われるが調査研究は時間外や帰宅後になることも」と語る。

静岡県立美術館は企画展・館蔵品展を年各4本開催する。薄田学芸員は「展覧会や寄贈品に関する調査研究は勤務時間に行うことが可能」と語る。浜松市美術館も類似の現状を抱え、調査研究、論考・解説の執筆等の学芸業務の時間を何とか捻出する。白澤館長は「学芸員の純粋な部分での研鑽に時間を取りたい。学びにどれだけ時間が取れるか」と語る。また、「行政側の都合やビジョンとの兼ね合いは難しい話」と課題を提示した。

4. 講座など学芸員と地域との関わり(杉山)

講座や体験などの形でも、学芸員は館所蔵史料や地域の歴史などの情報を発信している。

地域の歴史を学びながら古文書に親しんでほしいと、袋井市歴史文化館では、定期的に地元の史料を用いた古文書講座を開いている(杉山)。高塚学芸員は、平日の開講が多く、参加者の偏りが悩みであると語った。薄田学芸員は、「前職では毎週のように何らかの講座が入っていたが、県立美術館では講座は少なく少し寂しい」と言う。浜松市美術館では、今年度から「開催中の展覧会と違うテーマで話す」学芸員講座を始めた。島口学芸員は「展覧会での蓄積を、その後も活かす試みであると同時に、学芸員が主体的に話せる場を設けることで、やる気にもつなげられる」と語った。飯田学芸員は、日々の業務・展覧会の準備と勉強とのバランスを取ることに難しさがある、と、現状の課題を指摘した。

5. 学芸員の育成(白澤)

学芸員としての研究や調査をきっちとやり、長い期間をかけて育てていけるような人事。普通の行政の動きと同じでは厳しい部分がある。観光の分野、街づくり、人づくりの部分に文化財を何とか活用していきたい。

文化財を市民にもっと広げていく、活用していくようなことに関われるようなところに何年か行き、そういう見方もあると経験できる。そうした配慮してくれる人事は大賛成と島口学芸員は語る。

県博物館協会のツアーとかはすごいヒントになる。今こそ学芸員さん同士の中で自分たちの価値をアピールする。これだけの知識を持った人たちが集まっていることを、もっと訴えかける必要がある。

学芸員って芸がつく以上はアドリブで、話術で人を引きつけるような、資料一枚でも何か語れる職員になってほしい。ポテンシャルを持った方が、加盟館の中にたくさんいるのではと思っている。

6. 寄贈の受け入れ・収蔵スペースの問題(高塚)

各館で寄贈品の受け入れが増えている。薄田学芸員は「地域ゆかりで収集方針に合い、研究・展示に活用できる品を受け入れている」という。大量の古文書を寄贈された際には、何度も現物の確認に赴いて判断していた(高塚)。一方で収蔵スペースの悩みは尽きない。島口学芸員は「館外に収蔵庫を設けたが、館から遠く、輸送トラックを出している。」と語る。寄贈品の収蔵には様々な課題がある。「農具は展示・保管に限らず経験者が実際に動かす体験を実施し、そのための必要量を確保する形で受け入れている」と白澤係長は語る。飯田学芸員は開館当時に大量に受け入れた寄贈品には真贋不明の品があり、頭を悩ませている。浜松市美術館では外部の方を交えた寄贈審査会を開催している。島口学芸員は審査前の時点で価値判断ができるよう、内部の学芸員の人員・研究時間の確保が必要と語った。

7. 指定管理者制度と公立・私立の違い(飯田)

美術館や博物館をはじめとする「公の施設」の管理・運営において「指定管理者制度」が導入されてから20年以上が経った。今回、設置者と運営者が異なることによる情報共有・協力体制の構築の難しさや過去の調査との重複・蓄積の問題等について当館の展覧会を例に挙げ述べた。浜松市美術館の島口学芸員によれば、当館と同じく指定管理

者により運営されている秋野不矩美術館の展示計画については、浜松市美術館の方でも把握・調整をしているとのことだった。

話は、運営形態から公立と私立の違いについても及び、両方の美術館での勤務経験がある静岡県立美術館の薄田学芸員が、「前職の私立美術館と現職を比較すると、公立館ゆえの他団体との調整や予算計上の難しさ、それぞれの館のペースの違いを感じる」と語った。



相互インタビューの様子(2024年12月16日 静岡県立美術館)

8. おわりに(島口)

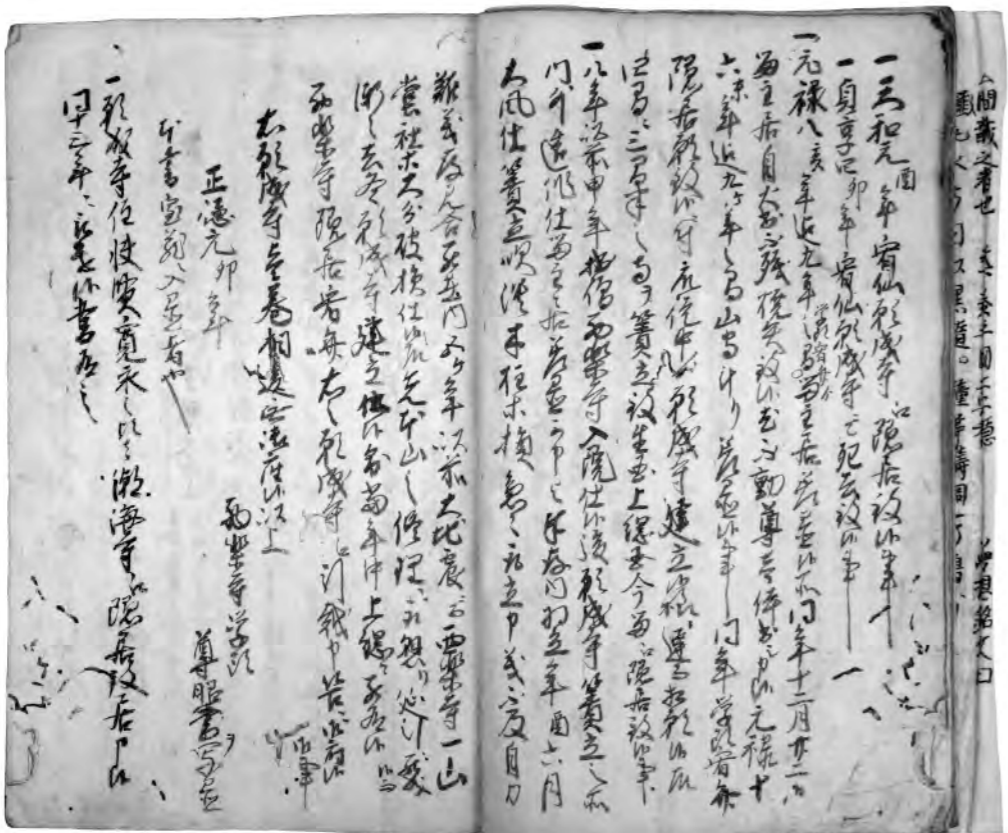
今回の相互インタビューでは、展覧会や調査研究、講座や地域との関わり、資料・作品の収蔵問題等、学芸員が日常の業務で向かい合っている課題や現状の共通項を見出すことができた。見出された課題の解決に関する具体案も、専門性の異なる学芸員同士で多様なアイデアがあがった。本稿の筆者6名はもちろん、本稿を目にしたミュージアム関係者が、本稿で取り上げた話題について振り返ったり、それぞれの業務にフィードバックしたりすることができれば、今回の相互インタビューの意義がさらに深まるものと思われる。また、学芸員の育成に関する課題、指定管理者制度の現状と課題、公立館・私立館のギャップ等、行政・法人・民間企業等のミュージアムの設置者・運営主体が組織としての大きな枠組みの中で考えるべき話題もあがった。こうした事柄に対し、様々な事例をもとに現状を把握し、学芸員としての視点から考えを形成しておくことは重要といえる。今回の相互インタビューは、学芸員の業務やその存在意義について、広い視野から捉え直すきっかけとなった。



【写真1】 (足立家記録 二)(足立盛二郎家文書三三七―四)宝永地震条

袋井市歴史文化館所蔵

- 注30 (足立家記録 二)宝永元年(一七〇四)四月一日?条(五月十三日条か。前掲注15参照。
- 注31 西山昭仁前掲注23論文、二二八頁。
- 注32 北原系子前掲注19論文など。
- 注33 西山昭仁前掲注23論文、二二八―二二九頁。
- 注34 西山昭仁前掲注23論文、二三四―二三五頁。西山はこの体制を「地震等非常時登城の制」と呼んでいる(二三三頁)。
- 注35 西山昭仁前掲注23論文、二三九―二四三頁。
- 注36 西山昭仁前掲注23論文、二三七―二三八頁。
- 注37 西山昭仁前掲注23論文、二三七―二三八頁。
- 注38 元禄十二年(一六九九)九月十五日付け(浅羽惣開堤樋修復願書)(静岡県編集発行「静岡県史 資料編11 近世三」一九九四年、二三三号、三九三頁)。磐田郡浅羽町梅山 岡本坦氏所蔵文書。句読点の一部と返り点は杉山による。
- 注39 西山昭仁前掲注23論文、二四四頁。また北原系子前掲注19論文など。
- 注40 (足立家記録 二)元禄十六年(一七〇三)十二月二十六・二十八日条。前掲注15参照。
- 注41 (足立家記録 二)宝永地震条(宝永四年(一七〇七)十月是月条)宝永五年(一七〇八)閏正月是月条)。五十四葉目表、五十六葉目裏。前掲注15参照。
- 注42 永原慶二前掲注18著書、一五頁。
- 注43 永原慶二前掲注18著書、二六―二〇頁ほか、中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会「1707 富士山宝永噴火報告書(二〇〇六年)、下重清「過去の災害に学ぶ(第11回) 宝永4年(1707)富士山噴火」(広報 ほうさく)No.37(二〇〇七年)。
- 注44 永原慶二前掲注18著書、一七頁。
- 注45 永原慶二前掲注18著書、一八頁。
- 注46 北原系子前掲注19論文。
- 注47 永原慶二前掲注18著書、七六―八二頁。
- 注48 宝永地震の少し前、(足立家記録 二)宝永四年(一七〇七)七月二日条に、「同七月二日ノ晩暮四ツ時分ニひかりもの通り申候」とある。晩暮四ツ(午後十時頃)に光り物が通った、とのことだが、これは地震と関係があるのだろうか。宝永地震と関係が無くとも、少し気になる記事ではある。
- 注49 鈴木勝「春岡、少し前のこと」(一九九八年)一一―四頁。
- 注50 宝永元年(一七〇四)六月「新可結果牒」(西楽寺文書近世一〇)。西楽寺所蔵。縦帳、縦312mm×横227mm×厚6mm。



【写真2】 『当山諸由緒扣』所引正徳元年(一七二二)尊昭書状写(西楽寺文書近世二)

西楽寺所蔵

- 注51 (当山諸由緒扣)所引「結果帳序」(西楽寺文書近世一一)。西楽寺所蔵。縦帳、(当山諸由緒扣)全体の大きさは縦291mm×横200mm×厚10mm。
- 注52 (新可結果牒)(前掲注50参照)。
- 注53 (八葉)という尊昭の署名は、高平山大仏の蓮弁銘文や、宝永三年(一七〇六)(十所大権現札下書)(西楽寺文書近世一六五五、西楽寺所蔵)、享保三年(一七一八)三月八日付け(高平山半鐘銘)(西楽寺文書近世一七四一、西楽寺所蔵)などに見られる。宥盛の「十九葉」という署名は、『当山諸由緒扣』(西楽寺文書近世一一)にも見られるほか、幕末に、西楽寺を有栖川宮家の祈願所とするために京都に赴いた一件の書類をまとめた紙袋の上書き(慶応四年(一八六八)四月付け(紙袋)西楽寺文書近世一二五二―一、西楽寺所蔵)などで見られる。
- 注54 元和五年(一六一九)(十所大権現鐘銘)(西楽寺文書近世一三八二)。西楽寺所蔵。縦帳。下部破損。縦(297)mm×横420mm。
- 注55 宝永六年(一七〇九)乍忠口上書を以御詔申上候「西楽寺文書近世一〇一四)。西楽寺所蔵。糊はずれ断簡1 縦228mm×横304mm、断簡2 縦230mm×横306mm。
- 注56 (当山諸由緒扣)(西楽寺文書近世一一)所引正徳元年(一七二二)尊昭書状。西楽寺所蔵。前掲注51参照。
- 注57 これらの高平山の整備や高平山大仏の建立については、令和三年度企画展「中遠の古刹 真言宗西楽寺II 高平山」や、西楽寺開山一三〇〇年記念講演「住職、江戸城へ行く 西楽寺と江戸幕府」(二〇二四年九月八日)で紹介した。
- 注58 財団法人文化財建造物保存技術協会編「静岡県指定文化財 西楽寺本堂保存修理工事報告書」(西楽寺保存修理委員会、一九九五年)九〇―九二頁。
- 注59 (当山諸由緒扣)(西楽寺文書近世二)。前掲注51参照。
- 注60 (当山諸由緒扣)(西楽寺文書近世一一)。前掲注51参照。(内は双行書、外は、双行書の中で更に双行書。
- 注61 古美術修理すぎもと編「西楽寺不動明王像修復報告書」(袋井市教育委員会、二〇〇二年)二頁。
- 注62 (当山諸由緒扣)(西楽寺文書近世二)。前掲注51参照、など。
- 注63 享保三年(一七一八)二月十七日「高平山大仏建立施主附写」(西楽寺文書近世三二一八)。横帳。縦130mm×横339mm×厚3mm、など。また、前掲注57も参照。

発』に記された災害に関する信頼できるデータを積み上げた上で、いずれ試みたいと思う。今回宝永地震に関する史料の一つとして、西楽寺文書『当山諸由緒扣』を紹介したが、その二冊目の竖帳、尊昭のノート(竖帳小)には、尊昭の頃に新たに寄進された仏像に関する情報も記されている。

例えば、「本堂弥陀春日之作。同脇立観音勢至同作。四天王持国多聞広目有前三前仏。宝永五年林徳寺有栄再三興之。」(注59)とあり、それぞれの文の修飾関係には分かりにくいところもあるが、少なくとも四天王像の内持国・多聞・広目・天の前仏は宝永五年(二七〇八)に再興されているようだ。この記述の下には「福智坊住僧有喜寄三進之」とあり、有喜が寄進した仏像を有栄が再興したものらしい。

この有喜も尊昭の同時代人で、同じく『当山諸由緒扣』竖帳小には、「一、弘法大師(願主尊昭。有ニ施入過去帳。一) 両大師ハ(福智坊有喜寄附也。(宝永三亥九月)』(注60)とあって、宝永三年(二七〇六)九月に大師像を寄付している。

今引用した二点の記事を総合すると、先に見た四天王前仏は、宝永地震前に寄進されたものを、宝永地震後すぐに再興したものであろう。

また、西楽寺不動明王は、台座に「七月吉祥日願主有喜謹言 京堀川筑後大掾常味作」奉鑄立不動尊一吃鉢奉誦法華經三千部供養宝永七庚寅(注61)とあり、同じく有喜によって宝永七年(二七二〇)に寄進されたことが分かる。

有喜は西楽寺の仏像寄進に功のあった人物のようだが、宝永地震の後、今回紹介した建物の復興よりも早く、仏像の再興や寄進が行われていたことが分かる。

この他、尊昭の頃には、正徳三年(二七三三)に、高平山に西国三十三所の勧進を行い(注62)、また、享保三年(二七八)には高平山大仏を建立している(注63)。

こうした仏像寄進の背景には、尊昭が住職だった頃の西楽寺の個性があるかもしれないが、災害後に仏像を寄進することに積極的な意味があった可能性もある。

尊昭の頃の西楽寺史の研究を進めるとともに、近世の、災害直後に寄進された仏像の情報を集め、検討することで、近世の災害史と仏教史を関連付けて分析できるかもしれない。

このテーマについても、今後文献資料研究を進めていきたいと考えているが、私には仏像を見る専門的な目がないので、近世の仏像を研究されている方には、よければ、災害直後に寄進された仏像、という視点も気に留めていただけたら幸いである。

しい雲が起こり、夕方からは火の玉が舞っているのが見えたとのことだが、実際には、宝永噴火は十一月二十三日午前十時ごろに発生している。

一時間、二時間ほどの誤差であれば、正確な時計が常にある環境ではない中での記述ゆえ許容の範囲内かと思われるが、富士山噴火に関する一ヶ月の誤差は、少々記憶の怪しさを感じさせる。

また、『長溝村開発』の延宝の高潮関係箇所については、大風雨と高潮について記述している箇所の冒頭に「寛文八年庚申八月彼岸中日の翌日大雨大風吹」(八五九頁)とあるが、寛文八年(二六六八)の干支は戊申であり、『長溝村開発』に記す干支の庚申が正しいとすれば、年は延宝八年庚申が正しいことになる。記述から察するに、延宝八年庚申が正しいと考えられる。だとすれば、延宝の大風雨、高潮があったのは閏八月だから、『長溝村開発』は「閏」を落としていることになる。

この誤り方から、『長溝村開発』は、日時については、それほど正確に書こうという姿勢を持っていなかったことがうかがえる。

このように、『長溝村開発』は、昔物語見聞所時之慰二書記』は、少なくとも、日時については不正確な記述と言える。

注7: 松本稔章前掲注3論文、五〇八―五〇九頁。

注8: 『長溝村開発』は、昔物語見聞所時之慰二書記』。『浅羽町史 資料編二 近世』(前掲注4参照)八六一頁。浅羽町史編纂時の写真で校訂した。

注9: 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会『1896 明治三陸地震津波報告書』(二〇〇五年)五頁。

注10: 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会前掲注9報告書、三二頁。

注11: 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会『1891 濃尾地震 報告書』(二〇〇六年)二二二頁、一四一頁ほか。

注12: 袋井市総務部防災課編集発行『袋井市防災史』(二〇一〇年)。

注13: また、『角川日本地名大辞典』編纂委員会・竹内理三編『角川日本地名辞典 22 静岡県』(角川書店、一九八二年)の「袋井市」―「宝永・安政の地震」の項には、「当地域の主な災害は地震で、宝永の大地震(一七〇七)では「袋井不残潰」とあり、安政の大震災(一八五四)では「袋井迄皆潰、袋井宿不残焼死人凡二百人許、此宿も原の如く見ゆ小屋悉つ無之由」とあって、地震とそれに伴う火事による被害を伝えている(二二七六頁)とある。同書「袋井市」の他の項では、説明文に必ず根拠史料を挙げているが、「宝永・安政の地震」の項にだけは、出典が書かれておらず、この記述の出典と、引用されている史料の正体がよく分からなくなっている。

注1: ミニ展示「鳴動する地面、奔走する人間」の展示解説資料(補遺含め三点/いずれも杉山作成)は、袋井市歴史文化館ホームページで公開している。以下のURLを御参照いただきたい。

fukurui-rekishi.com/siryo/2024/10/post-316.html
fukurui-rekishi.com/siryo/2024/11/post-319.html
fukurui-rekishi.com/siryo/2024/11/post-317.html

また、ミニ展示の内容は、一部袋井市社会科副読本デジタル版にも登録されている。一般の方も閲覧可能なので、あわせてご覧いただきたい。

袋井市社会科副読本デジタル版URL: fukurui-digital-archive.com

注2: 袋井市史編纂委員会編『袋井市史 通史編』(袋井市役所、一九八三年)。

注3: 松本稔章「宝永地震と安政東海地震」浅羽町史編さん委員会編『浅羽町史 通史編』第四編第四章第一節、浅羽町、二〇〇〇年)五〇九―五一一頁。

注4: 『長溝村開発由緒書』史料の原題は「長溝村開発」。浅羽町史編さん委員会編『浅羽町史 資料編二 近世』(浅羽町、一九九六年)五〇六号、八五―一八七二頁。宝永地震関係箇所は八六一―八六二頁に収録されている。「長溝村開発」は個人蔵。

注5: 『長溝村開発』の宝永地震関係箇所は五〇四―五〇九頁。

注6: 『長溝村開発』の宝永地震関係箇所については、以下の疑問点が挙げられる。『長溝村開発』には「宝永四年亥十月四日昼九ツ時分にも候半や、地震洵出す」(『浅羽町史 資料編二 近世』前掲注4参照、八六一頁、原文にある振仮名は省略、浅羽町史編纂時の写真で校訂/以下同)とあり、宝永四年(二七〇七)十月四日、昼九ツ頃(十二時頃)に地震発生としているが、実際には、宝永地震は宝永四年十月四日の午後二時頃に発生したと言われている。

また、『長溝村開発』には「同十月下旬の頃昼過時分より、東の方に醜き雲起り、黄昏時より大石程の火の玉火花のごとく飛散る。其日昼方東の方に雷どろろ」と鳴申候。此火の元にて候。諸人驚見るに夜になり、眠き所を見やるに、芝原又ハ三蔵辺まで火の玉飛来る様に相見へ申候」(八六二頁)とあり、同年十月下旬、東の方で恐ろ

注14: 『足立家記録』(足立盛一郎家文書二二三七)。袋井市歴史文化館所蔵。

注15: 『足立家記録 一』(足立盛一郎家文書二二七―二七四)。縦310mm×横208mm×厚41mm。

なお、袋井市教育委員会教育長山崎恭一編集発行『袋井市史資料 第五巻』(一九八八年)には、「足立家記録一・二・三」という史料が抄出されている(五一―六一頁)が、こちらは足立癸卯一家文書であり、久津部村の史料なので、今回紹介する(足立家記録)とは全くの別系統史料のようだ。

注16: 『足立家記録 一』(元禄十六年(一七〇三)十一月二十二日条。足立盛一郎家文書二二七―二七四。前掲注15参照。以下史料原本からの引用文の句読点や返り点は、断りが無い限り杉山による。

注17: 武村雅之「元禄地震の地震像」(内閣府(防災担当)『1703元禄地震報告書』二〇一三年)五一―六頁。

注18: 永原慶二「富士山宝永大爆発」(吉川弘文館、読みなおす日本史、二〇一五年、初出二〇〇二年)一五頁。

注19: 北原糸子「元禄地震の江戸城修復と大名手伝普請」(『国史学』二一八、二〇一六年)三頁。

注20: 北原糸子「柘之地震道記」の跡を辿る(東海道、戸塚、小田原)。(内閣府(防災担当)『1703元禄地震報告書』前掲注17参照)一八四頁。

注21: 『柘之地震道記』元禄十六年(一七〇三)十一月二十一日条。梨木柘之著/熊原政男校訂『柘之地震道記』(一九五三年)三頁。

注22: 熊原政男「解説」(『柘之地震道記』前掲注21参照)。

注23: 西山昭仁「元禄地震(一七〇三)における江戸での震災対応」(『大谷大学大学院研究紀要』(二〇一〇)三、二〇〇三年)二二―三七頁。

注24: 西山昭仁前掲注23論文、二二―三七頁。

注25: 『柘之地震道記』元禄十六年(一七〇三)十一月二十四日条。『柘之地震道記』(前掲注21参照)七頁。

注26: 『柘之地震道記』元禄十六年(一七〇三)十一月二十四日条。『柘之地震道記』(前掲注21参照)七―八頁。

注27: 『柘之地震道記』元禄十六年(一七〇三)十二月三、四日条。『柘之地震道記』(前掲注21参照)一四―一五頁。

注28: 矢田俊文「近世の巨大地震」(吉川弘文館、歴史文化ライブラリー四六三、二〇一八年)五四頁。

注29: 卷島隆「江戸の飛脚 人と馬による情報通信史」(教育評論社、二〇一五年)二八二頁。

一、高平隱居宥香遷化之後山之木も段々被_レ盜取_一、拙僧代_ニ被_レ成、漸々式百七拾本
余御座候而_{小形大六郎り}山梨町金右衛門_ニ売_レ申候。其節山境之折下_リ、或ハ松、
或ハ杉を立置申候御事。

右之通_ニ少も紛無_ニ御座_ニ候。然_ニ南西_ニ相当折下_リ為_ニ境目_ニ木食以来立木候松五本残
置候所_ニ、今度右五本之内沓本深谷五郎太夫子忠兵衛振切仕。此方_ノ相断候所持山之
内之木_ニ候へハ、御公儀様御用木_ニ切申候由返答仕候。御公儀様御用_ニ被_レ召上_ニ候儀、
拙僧方も不_レ及_ニ異議_ニ候得共、此五本之木忠兵衛支配_ニ被_レ成候へハ、先住宥弁代之
ろひ木之跡ハ不_レ及_レ申、六年以前_ニ拙僧_ノ申候切跡も両村百姓地_ニ被_レ成、拙僧代_ニ大
師山大分減少仕候段、何共迷惑_ニ奉_レ存候間、五本之松之在所与先年_ノ手前_ノ切取候跡
与御見分被_レ為_ニ仰付_ニ候。向後者、山境迄御立被_レ遊被_レ下候ハ、忝可_レ奉_レ存候。
以上。

(一七〇九)
宝永六丑_ノ

西楽寺

御奉行様(注55)

両者間の看過できない異同は、「拾老年以前卯年八月廿四日」「当山諸由緒扣」と「拾
式年以前巳ノ八月廿四日」「乍恐口上書を以御訴詔申上候」という違いで、年が異なっ
ている上、「壹」と「式」、「卯」と「巳」は書き間違えるものではない。

ここで気になるのは、「拙僧_ノ五代以前龍義代」「当山諸由緒扣」と「西楽寺四代龍義」
〔乍恐口上書を以御訴詔申上候〕、「拙僧_ノ四代以前西楽寺住持有香」〔当山諸由緒
扣〕と「西楽寺五代宥香高」〔乍恐口上書を以御訴詔申上候〕という違いである。

この文書を書いたのは西楽寺八代尊昭なので、どちらの表現でも間違いでないのだが、
一律に書き替えられていることから、「当山諸由緒扣」所引のものと「乍恐口上書を以御訴
詔申上候」(西楽寺文書近世一〇一四)とは、バージョン違いではないか、あるいは、どち
らかが下書きでどちらかが最終稿ではないかと考えられる。

また、「当山諸由緒扣」所引の場合、「拾老年以前卯年八月廿四日」は元禄十二年
(二六九九)己卯なので、合っているのだが、「乍恐口上書を以御訴詔申上候」(西楽寺文
書近世一〇一四)の場合、「拾式年以前巳ノ八月廿四日」は元禄十一年(二六九八)戊寅で
あり、干支が間違っている。

潰れてしまつて、修理に手間がかかっている、と言っている。

文中の「竇立」は、竇立漁法や竹籠のことで、意味が通らないが、これはおそらく「素
建」、すなわち、外部はできたが内部ができていない建物のことだろう。

さて、「当山諸由緒扣」所引尊昭書状写を見みると、宝永地震により西楽寺一山が被
害を受けたので、まずは本山の修理に注力せねばならず、願成寺(をはじめとした他の建
物)の修理は延引された、とある。

尊昭は、書状によれば、宝永元年(一七〇四)に西楽寺住職となっている。住職になって
すぐの頃から、尊昭が西楽寺一山の整備(壊れた建物の修復、高平山大仏建立、西国三十
三所観音巡礼建立など)を企画していたことが多くの史料から分かるが、これらは主に
正徳年間(一七二一―一七二六)に本格始動している(注57)。

宝永地震からの本山復興が一段落し、他の施設の修復や事業に人員を割くことができ
るようになった正徳年間、ということなのだろう。復興には長い時間が必要だった。

平成三年(一九九二)から平成六年まで行われた西楽寺本堂の保存修理工事で、部材に
書かれた墨書がいくつか発見された。その墨書の内、江戸時代のものを見ると、宝永地震
に関わりそうな墨書は、享保四年(一七一九)以降、享保十五年(一七三〇)まで、特に、
享保十二年(一七二六)の墨書が多く残っている(注58)。

もちろん、この後安政地震などで被害を受けているから、その度に部材の交換はあつた
はずであり、年月日を部材に書くかどうかや、部材の残り方も偶然性かなり左右される
から、この墨書を情報の全てと考えることはできない。

だが、享保四年(一七一九)、あるいは享保年間のものなどは、嘉永との年の離れ方や、
宝永地震との時期的な近さから、宝永地震の影響を受けた修理の記録と見て良からう。

本堂の部材の墨書と、「当山諸由緒扣」所引正徳元年尊昭書状写の、宝永七年(一七二
一)〔冬には願成寺が一応出来上がっているという情報をあわせて考えると、願成寺は後回
し、と言いつつも、本堂の修理にある程度目途が立ったところで、願成寺などの修理にも取
り掛かったらしいことが分かる。西楽寺本山以外には手が回らない、と言いながらも、尊昭
は、可能な限り急いで本山以外の修理も行つたらしい。

「小括」

『当山諸由緒扣』(西楽寺文書近世一)に綴じられている史料の内、一冊目の堅帳は、
虫食いひどい文書などを記録のために筆写した史料集で、明らかな間違いは修正した痕
があるが、恣意的な改変はしていない、誠実な筆写態度の文書集である。なお、「当山諸由
緒扣」の一冊目の堅帳は、西楽寺八代住職尊昭のノートと考えられる。

このことから、「当山諸由緒扣」所引のものが最終稿で、「乍恐口上書を以御訴詔申上
候」(西楽寺文書近世一〇一四)での誤りを修正し、表現も改めたのではないかと考えられる。
なお、年月日については、「当山諸由緒扣」所引のものでは、「拾老年以前卯年八月廿四」
となっている。「式」と書いたものを「壹」に、「巳」と書いたものを「卯」に書き直して
いる。これは、元になった文書(おそらく「乍恐口上書を以御訴詔申上候」とは別パー
ジョン)でも年月日が間違っていたものを、写した後に気付いて修正したものだと思う。
今見たいくつかの例から考えると、「当山諸由緒扣」は、誤字脱字はあるものの、史料原
本の明確な誤りを修正したのみで、恣意的に内容を変えたりはしていない、割と真面目に
書き写した文書集、と言えるだろう。

『当山諸由緒扣』所引の資料は、引用して内容を検討する価値があると言える。
では、尊昭書状を見てみよう。

一、天和元_{四年}、宥仙願成寺_江隱居致候事。
(一六八〇)

一、貞享四_{卯年}、宥仙願成寺_ニ死去致候事。
(一六八七)

一、元禄八_{亥年}迄九年之間_{字頭宥弁が}留守居差置候所、同年十二月廿二日、留守居自火出不_レ残
(一六九五)

焼失致候。尤不動尊壹体出_申候。元禄十六_{未年}迄九ヶ年之間山守計_リ差置候事。
(一七〇三)

同年字頭宥弁隱居願致候_ニ付、衆徒申_方願成寺建立候様_ニ達_ニ相願候故、四間_ニ
(一七〇三)

間半之寺ヲ_{竇立}致_、生国上総国今留_江隱居致候事。
(一七〇四)

一、八年前申年、拙僧西楽寺入院仕候後、願成寺竇立之所、門外造作仕、留守居差
置可_レ申与奉_レ存内、翌年_西六月大風仕、竇立吹潰、木柱等損。急之取立申義不_レ
(一七〇五)

及_ニ自力_ニ難義存、見合罷_レ在_内、五ヶ年以前大地震_ニ而西楽寺_一山堂社等大分破損
(一七〇七)

仕候故、先本山之修理_ニ取懸_レ、延引_ニ罷成候而、漸々去冬願成寺建立仕候間、当年
(一七〇七)

中上総_ニ罷有候。西楽寺隱居宥弁、右之願成寺_江引越申_答御座候御事。
(一七〇七)

右願成寺壹卷相違無_ニ御座_ニ候。以上。
(一七〇七)

正徳元_{卯年} 西楽寺字頭 尊昭書ヲ写置(注56)

『当山諸由緒扣』は、引用する文書の前後に、関係するデータや注を簡条書きにする体
裁なので、文書の少し前の部分から引用している。正徳元年(一七二一)尊昭書状には後
注もあるが、今回の内容には関わってこないで、今回は割愛する。

宥仙、宥弁は尊昭の前の西楽寺住職で、世代は宥仙―宥弁―尊昭の順。そして、小高願
成寺は西楽寺の隠居所である。この手紙は、隠居所に隠居を住まわせたいが、失火により全
焼した後、復興中に宝永二年(一七〇五)六月の大風、宝永四年(一七〇七)の宝永地震で

『当山諸由緒扣』所引正徳元年(一七二一)尊昭書状によると、西楽寺一山は、宝永地
震の被害を受け、その復興は、正徳年間によくやく目処が立ったらしい。

おわりに

本稿では、袋井市域に関する宝永地震関係史料として、従来知られていた『長溝村開
発』に加え、『足立家記録 一二』と、『当山諸由緒扣』所引正徳元年尊昭書状という二点
の史料を紹介し、新出史料二点の性格についても検討を行った。

〔足立家記録 一二〕については、揺れや、北原川村周辺の被害など、記主が直接見聞き
し、情報を得やすい位置にある村々の情報は信憑性があるが、富士山噴火など、遠隔地の
情報は不正確な点も含む伝聞情報であることを指摘した。

『当山諸由緒扣』については、明らかな誤りは修正している箇所があるものの、恣意的
な改変を行っていない、誠実な態度の筆写による文書集であることを指摘し、『当山諸由緒
扣』所引正徳元年尊昭書状写は、直接的な宝永地震関係の記述はないものの、かなり史料
原本に近いものであることを示した。

また、既知の『長溝村開発』については、災害関係の日時をあまり正確に書こうとしてい
ないことを指摘し、『長溝村開発』は、災害データの記録としてよりも、むしろ、あくまで
災害教訓書として読む方が良いのではないかと、という新たな分析視角を提示した。

宝永地震の情報については、『足立家記録 一二』に記された、名栗・久津部・上貫名・北
原川・不入斗・袋井町の宝永地震被害と、袋井町の復興について、江戸の丹嶋屋が請け負っ
たことと、その復興過程を明らかにしたことは、本稿の新たな成果と言つて良からう。

この他、短いながらも信憑性が高い元禄地震の新出史料として〔足立家記録 一二〕を紹
介できたことも、本稿の成果と言える。

最後に、本稿の成果から新たに考えられる今後の課題と展開について述べて終りたい。
新出史料二点について、その記述内容が、検討に値する信憑性を持っていることを確認
したが、今回は部分的な検討に終わった。いずれ、史料全体の分析が必要になるだろう。

今回、宝永地震からの災害復興や、元禄地震における飛脚や旅人による災害情報の伝
達について触れたが、復興や災害情報伝達については、袋井市域には、安政東海地震前後の
史料も多く残されている。安政東海地震前後の災害復興、災害情報伝達について、史料紹
介、分析を行うことが、もう一つ、大きな次の課題であると言える。

また、冒頭で示した、『長溝村開発』の災害教訓書としての史料分析だが、『長溝村開

いたものではないかと考えている。竖帳小の成立年代については、高平山大仏建立や木食直心の追放(いずれも享保三年(一七二八)を書いていることから、正徳三年(一七二三)以後)享保三年(一七二八)以前の成立かと思われる。

大小二冊の竖帳を綴じ、今の形にしたのは、最後の記事を書き、また、間に挟まった「宥盛記」を書いた宥盛であろう。宥盛は、『新可結衆牒』に自分の名前を書き込んでいるように、尊昭に強い関心を持っていたようで、自身の世代を「八葉」と自称していた尊昭(自身の名前とつなげて「八葉尊」となるように名乗ったもの)をまねて、自身の世代を「十九葉」と自称していた(注53)。「葉」で世代を書くのは、西楽寺ではこの二人のみである。宥盛が最終的な編集をしたからこそ、尊昭のノートが綴じられたのではないだろうか。

続いて、『当山諸由緒扣』の筆写態度について検討しよう。幸いなことに、『当山諸由緒扣』竖帳大については、収録されている文書の原本がいくらか残っている。原本と『当山諸由緒扣』の記載を比較することで、その筆写態度が分かる。

例えば、竖帳大の三番目に、鐘銘文が引用されていて、下部に「此印之内虫喰候故不_レ分_ラ」とある。鐘銘文に虫食いとはこれいかに、と思う向きもあるかもしれないが、この鐘銘文に対応するのは、西楽寺文書近世一三三二号の、鐘銘文を記した文書である。

この文書の原本を見ると、確かに下部が虫損で欠けていて、『当山諸由緒扣』が、その様子を書き写したことが分かる。ここで、双方の記載内容を比較してみよう。

まず『当山諸由緒扣』所収(宥宝十所権現鐘銘)を原文通りの文字組で引用する。

奉為遠州周智郡宇苅郷西楽寺無量寿
 仏并
 十所大権現奇進^(宥)鑄新鐘建立仏前
 処也 諸行无常之金音^(是生滅法フ時五障之迷)
 水游泥澄、速自性之開心蓮朝
 之○○^(虫喰)以百八之発音驚覺施自他
 法水添流而精現当二世之所願^(而)
 願以此功德 普及
 我等与衆生 皆共

続いて、元和五年(一六九九)付け(十所大権現鐘銘)を原文通りの文字組で引用する。

○○四口三障退失依一意ノ鎮陳ニ「
 □□□□者 韻
 奉為遠州周知郡宇苅郷西楽寺「

「乍恐口上書ヲ以御訴訟申上候」と「宝永六年(一七〇九)「乍恐口上書を以御訴訟申上候」西楽寺文書近世一〇二四(組み合わせ③)の三組は、西楽寺文書中に原本が残っている。

この内、組み合わせ①、組み合わせ②は、多少の文字の異同があるが、単純な誤写と認められるものである。しかし、組み合わせ③には看過できない異同がある。

「『当山諸由緒扣』収録順18 「乍恐口上書ヲ以御訴訟申上候」

乍恐口上書ヲ以御訴訟申上候

一、拙寺門中高平山遍照院ハ、数拾年以前ニ高野山方木食秀海上人当国^(江)被_レ參、諸人信仰仕、則飯田村并久野領之内三沢村両郷地境芝間之地ヲ両村方木食^(江)寄附仕、依_レ之木食被_レ持来候弘法大師に堂ヲ建立被_レ致寄進之地ニ而、松杉を自身被_レ植置_一候由、近里之人々迄も申伝来候御事。

一、木食遷化之後、拙僧方五代以前龍義代ニ支配ニ相極申候。其後諸国^(江)本末之御改御座候節も江戸 寺社御奉行へも西楽寺門徒ニ書上申候御事。

一、拙僧方四代以前西楽寺住持有香高平^(延宝五ノ一六七七)隱居被_レ致候。宥香存命之内、三拾三年以前巳_ノ年^(延宝五ノ一六七七)江戸方御検地御奉行松平市右衛門殿廻御_レ被_レ成、中泉御代官秋鹿長兵衛殿御立会ニ而、遍照院境内御検地被_レ成、畑山^(共)御除地ニ罷成、其節飯田村之帳面ニも御結被_レ成候。併領分境又ハ同之所務も無_一御座_一候故、只今迄住持も不_二相立_一西楽寺方兼帯仕来候御事。

一、高平山南西ノ方ニ小竹數御座候。其谷通ニ芝間御座候所、西楽寺代々ノ住持支配被_レ仕候所ニ、時ヶ谷方五郎太夫と申者式拾ヶ年以前方深谷^(江)引越候而後、少々宛畑_ニ開_キ候得共、出家之境界故達_而不_二相改_一、今更残念之由、先住宥弁も其段ヲ拙僧へ被_二申渡_一候。只今ハ畑之分ハ巳_ノ新田之御竿も請候由申_ニ付不_レ及_ニ是非_一候御事。

一、先住宥弁代ニ高平西南尾崎_ニ木食代方立木候松_三老本_一ころび候を^(又式)拾_二老年_一以前卯年八月廿四日ニ手前^(江)被_二切取_一候御事。
 (六九九ノ元禄十二年己卯)

一、高平隱居宥香遷化之後、山之木も段々被_二盜取_一、拙僧代代^(宥)罷成漸々式百七拾本余御座候而^(松杉大尺五寸余)山梨町金石衛門ニ売_レ申候。其節山境折下リニハ或ハ松或杉を立置申候御事。

十所大権現奇進鑄新鐘建立仏前鐘「

^(是生滅法ツク時)

処也夕諸行无常之金音。五障之迷「

水游泥澄、速_ニ自性之開心蓮朝「

之睡眠以三百八之発音_ヲ驚覺。施_ニ時性_一「

法水添_レ流而精現当二世之所願^(而)」

願以此功德 普及「

我等与衆生 皆共「

時代常陸国笠間之生権大僧都法印宥宝学頭住

林徳寺賢栄

大 坊尊悦

円樹院舜清

多法寺宥敬

西尾五郎左右衛門

大工 山田 九郎兵衛

小工 五郎左衛門

下山梨村 ○九衛門

厚見 三郎右衛門

大石 彦助

原田 弥惣左衛門

元^(一六九九)和^(五)五^(九)紀^(一)

施主 白「

(紙背)

「鐘願主 宥宝」(注54)

こうして比較すると、『当山諸由緒扣』は、鐘銘の前半部の一部のみしか筆写していない

(破損がひどくて筆写できなかった?)が、割と正確に書き写していることが分かる。

この他、現在分かっているところでは、『当山諸由緒扣』収録順15 「隆覚寺書上」と

「延宝三年(一六七五)二月二日(隆覚寺書上) 西楽寺文書近世一〇五三(組み合わせ

①)、『当山諸由緒扣』収録順17 「高平秀海上人由来」と「年月日不明「高平秀海上

人由来聞書」 西楽寺文書近世二四(組み合わせ②)、『当山諸由緒扣』収録順18

右之通少も紛無_一御座_一候。然_ルニ南西ニ相当リ折下リニ為_二境目_一木食以来立来_リ候松五本残置候所ニ此度右五本之内沓本深谷五郎太夫子忠兵衛根切仕此方方相断候所持山之内之木ニ而候へ者、御公儀様御用木ニ切申候由返答仕候。御公儀様御用被_二召上_一候。義拙僧少も不_レ及_ニ異儀^(議)候得共、此五本之木忠兵衛支配ニ罷成候へ者、先住宥弁代之ころび木之跡ハ不_レ及_ニ申^(一七〇四)、六年前拙僧私申候切跡も両村百姓地ニ罷成、拙僧代ニ大師山大分減少仕候段、何共迷惑ニ奉_レ存候。五本之松立所与先年之手前へ切取候跡与御見分被_二仰付_一、向後之山境ヲ以立被_レ遊被_レ下候ハ者忝可_レ奉_レ存候。以上。

宝永六年^(一七〇九)

御奉行所

「宝永六年(一七〇九)「乍恐口上書を以御訴訟申上候」西楽寺文書近世一〇二四」

乍恐口上書を以御訴訟申上候^(以下同)

一、拙僧門中高平山遍照院ハ、数拾年以前ニ高野山方木食秀海上人当国^(江)被_レ參、諸人信仰仕、則飯田村并久能領之内三沢村両郷地境芝間之地を両村方木食^(江)寄附仕、依_レ之木食被_レ持来_一候弘法大師ニ堂を建立被_レ致、寄進之地ニ候。松、杉を^(自身)被_二植置_一候由、近里之人々迄も申伝来候御事。

一、木食遷化之後、西楽寺四代龍義代ニ支配ニ相極申候。其後諸国^(江)本末之御改御座候節、江戸御寺社へも西楽寺門徒ニ書上申候御事。

一、西楽寺五代宥香高平^(延宝五ノ一六七七)隱居被_レ致候。宥香存命之内、三拾三年以前巳_ノ年、江戸方御検地御奉行松平市右衛門殿廻御_レ被_レ成、中泉御代官秋鹿長兵衛殿御立会ニ而、遍照院境内御検地被_レ成、畑・山共ニ御除地ニ罷成、其節飯田之帳面ニ御結被_レ成候。併領分境又ハ何之所務も無_一御座_一候故、只今迄住持も不_二相立_一、西楽寺方兼帯仕来候御事。

一、高平南西之方ニ小竹之藪御座候。其^(宥)通ニ芝間御座候所、西楽寺代々ノ住持支配被_レ仕候所ニ、時ヶ谷方五郎太夫と申者式拾ヶ年以前方深谷^(江)引越_ニ而後、少々宛畑_ニ開_キ候得共、出家之境界故、達_而不_二相改_一、今更残念之由先住宥弁も其段を拙僧^(江)被_二申渡_一候。只今ハ畑之分ハ巳_ノ新田之御竿も請候由申_ニ付不_レ及_ニ是非_一候御事。

一、先住宥弁代ニ高平西南之尾崎_ニ木食代方在来候松_三老本_一ころび候を、^(一六九八ノ元禄十一年戊寅)拾_二式年_一以前巳_ノ八月廿四日ニ手前へ被_二切取_一候御事。

〔足立家記録 二〕宝永地震後の記述は、揺れをはじめとした、北原川村周辺の被害、復興については、実際に体験し、また、すぐに情報が入る環境にあったようで、一定の信憑性がありそうだが、富士山噴火をはじめとした、遠隔地の情報については、不正確な点も含む伝聞、風聞だと考えるのが良いだろう。

では、袋井の復興の様子はどのようなものだったのか。(足立家記録 二)によると、袋井(袋井町)の復興については、江戸の丹嶋屋が請け負ったという。

請負金額は一万四千両。その内の五千八百両を、丹嶋屋から、袋井の地元業者に分配し、地元で復興した。これは宝永五年(一七〇八)の閏正月中に行われたが、復興に取りかかるのに丁度良い時期を見計らってやったものだという。

江戸幕府が入札に参加する業者を指名し、落札した業者に大名から普請を請け負わせるという仕組みは、元禄地震のときに、萩原重秀が幕府の財政難の中で考え出した方式だが(注46)、袋井の普請でもその方式が用いられたらしい。

また、(足立家記録 二)によれば、宝永五年(一七〇八)閏正月下旬には、富士山の焼け灰(テフラ)除去の費用を百姓に割り当てることになり、三月に払ったという。

テフラの被害を受けた地域では、テフラによって山野などが埋め尽くされたため飢饉がひどく、当初御救夫食米の支給(実際には貨幣で支給された)があったが、生活の復旧のため、住民は、幕府からの砂除の補助を求めたという(注47)。

この砂除金は、宝永五年(一七〇八)中に見積もられ、宝永六年(一七〇九)に行われたが、(足立家記録 二)では宝永五年閏正月のこととなっている。宝永五年の閏月の配置は閏正月で合っているので、年月日の誤りとは考えにくい。

後に書いたものなので間違えた可能性もあるが、「閏」を書き落とすならともかく、閏月のときにそうした出来事があった、と間違えることはあまりないように思う。もしかしたら、右で紹介した、永原著書で紹介されている砂除金とは別の砂除金かもしれない。

〔足立家記録 二〕の内容については、今後、より詳細に分析していくことが必要だが、被害から復興まで、新たな情報を伝えてくれる貴重な史料となっている(注48)。

〔小括〕

〔足立家記録 二〕から、今まで知られていなかった名栗・久津部・上貫名・北原川・不入斗・袋井町の宝永地震被害を明らかにした。

また、袋井町の復興については、江戸の丹嶋屋が請け負ったことが明らかになった。

請負金額は一万四千両。その内の五千八百両を、丹嶋屋から、袋井の地元業者に分配し、地元で復興した。これは宝永五年(一七〇八)の閏正月中に行われたが、復興に取り

九〇度顛倒した書き込みの内容、堅帳大四葉目裏の「維時慶応四戊辰歳八月十二日改拾九葉現住宥盛代 改加江置者也」が堅帳大の最も遅い時期の書き込みと考えられること、堅帳大と二冊目の堅帳(以下堅帳小)の間に、「宥盛記」と書かれた一紙が挿入されていることから、『当山諸由緒扣』は、文化年間頃から書写が始められ、最終的には、宥盛(天保十年(一八三九)に西楽寺塔頭梅本坊の住職、嘉永三年(一八五〇)明治六年(一八七三)に西楽寺住職)の手によって現在の形にされたものと見られる。

堅帳大の原型は文化年間に成立し、それを宥盛が加工した、と見て良からう。

続いて、堅帳小の内容を検討する。堅帳小の冒頭に、「結衆帳序」という記事が引用されている。これは、文面に異同があるものの、西楽寺文書近世一〇号『新可結衆牒』の序文「新可結衆牒序」と同じものようだ。左に「新可結衆牒序」の文面を引用する。

新可結衆牒序

夫新可結衆之旨趣者、正於大衆之名実、書於位次之星霜、而以為令無列席謬誤之所存也。伏惟安養山西楽寺之興起者、往昔行基薩埵之創業。誰敢不俯仰矣。中古変法相而改密場、最為新義談林。繁華雖異他、痛哉、数歳遭兵乱、而租風速頹敗。纒事僧挑於法灯之函、或看守漸住山而、前代之法脉尽糾紛焉。雖然天運循環無往不復、当宗廟、

東照宮神武之德隆盛、治教休明。於是神社仏閣如旧例、輝威光。吾山有二台命、而寺務料米山林等任先蹤、免許之。于時住僧宥宝阿闍梨中興之祖師也。亦到于尊堯法印之代、歎於法流駁雜、再改而思相統速飛、錫於洛東醍醐里、請于報恩院寛濟僧正、而從締於本末之因。永以紹隆之疑、於天下泰平国家安鎮之丹誠矣。特去元禄第九庚申春、武陽四員之内真福性遍和尚招于当院宥弁法印、鎌田山金剛院尊祐法印、而使三箇精舍定於遠州一派常法談所。爾來勸誡於両山衆徒、暨門下末流。列會二九所化、而、夏冬鳴、不易論鼓。以是掟為将来規矩、聊不可有断絶者也。故自新可始結三名席、而、備于出世階級之龜鏡云。

宥宝永元甲申歳林鐘日

当山第八世阿闍梨法印尊昭(印)(印)(注50)

続いて『当山諸由緒扣』所引「結衆帳序」を、原文の文字組で引用する。

(19) 結衆帳序

遠州宇知郷安養山

西楽寺

夫当山日記創建者行基菩薩、改真言地為新

義常法談所乱世之刻失其功或時事或時宥守

かかるのに丁度良い時期を見計らってやったものだという。

三 宝永地震からの復興 西楽寺の場合

袋井市春岡に位置する安養山西楽寺には、四〇〇点以上の古文書が残されている。

その西楽寺文書中にも、宝永地震からの復興に関する史料が残されている。それは、『当山諸由緒扣』所引正徳元年(一七二二)尊昭書状である。

『当山諸由緒扣』(西楽寺文書近世二)／西楽寺所蔵)は堅帳(袋綴の和綴じノート)である。しかし、単純な二冊の堅帳ではなく、後ろから見ると、大小二冊のノートを綴じたものと分かる。二冊目の堅帳の方が大きいので、以下、二冊目の堅帳を「堅帳大」、二冊目の堅帳を「堅帳小」と呼ぶ。また、中を確認すると、大小二冊の堅帳の間に、書付(以下「紙」と呼ぶ)が一枚綴じられている。それぞれの大きさは以下のとおり。

堅帳大 縦291mm×横200mm×厚4mm
一紙 縦256mm×横154mm(二つ折り)／袋綴じのため開披不能)
堅帳小 縦255mm×横165mm×厚1mm

『当山諸由緒扣』は、郷土史家の鈴木勝も紹介しているが(注49)、鈴木は部分的に文字起しをしたのみで、史料の性格については分析を行っていない。そこで、『当山諸由緒扣』の堅帳大・紙・堅帳小、それぞれの成立を考えてみたい。

堅帳大の場合、三葉目表(表紙をめくった次にある冒頭ページを「葉目表と数える)に、右に九〇度顛倒した「古キ書有之間、文化十一戊年、此所写置者也」という書き込みがある。この記述から、文化十一年(一八一四)頃に書写編集が行われたことが分かる。

このことは、四葉目表にある、右に九〇度顛倒した書き込みに「右付、平左衛門子新五右衛門名前、一札西楽寺江入置候処、文化 論地之節、新証文取替、古記文者市場村林光寺旦那返申候」とあることから裏付けられる。文化年間前後に堅帳大の原型が成立した、とみて良いのではないだろうか。

堅帳大の最後の書き込みは、二葉目裏にある宥盛(西楽寺十九世住職)による慶応四年(一八六八)のものだ。「維于時慶応四戊辰歳八月十二日改拾九葉現住宥盛代 改加江置者也」とあるが、少し前のところから見ると、鐘銘を書き写したところがあり、鐘銘が何度か改められており、改められた銘文を収録するとともに、その旨注記したもののようだ。

また、間に挟まった二紙には、安政五年(一八五八)三月、慶応元年(一八六五)閏五月のの記事があり、「宥盛記」と書かれている。

住之法脉紛糾星霜押移、東照君御朱印頂戴以来随

再住僧尊堯、隨醜酬報恩院寛僧正相統両部法流

特、天下国家精誠繁多也于時元禄九歳庚申春江府

四院内前真福性遍和尚召当寺及鎌田山金剛院被

(19) 定当国之両談林依茲勸両山之衆徒門末等列二

九所化鳴夏冬不易論鼓以祈 台寿御願定為

万歳勸是以自新可初結其名為世階汲之龜鏡

者也

宥宝永元甲申林鐘日(注51)

明らかに、『当山諸由緒扣』所引「結衆帳序」には推敲の痕跡がある。

『新可結衆牒』は、西楽寺八世住職尊昭の時から書き始められた、新たに印可された僧侶の名簿である。名簿を見ると、西楽寺十三世住職元宜の弟子のところまでは書き継がれていたことが分かる。『新可結衆牒』末尾、元宜の弟子(元宜の弟子たちは、寛政六年(一七九四)に新可、と書き込み)の次に、彼らとはかなり長い時期的間隔を置いて、宥盛が自分の名前を記している(宥盛が書き込んだ新可の年は天保九年(一八三八)(注52))。このことは、元宜たちの世代の後、しばらく存在を忘れられていた『新可結衆牒』を宥盛が発見し、自分の名前を書き足した、という可能性を感じさせる。

ここで、『当山諸由緒扣』堅帳小に引用された「結衆帳序」の文面が、『新可結衆牒』序文「新可結衆牒序」の文面と異なっており、かつ『当山諸由緒扣』所引「結衆帳序」に推敲の痕跡があることに注目したい。

このことは、『当山諸由緒扣』堅帳小に引かれた「結衆帳序」は、『新可結衆牒』の序文を見て書いたものではなく、『新可結衆牒序』作者の尊昭の下書きによって示している。また、後世の人物が尊昭の下書きから筆写したとすれば、そこに推敲を加えていることは極めて不自然と言える。

『当山諸由緒扣』堅帳小に書かれた記事の年代を見ると、登場順に、宝永元年(一七〇四)、宝永五年(一七〇八)、元禄十七年(一七〇四)、正徳三年(一七三三)、正徳元年(一七二二)、宝永三年(一七〇六)と、全て尊昭が活動していた頃の年号が書かれている。

また、登場する人物も、宥榮、宥喜、宥弁、尊昭、木食直心と、尊昭の頃に活動していた人物ばかりである。

つまり、『当山諸由緒扣』堅帳小は、尊昭の頃のことを書かれた記録であると言える。『結衆帳序』が下書きであることから、私は、『当山諸由緒扣』堅帳小は、尊昭自身が書

(一六九九)
元禄十二年

卯之九月十五日

(署名、宛先略)(注38)

内容を簡単にまとめると以下のようになる。

① 遠江国山名郡浅羽庄高一万石には、長さ三里十八丁の堤と、五十六艘の込樋がある。

② 近年水損が続き、浅羽庄の作毛が皆無になってしまった。

③ 元禄十一年(一六九八)には、六千石がだめになった。

④ 元禄十二年(一六九九)の夏にも、作毛不良につき、願書を出した。

⑤ 元禄十二年(一六九九)八月十五日の大風潮により、横砂入江の塩開堤の江之橋という場所の込二口を水が押し抜き、そのほか堤一九八四間が打ち崩され、中でも十三箇所が大きく切れ、潮が押し入り、八千石余の田地田畑が皆無となった。

⑥ このままでは、百姓が餓死してしまうので、検使を派遣し、公儀の費用でもって堤や込の修復などの対応をしてほしい。

史料を見る限り、元禄十二年(一六九九)八月十五日の大風潮による被害は大きく、横須賀入江から水が浅羽に入り込んでいる。

右に引用した「浅羽惣開堤修復願書」に記された水害の結果を見ると、水害もさることながら、田地田畑の作毛の被害こそが重大で、夫食(ここでは食糧の意)不足、そして餓死という凄惨な被害が出そうになっていたことが分かる。関連史料が無いので分からないが、実際に餓死の被害が出ていたかもしれない。

こうした災害の前に、当時の五代將軍徳川綱吉は、日光東照宮大修復、護国寺、護持院、寛永寺根本中堂の造営などにより多額の出費をしていた。その対応のため、萩原重秀は、元禄八年(一六九五)に貨幣を改鑄し、慶長金銀の質を下げた。その差益金で、一時的に幕府財政は回復していたが、右の大水害、大凶作に加え、元禄地震が起こったため、幕府財政は甚大な損害を蒙ることとなった(注39)。

なお、「足立家記録 二」元禄十六年(一七〇三)十二月二十六・二十八日条には「同十二月廿六日・八日」中地しん。霜月拾月□□もゆり」「(注40)とあり、北原川村でも、少なくとも十二月末頃まで揺れを感じていたことが分かる。史料の状態が悪く読みにくい部分もあるが、十月にも揺れているらしいので、他の地震かもしれない。

「小括」

〔足立家記録 二〕元禄十六年(一七〇三)十二月二十二日条に収録されている元禄地震の記事は、全国的な元禄地震の研究成果と照らし合わせてみても信憑性が高い。

近所なれとも、吉原方西へ風むき能御座候間、あまり火さき石砂来不申候。同極月八日迄焼、八日晚ニひしと焼留り申候。則富士山ニ焼吹上石たまり、富士山のことの小山出来。則年号ヲ以宝永山と名付申候。東風下ノ国小砂八寸巻尺、近キハ三尺五尺積リ、麦作すたり申候。

同霜月廿六日ニ日光ミヤ様御下り大分人足百石十人かへりニ当り申候。袋井地震ニつ

ふれ申候故ハ木わたか直一両二十貫位仕候。尾張伊勢・西国八月大分大風吹、木わたちかひ、遠州・駿川計能御座候。

同其年暮ニ町ニ地震ニつふれ申候。御領所之町も、公方様方御普請被成被下、

大名四頭御手つだひニ付、三月切ノ御普請ニ御座候。前代ニなき事ニ候由ニ御座候。

袋井町普請老万四千両ニ江戸町人丹嶋屋請来リ、又袋井町人惣町普請修覆五千八

百両ニ丹嶋屋方請ケ人ニわけ、手前普請ニ御座候。岡津山丹嶋や少々木うけ袋井(売

リ申候。

同極月米相場廿式俵位仕候。庄三郎村之本屋敷へ引越、跡ノ家源六ニ相わたし申候。

源六妻ヲ入レ申候。□之娘也。地震極月末ニハ大方しづまり申候。我等田地甚六手

前々請ケ返し申候。

〔宝永五年戊子〕正月一日雨ふり晚ニ日和能御座候。米相場□□十兩ニ廿表位仕候。

殊袋井普請故一両ニ四貫百位仕候。段々下リ申候。

其年地震故殊之外あしくかに御座候。

閏正月中ニ袋井普請仕候。前代ニなき事。袋井普請ニ江戸丹嶋屋老万兩余ニて請ケ

五千兩余ニて町衆中へわたし、時分ノ普請ニ御座候。町中ニ残金有レ之候。

同閏正月下旬ニ不二山やけはい甲州・さがミ、伊豆・駿川、やけ灰取金子百姓、当リ、

百石ニ式兩も日本不レ残新田分迄出し申候。三月ニ金子出し、十八万石ノ分ニ御座候

由。(注41)

以下、「足立家記録 二」宝永地震条の記事を讀んでいこう。

宝永四年(一七〇七)十月某日(後文に「十月四日以後小地震」日ニ五度七度も十日計りゆり」とあることから四日と分かる)の昼八つ上刻半時(十四時半頃)に大地震が起こった。石居えの家は大方潰れたが、昼だったので死者は少なかった。

名栗町では家六軒ばかり潰れた。その他の家は大分傾いた。久津部の家も大分潰れ、上貫名でも家が潰れた。北原川・不入斗には破損の家はなかった。地震の揺れ方には場所によって差があるらしい云々。名栗・久津部・上貫名・不入斗は北原川村の近くにある。

袋井町・掛川は残らず潰れ、袋井では、五、六軒が残った。袋井の(後文に掛川のこと

北原川村には、元禄地震の詳しい情報が入ってきた。「祐之地震道記」の記述から、元禄地震当時、東海道を行き来する飛脚と旅人が重要かつ正確な情報源となっていたことが分かる。東海道沿いの北原川村も飛脚と旅人から情報を得ていた可能性が高い。

また、飯田村の金石衛門という人物は、免定を取りに江戸に行き、江戸から帰るときに畑に一人で泊り、そこで元禄地震に遭って、家に押し潰されて亡くなったという。

二 宝永地震

元禄地震の記事の検討から、「足立家記録 二」の内容について、二定以上の信憑性が確認できた。では、「足立家記録 二」の宝永地震の記事を讀んでみよう。

記事は、地震が起こった十月(四日)から始まっているが、後でまとめて書いたような書きぶりとなっている。ひとまず、「宝永地震条」として引用する。

(宝永四年/一七〇七)

△同十月ノ昼八ツ上刻半時、大地震仕、前代ニなき大地震ニて、石ずへの家大かたつ

れ申候。然レども登ニて御座候間、人死人少々御座候。名栗町ニてハ家六間計リ、甚

太郎・源六・庄五郎・甚左衛門・六兵へ六間つぶれ、庄三郎かまやつふれ申候。

其外之家大分かたぎ申候。其内半右衛門・金石衛門・喜兵へ家ハ少々破損有レ之。

久津部五郎右衛門家つぶれ、其外家大分つぶれ申候。上貫名も家つぶれ、北原川・

不入斗ニハ破損家無レ之候。地震ゆりやうニ軽重有レ之候。袋井町欠川不レ残つぶ

れ、袋井ニハ五、六間残り申候。死人十四、五人、手負拾人計。欠川ニ而ハ四、五

人死人せし。見付町・日坂町何事も無レ之候。金谷・嶋田少々之事ニ候。東国箱根

切、吉原迄大ゆり。箱根東少々ゆり、吉原町皆つぶれ。神原・おき津大分つぶれ、

西国ニてあしひ白砂、遠国大坂ニてハ朝五ツッ八ツ迄ゆり、大坂不レ残つぶれ、其

上津なミ打、家・舟共ニ大分被レ引、死人二万何千人御座候由。薩摩・四国大分ゆ

り、死人大分ニ風聞御座候。越後・信濃大分ゆり。十月四日以後小地震一日一夜

ニ五度七度も十日計りゆり、其内五日朝廿三日大ゆり老ツ御座候。皆々家ノすまひ

不レ成、外作ニて家作り」

(宝永四年/一七〇七)

同霜月四日ニこも西ノ方ニどろ／＼終日なり申候。是ハ信濃・越後ニ而震動ニて、

人死ニ申候。其節西国ノ境目山やけ申候故、震動仕候由ニ候。同廿三日ニこもかミな

りやうニどろ／＼昼方夜迄仕、同晩方富士山すはしり口すなふるひ、方火もへ上リ、

石砂さかミ、鎌倉江戸方へ風下へ吹、近所五尺、三尺、巻尺宛砕つもあり大分やけ、

ふじ近所甲州ニて、一里の内村里皆にげ、死人も有レ之、中々けしからぬ事ニ候。

が書かれているので、前半部は袋井の被害と推測される(死者は十四、五人。負傷者は十人ほど。掛川では四、五人が死亡。この他、見付町・日坂町は何事もなかった。

袋井近辺の被害はこのように書かれている。

この後、読みにくい部分もあるが、全国的な被害が列挙されている。随分詳しいが、先の元禄地震で見たように、飛脚や旅人などから情報を得たのだろう。「薩摩・四国大分ゆり、死人大分ニ風聞御座候」という記述もあるので、風聞の類も飛び回っていたことが分かる。

なお、宝永地震は、宝永四年十月四日(太陽暦一七〇七年十月二十八日)午後二時頃、南海トラフを震源として発生した大地震である。マグニチュード八、四と推定されていて、文献に記録された震災としては、史上最大級だったと言われている(注42)。

〔足立家記録 二〕に記された宝永地震の袋井周辺の被害状況は、これまで知られていなかった情報である。(足立家記録 二)では、震災発生時刻は昼八つ上刻半時(十四時半頃)とのことだが、宝永地震が発生したとされる午後二時ころとは十分ほどの差なので、震動が伝わる時差も加味すると、それほど不自然な差とは言えないだろう。

宝永地震の四十九日後、宝永四年(一七〇七)十二月二十三日(太陽暦一七〇七年十二月十六日)午前十一時頃に、富士山が噴火した。この噴火は和暦で十二月九日まで十六日間断続的に続き、新たに開いた宝永火口から噴出した火山礫や火山灰などの噴出物は、偏西風に乗って静岡県北東部から関東地方に降り注ぎ、甚大な被害をもたらした(注43)。

このときにできた宝永山のこと、(足立家記録 二)にも特記されている。

〔足立家記録 二〕でも「同廿三日ニこもかミなりやうニどろ／＼昼方夜迄仕」とあり、昼から夜までどろどろと音が鳴っていたと言う。前述のとおり、富士山の噴火は午前十一時頃に始まった。(足立家記録 二)には「同晩方富士山すはしり口すなふるひ、方火もへ上リ」云々とあるほか、文面を讀む限り、富士山噴火については、不正確な点を含む伝聞の記述となっている。北原川村から噴火は見えなかったようだ。

この他、「足立家記録 二」には、十一月四日頃からの鳴動が記録されている。信濃・越後云々や死者については、今詳らかではないが、鳴動については、地震の一ヶ月後くらいから、富士山麓では震動や地鳴り・地震が感じられたと言われている(注44)。

須走のことも(足立家記録 二)に記されているが、須走村は、宝永噴火の火山弾を真っ先に受け、大変な被害が出た地域である(注45)。

また、「足立家記録 二」には、テフラ(岩や砂などの噴出物の総称)が、風に乗って東方に降り注いだことが記されている。このテフラは、この後、農業をはじめ、降り注いだ地域の人々の生活に、大きな影響を与えた。

十一年(二七二六)五月二十四日までの記事が収録されている。

この後に紹介する引用文を見ると明らかだが、「足立家記録 二」は、必ずしも毎日記されていたわけではなく、数日分まとめて記していたと見られる部分も多い。ここで問題となる記事の信憑性についても、以下に史料を読みながら検討していきたい。

では、元禄地震の記事について検討していこう。「足立家記録 二」元禄十六年(二七〇三)十二月二十二日条を見てみよう。「足立家記録 二」には表紙がないため、最初のページを「葉目表」とし、その次のページを「葉目裏」とすると、当該記事は三十九葉目裏にある。

(元禄十六年/一七〇三)
同霜月廿二日夜明テ八ツ時分ニ大地しん仕候而箱根江戸迄別而大ニゆり、町之家つぶれ、人馬死申候。小田原丁地しんニ火事出来ニ而、御城共ニ不レ残焼払申候。箱根畑町も五間計ツつぶれ、飯田村金右衛門と申仁、免定取リ参リ、江戸帰リニ畑ニ吉人を「葉目表」とし、その次のページを「葉目裏」とすると、当該記事は三十九葉目裏にある。

「足立家記録 二」は、時折、記事の末尾にその時々作柄と物価を注記している。この条も末尾にそうした注記がされているが、本文の内容とは直接的には関わらない。

元禄地震の被害が記されている。発生時刻は元禄十六年十一月二十二日の夜が明けて八ツ、丑刻ニ午前二時頃と書かれている。
箱根から江戸にかけて大きく揺れ、人馬が亡くなった。小田原町は地震に加えて火事が起き、お城とともに残らず焼けてしまった。

箱根畑町(畑宿)でも五軒ほど潰れ、丁度江戸に免定を取りに行っていた飯田村金右衛門という人が、帰り道に畑町に一人で泊っていて、家に押し潰されて亡くなった。

およそそのようなことが記されている。短いながら、かなり詳しい情報だが、現在分かっている元禄地震のデータと突き合わせてみよう。

元禄地震は、マグニチュード七・九〜八・〇。海溝型の地震であり、津波被害も大きく、地震、火事による家屋の被害は二万を越え、死者も一万人を越えたと言われている(注17)。元禄地震の揺れは長く続き、小田原では宝永四年(二七〇七)、すなわち、宝永地震の年まで揺れていたと伝わっている(注18)。

元禄地震は、元禄十六年十一月二十三日(太陽暦二七〇三年十二月三十一日)の丑刻に発生した(注19)。丑刻という時刻は、「足立家記録 二」の記述と一致する。

研究では、十二月二十三日の丑刻頃に地震発生とあるが、元禄地震に関する数少ない信頼できる史料の一つとされる(注20)『祐之地震道記』元禄十六年(二七〇三)十一月二十一日条を見ると、「十一月廿一日 江戸の邸館を発して、日暮る程に、戸塚の駅にやとりと

(前略)

今日、使を戸塚駅に差遣して、上方道中の事を尋問せしに、昨日三嶋より出たると云旅人に逢て尋ければ、三嶋も地震したりつれ共、家の戸障子など震倒したる計にて、人家崩れたる所なし。箱根峠の駅は顛倒して、関所の近所に残たる茶店ニ三宇有。関所は倒れず。畑村は人家たふれたり。坂の下方は、二子山の巖石崩れ落て、道を塞ぎ、従行者、岩のはさまを伝ひ通ふ。荷物は往来しかたし。馬は思ひもよらず。小田原は駅中焼亡せり。それより大磯、平塚、藤沢の駅も、人家頽れて、駅路の便なしとぞ。今日日の中、地震時々やます。申の下刈雨降、終夜小雨降。夜中も地震時々やます。

(後略)(注26)

使者を派遣して、三嶋からの旅人を見つけ、情報を得ている。その後、『祐之地震道記』元禄十六年(二七〇三)十二月三〜四日条でも、飛脚が重要な情報源になっている。

三日 夜いまた明やらぬに、浜松を出て、六ツ半時分、荒井の舟に乗。船頭語けるは、廿九日の暮方より、江戸の方に火事見ゆる。明る朔日の日の出迄火気みえしか、其後は朝暉におされてみへす。昨夕江戸の飛脚通りつるか、大火事の由語りけるとぞ。日暮に赤坂の駅にとまる。

四日 赤坂を出て、藤川の駅に到る。江戸よりの飛脚の語けるとて、大火事の沙汰有。廿九日の夕方より、明る朔日の四ツ時分まで焼たり、その飛脚は、一日の四時分江戸を発したるか、其時火未消滅せざりき。火は小石川より出て、本庄へ焼ぬけたりとぞ。日暮て宮の駅に着ぬ。(注27)

矢田俊文は祐之の情報収集に注目し、祐之一行は、飛脚や旅人からの情報をもとに、被害の少ない地点を的確に選択し、可能な限り安全に旅をしていたと指摘している(注28)。

飛脚は災害情報伝達を業務の一つとしており、巻島隆によれば、幕府の触れによって飛脚による災害情報伝達が義務化されたのは延享三年(二七四六)だが、飛脚による災害情報伝達の慣例は、少なくとも天和年間(二六八一―二六八四)には遡りうるという(注29)。

北原川村も東海道沿いの村であり、海道を行く飛脚や旅人から情報を得やすい環境にある。飛脚や旅人たちから、詳細な情報を得た可能性は高い。

また、「足立家記録 二」宝永元年(二七〇四)四月一日?条(この条、五月十三日条と五月二十七日条の間にあり。五月十三日条の一部かもしれない)には、以下の記述がある。

(宝永元年/一七〇四)
同四月一日、年号替リ、宝永元年ニなり申候。江戸去年のじしんにて石つみ破損。春夏大分普請御座候。(注30)

江戸城は、元禄地震によって、櫓や門、石垣、塀などに多大な被害を蒙った(注31)。江

りぬ。門門といふと小石衛(二)ここで夜になり日付が改まつている／引用者注)丑半刻はかり、大地震、戸障子、小壁へた／と崩れかゝる(注21)とある。

『祐之地震道記』は、京都下鴨神社の神官梨木祐之が、用事があつて江戸に行った帰りに、戸塚宿で地震に遭い、そこから京都に戻るまでの日記で(袋井市域の記述はない)、昭和二十八年(一九五三)に公刊され、世に知られるようになった(注22)。

『祐之地震道記』はあくまで一例だが、元禄地震関係史料には、二十二日に地震発生とするものもあり、元禄地震発生時刻はどちらの日とするか、当時の感覚では曖昧な時間帯だったようで、「足立家記録 二」が、元禄地震を十一月二十二日条に収めていることは、その記事の信憑性を否定する材料にはならないだろう。

〔足立家記録 二〕に記された小田原の被害だが、元禄地震では小田原の被害が特に大きく、小田原城は大破。城下町も、直後の火災で壊滅した。幕府は、十二月二十八日には小田原城主の大久保隠岐守忠増に帰国の暇を与え、十二月二十九日には、大久保隠岐守忠増に金一万五千両を貸与した(注23)。この、幕府の小田原への対応は、東海道の要衝であり、江戸防衛の西側の拠点であることによる特別待遇とされている(注24)。

こうしたデータを見ると、「足立家記録 二」の記述は大分正確だと言えるだろう。

十一月二十二日条を記したのが少し後の時期だったとしても、どうして記主はこれほど正確な情報を得ることができたのだろうか。記事に登場する、畑町で亡くなった飯田村金右衛門と縁があつた可能性も否定できないが、『祐之地震道記』元禄十六年(二七〇三)十一月二十四日条を見ると以下のようにあり、東海道を歩き来る飛脚や旅人が重要な情報源となつていたことが分かる。

廿四日 辰刻許、旅宿の前の海道を、飛脚一人通る。よひまねきて、いつこよりいつかたへ行と問たりければ、鎌倉の法界寺より、江戸の植野へ、地震注進の飛脚也といふ。さあらはとて、書状壺封をたのみて、江戸に送りぬ。又、江戸の方より、上方へ飛脚の者通ると聞つけて、是もことつて、書状を故国へ送り、

江戸筋地震、おひた、しく沙汰有たれと、実説知かたきゆへに、注し付す。小田原も大地震にて、宿中の家顛倒せり。その折ふし、城内より火出て、駅家焼亡のよし、日々風聞有。大磯よりこなたの駅程も、悉顛倒して、旅宿かひかたきよし、とり／＼沙汰あり。

(後略)(注25)

旅宿の前の東海道を、一人の飛脚が通つたので、呼び招き、京都へ地震の情報を書状に認め托したという。また、同日条には以下のような記事も記されている。

戸城修復普請については、幕府の財政難から請負体制がこのときに変わったこともあり、研究もされている(注32)。こうした江戸城の情報も、北原川村に伝わっていたらしい。

江戸城の修復はともかくとして、元禄地震への幕府の対応は、袋井にも関わりどころがある。ここで簡単に説明しておこう。

寛永十年(一六三三)正月二十日の小田原地震、慶安二年(一六四九)六月二十日の武蔵地震など、元禄地震の半世紀前、関東は地震が相次いでいた(注33)。その中で、幕府は、諸大名による地震見舞の御機嫌伺いの習慣の禁止など、混乱を起こしかねない習慣を禁止し、元禄地震までに災害対応体制を整えていた。事実、慶安二年(一六四九)の武蔵地震では、発災から江戸城修復命令まで五日かかっていたところ、元禄地震では、発災から江戸城修復命令まで二日に短縮されており、作業の効率化に成功している(注34)。

しかし、全体的には、災害にともなう流言飛語の横行や物価高騰などに対して効果的な手が打てず、幕府は失策が続いた、と言われている(注35)。

元禄地震では、小田原に限らず、幕府は旗本や諸大名に復興支援のための諸政策を行っていた。直近に幕府から旗本、諸大名に出された拝借金の返納延期と、元禄十六年(二七〇三)返済分を諸大名や旗本へ返すなど、金銭的援助を行った(注36)のだが、この拝借金は、元禄十二年(二六九九)秋の暴風雨による諸国での凶作、元禄十五年(二七〇二)秋々冬の奥羽地方での凶作に対して与えられたものと推定されている(注37)。

右に紹介した元禄十二年(二六九九)秋の暴風雨による諸国での凶作は、袋井市域にも大きな被害をもたらしていた。

乍恐願書を以御訴訟申上候

一 遠江国山名郡浅羽之庄高老万石余之所、三里拾八丁之圍堤垵樋五拾六艘御座候。近年水損打続作毛皆無仕候儀、右之堤垵不丈夫ニ御座候故、去寅之年六千石余皆捨リニ罷成、百姓及困窮、当夏も願書を以申上候所、又当八月十五日之大風潮ニ而横砂入江塩圍堤江之橋と申場所之垵二口押貫、其外堤千九百八拾四間打崩シ、内十三ヶ所大切レ塩押入、八千石余之御田地畑共ニ皆無ニ罷成、当作毛一粒も無ニ御座ニ候。依レ之百姓夫食ニ指詰り御地頭様方江奉レ願候へ共、御知行所大分不作仕候ニ付、夫食者難レ及と御意被レ成候。唯今之通ニ御差置可レ被レ為レ遊候ハ、御田地も野川と罷成、百姓も餓死仕候。乍恐御検使様奉レ願候。浅羽惣圍堤垵当作毛之趣御見分ニ奉レ入、御了簡之上右願之村々御一領之御支配ニ被レ為レ遊、御 公儀様御入用を以年々堤垵御修復被レ為レ遊被レ下候ハ、御上納仕百姓も御田地ニ有付渡世送申度奉レ願候。以上。

江戸時代における

災害復興と災害情報伝達

――北原川村(現袋井市国本)と

西楽寺(袋井市春岡)の元禄地震・宝永地震――

袋井市歴史文化館 杉山侑暉

はじめに

本稿は、袋井市域における、江戸時代の震災について、災害復興と災害情報伝達の実態を明らかにすることを目的とする。また、その根拠史料の成立過程や信憑性などもあわせて明らかにすることで、本稿で紹介した史料を災害史研究の共有財産としたい。

対象とする震災は元禄地震・宝永地震であり、令和三年度～令和六年度に発見(乃至再発見)された史料の紹介と分析を行う。

本稿の内容は、令和六年度に開講した、袋井市歴史文化館の市民向け講座「予習不要の古文書講座 災害史編」と、その内容をまとめたミニ展示「鳴動する地面 奔走する人間 情報伝達と復興の震災史」(注1)で紹介した内容の一部を再編したものとなっている。

震災史研究(特に近代的観測機器登場以前の歴史地震に関する研究)については、史料から被害の実態をできる限り復元し、その被害をもとに地震のデータを復元するという、いわば震災そのものを復元する研究が大きな柱として蓄積されている。そして、そうした研究成果も踏まえ、震災に対する人間の対応を分析した研究も進められている。

互いに関連して研究が進められているが、震災そのもののデータを復元する研究は自然科学の研究者が、災害対応史の研究は歴史学の研究者が主に行っているようだ。

右で触れたような多分野の災害史研究をまとめたものとして、内閣府の中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会が内閣府ホームページで公開している各種報告書や広報「ぼうさい」は、災害の基本データが参照できる貴重な成果となっている。

そのように、全国的に有名な災害については、各分野で成果が蓄積されている。本稿では、それらの成果を踏まえ、袋井市域での災害に対する人間の対応を中心に取り上げ、全国的な災害史研究の成果の中に位置づけたいと考えている。

ここで、従来の、袋井市域における震災史の紹介状況について触れておきたい。

袋井市域の震災史については、『袋井市史』、『浅羽町史』(袋井市と浅羽町は二〇〇五年

する注意が喚起されている現代においても最も重要な手順の一つとされていることはいうまでもない。また、「掘立柱の家ハ傾までにて倒れる」ことはなく、それに対して「石居(据)の家々皆一同に倒れてしまった」というのも興味深い。(注7)

『長溝村開発』中の災害教訓三点を紹介しているが、一点目の竹藪に逃げ込んだ、という記述が少し問題となる。『長溝村開発』の原文を紹介しよう。

一宝永四年[※]十月四日昼九ツ時分にも候半や、地震洩出す。其刻田舎風にて諸人^{ヒルネ}昼茶^{ヒルネ} 湯呑候節にて、家々^{タケキ}驚、先ツ焼火に水を打、外へ^{ソト}逃出、藪の内^{ヤブ}にハ竹の根有て、地^{サケ}裂さるよし聞伝、大抵^{キツク}藪の内へ^ノ這入、竹に取付居候へども、^{ツヨク}強動候程に、取付候竹をも^{ツノ}洩離され、^{コト}仮令洩鉢へ^{ツノ}団子を入れてゆるがごとく^{コロコロ}倒、初^{ツノ}の程は、親は子の手を取、^ノ老人は若き者^ヲに助られて家を逃れ出たれども、次第に強ゆる程に、親も子も老たるも、取組候手をも離され、東へ^ト寄らんとすれバ西へ^トゆり倒れ、所々の地裂て^{サケ}溝となり、井戸或ハ溝^ノ大水をゆり出し、西の流川其節^{ナガレ}濁水に候所に、^{ニハカ}俄に水涌出、川一ツ^{バイ}盃に^カ漉申候由、新田にて地震に逢候人々の^{ナガレ}咄に候。(後略) (注8)

『長溝村開発』を読むと、「藪の中には、竹の根があるので、地は裂けない」と言い伝えられていたので、藪に逃げたところ、揺れで竹から引き剥がされ、竹にぶつかり、すり鉢に団子を入れて振るったように転び倒れてしまい、よけい被害が大きくなったと言っている。これは、自然災害に対する先人の知恵が避難に当たって生かされた例ではなく、誤った言い伝えにより被害が起きたことに対する注意喚起を記した部分と言える。

このような、誤った言い伝えによる被害は、最近の災害史研究でも注目されている。例えば、安政三年七月二十三日(太陽暦一八五六年八月二十三日)午後一時頃に三陸沿岸部を襲った津波の際、「青葉の頃には津波無し」という伝承が地元にあったために、油断していたところ、四度にわたり津波が来襲したという証言が残っており(注9)、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会「1896 明治三陸地震津波 報告書」には、言い伝えを鵜呑みにする恐ろしさについて警鐘を鳴らす文章も掲載されている(注10)。

『長溝村開発』の記述も、伝承を鵜呑みにしてはいけない、という教訓であろう。

右と注6で『長溝村開発』は災害のデータとしては日時が不正確だ、と指摘したが、それは『長溝村開発』の価値を全て否定するものではない。出来事に関する記憶は残りやすからうし、何より『長溝村開発』は災害教訓書として貴重なものであり、例えば、礎石建築の耐震性能など、建築と防災を絡めた教訓化は、明治二十四年(一八九二)の濃尾地震の時に生まれた耐震建築という発想(注11)につながるものと言えるかもしれない。

『長溝村開発』は、従来行われてきた、災害情報の根拠史料としての読み方ではなく、

に合併)ともに、関連史料をいくらか紹介してはいるものの、『袋井市史 通史編』(注2)では、震災史については、一九四四年東南海地震について、戦争関係の記述の中で一ページ半(二五〇―二五一頁)ほど触れているのみ、それも、体験者の証言を一件載せるのみであって、史料を活かしきれているとは言えない。

一方、「宝永地震と安政東海地震」という節を設けている『浅羽町史 通史編』は、史料から家屋の被害件数などを紹介し、安政東海地震では雪隠の被害が少なかったことや、安政東海地震では、宝永地震により排水路が変わったことにより水損・旱損の被害が増えていたことが被害拡大につながったことなどを指摘している(注3)。

しかし、『浅羽町史 通史編』の宝永地震関係部分の中心をなしている「長溝村開発由緒書」(注4)は、袋井市域における既知の宝永地震関係史料としては唯一のものだが、後世の編纂物であり、さらに、宝永地震関係箇所は、「従是昔物語見聞所時之慰二書記」という、言い伝えを集めた箇所に収録されているため、内容の正確さには注意が必要となる(注5)。

『浅羽町史 通史編』は「長溝村開発由緒書」(以下史料原題の『長溝村開発』と表記する)の記述の正確さについては触れず、ただ現代語訳を紹介するのみだが、『長溝村開発』(従是昔物語見聞所時之慰二書記)に収録されている、延宝の高潮について記したとみられる箇所(『浅羽町史 資料編二 近世』八五九―八六一頁)もあわせて検討すると、『長溝村開発』は、日時については不正確であり、また、それほど正確に書こうとしていなかったと考えられる(注6)。

内容を読むと、『長溝村開発』の該当箇所は、災害情報を記録するというより、災害教訓を伝えることに主眼があり、災害データの正確な記録にはあまり注意していなかったことが分かる。『長溝村開発』は、災害データとしては話半分と考えた方が良からう。

『長溝村開発』が災害教訓を伝える書物であることは、『浅羽町史 通史編』にも指摘があり(五〇八頁)、その点は高く評価できるが、その箇所を読むと、残念ながら、その史料読解には不正確なところがあったことがうかがえる。

この開発由緒中の宝永地震に関する記述で注目したいのは、自然災害に対する先人の知恵が避難に当たって随所に生かされていることである。たとえば、地震発生後すぐに「家々驚、先ツ焼火に水を打」たのち、「藪の内にハ竹の根有て地裂さるよし聞伝」えていたので多くのものが竹藪に逃げたとある。また、揺れがある程度おさまった後に倒壊した家に戻り、まず「火の元心許なく聞炉裏の上の屋根切破り火を改見、水を懸けた」という。地震の際の初期消火は、二次災害を防ぐ意味で、東海地震に対

災害教訓書として読みなおすことで、真価を発揮するものではないかと私は考えている。

また、二〇一〇年に出された『袋井市防災史』は、三分の二以上が一九四四年東南海地震の体験記(既出文献からの引用)であり、そのほかの災害については既出文献の要約なので(注12)、今回あえて参照するべきものとは言えない。

以上に見たように、袋井市域の震災史研究には、ほとんど歴史地震に触れられていないこと、宝永地震については、従来唯一知られていた関係史料『長溝村開発』について、その記述に、少なくとも時間的な内容については、不正確な部分が多く(詳細は注6を参照)、引用に注意が必要であることが等閑視されてきた、という課題がある(注13)。

そのような状況下にあつては、袋井市域の新出震災関係史料を紹介すること自体にも、少なくとも袋井市にとつては、大きな意義があるだろう。

また、災害対応の具体例が増えることで、他地域の震災史研究にも、新たな検討材料が加わることを期待している。

なお、本稿で使用している西楽寺文書(西楽寺所蔵)については、西楽寺の丸山照範住職から使用の御許可をいただいた。感謝申し上げます。

一元禄地震

本稿では、北原川村(現袋井市国本)の(足立家記録)(注14)という史料を中心として、元禄地震と宝永地震について分析を進める。

北原川村は、袋井市を通る東海道東端部に位置していた村で、現在袋井市歴史文化館に寄贈されているものでは、二〇〇〇点ほどの史料が残されている。

〔足立家記録〕は、袋井市史編纂時に資料整理者がつけた史料名で、何冊かが現存している。今回紹介するものは、現在見つかっている内では古い方から二番目のもので、以下では便宜上(足立家記録 一二)と呼称する(注15)。

〔足立家記録〕の内容は日記のようで、一冊ごとに筆跡が異なることと、一冊ごとの収録期間の長さから、記主ごとに綴じられたものらしい。綴じ紐が新しいから、今の状態に綴じたのは袋井市史編纂者かもしれない。古い綴じ穴があり、読んだ限り、内容に目立った脱漏や乱丁は見られなかったことから、現状は、元々あった塊から古い綴じ紐を取り(あるいは既に取れていたか)、そのままの塊で新たに綴じたものと考えられる。

〔足立家記録 一二〕は、前欠がありそうだが、現存部分は、元禄二年(一六八九)十二月(冒頭の条は日付が欠けており、二番目の条は元禄二年極月二十七日の記事)から、享保

2024(令和6)年度 静岡県博物館協会 役員会、総会、事業報告

概要

今年度の役員会、総会は、ご参集頂いての開催を基本とし、会場への出席が難しい会員の便を図るため、オンラインでの参加も可とした。議案は全て原案通り可決され、事業計画に沿って、今年度も協会活動は進められた。

役員会、総会の実施について

静岡県立美術館講座室
5月21日(火)
13:30～14:30 役員会
15:00～16:30 総会

今年度の地域セミナーについて

ベルナール・ビュフェ美術館「わたしのパリーエッフェル塔をつくろう」→¥40,000-
公益財団法人佐野美術館「村上康成の世界」展関連イベント →¥20,000-
掛川市二の丸美術館「掛川城・横須賀城・高天神城のすべて」展関連イベント →¥50,000-
浜松科学館「秋の企画展 科学の学園祭2024」→¥90,000-

研修会、講習会について

今年度講習会は、ほぼ平時の状態で、三つの講習会を開催することが出来た。
「新しいミュージアムのかたち」9月3日(火) 会場：静岡県立美術館
「島田市 博物館・史跡見学会」12月11日(水) 会場：島田市博物館(本館・分館)、川越遺跡、諏訪原城、茶の都ミュージアム
「博物館の防災 資料レスキューの実際」3月12日(水) 会場：沼津市民文化センター

また、会員館園相互インタビュー「突撃! とんりのミュージアム」も、静岡県立美術館を会場として、12月16日(月)に開催することが出来た。インタビューの成果は、協会紀要と協会サイト内の会員用アーカイブで見ることが出来る。
(事務局 新田)

(参考)

2024(令和6)年度 事業計画

1 役員会・総会の開催

新型コロナ禍が終息の傾向にあると思われることを受け、対面開催を基本とし、会場への出席が難しい会員の便を図るため、オンラインでの参加も可とした。
会場：静岡県立美術館講座室
5月21日(火)
13:30～14:30 役員会
15:00～16:30 総会

議事:

- (1) 令和5年度事業報告及び決算
- (2) 令和6年度事業計画及び予算
- (3) 令和6年度地域セミナーについて
- (4) その他

2 研修会・講習会の実施

講習会、研修会の開催と共に、加盟館園相互インタビューも引き続き実施していきたい。

3 地域セミナーの開催

4 講演会等の共催・後援

5 静岡県博物館協会研究紀要 第48号の刊行

6 静岡県博物館協会ホームページの保守・運営、会員館園ウェブ環境支援

7 東海地区博物館連絡協議会理事会及び総会への出席

通例、静岡→愛知→山梨→神奈川→岐阜の順に開催しており、2024(令和6)年度は山梨県が当番である。

8 防災事業

事業推進グループによる天災時の安否確認、協会公式サイトでの会員用ページでの情報共有等を引き続き行なうと共に、静岡県の歴史史料ネット立ち上げを視野に入れた講習会の計画、また県内の防災資材確保のため、大型の冷凍庫1台と、梱包用資材の委託等を、今年も進めていきたい。

9 広報及び情報交換

10 事業推進グループによる事業の推進

- ・メンバーの任期は2年、2024(令和6)年度末まで。
- ・事業推進グループ会合は年間4回程度開催。

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1) 内容規定

加盟館員が従事している職務(展示・調査研究・保存・教育普及・その他)に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限られません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2) 執筆者規定

加盟館員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館員であることを条件とします。
※会員活動の報告や論評等で意義が認められる場合、例外を認めることがあります。

2. 入稿規定

(1) 原稿の種類

日本語による原稿を基本とします。

(2) 入稿の方法

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版(ボジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等)等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万が一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3) 分量

ページ数目安(1ページ当たり)	事例報告等(1~4ページ分程度)	事例報告等(1/2ページ分)
論文 縦書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	縦書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	縦書き 写真無しの場合 1,100字 写真有りの場合 900字
横書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	横書き 写真無しの場合 2,000字 写真有りの場合 1,600字	横書き 写真無しの場合 1,100字 写真有りの場合 900字

(4) 文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数(1シート) A4版 40字×30行

(5) 図版原稿(1ページの版面はA4)

カラー(巻頭図版) 掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。なお、当協会紀要は協会ウェブサイトにもアップされます。

(7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地(それぞれ〒、Tel.、Fax.番号)・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

(8) キーワードの設定

ウェブ上での検索を容易にするため、記事のキーワードを設定して下さい。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1) 日程(予定)

申込締切 2025年 11月末日
入稿締切 2026年 1月末日
発行予定 2026年 3月末日

(2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・執筆者 (複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記)
- ・題名 (仮題で可)
- ・分量見込(レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。)
- ・縦書き、横書きの希望

※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行いません。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4) 入稿の方法及び原稿の掲載

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-(3)で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正(図版等を含む)2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

(3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。

編集・発行

静岡県博物館協会(事務局)

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

静岡県立美術館内

電話・054-263-5857 FAX・054-263-5742

デザイン 有限会社 サイズ

印刷 有限会社 橋本印刷所

発行日 2025年(令和7年)3月31日